

# 尾 平 遺 跡

2000年3月

大阪府教育委員会



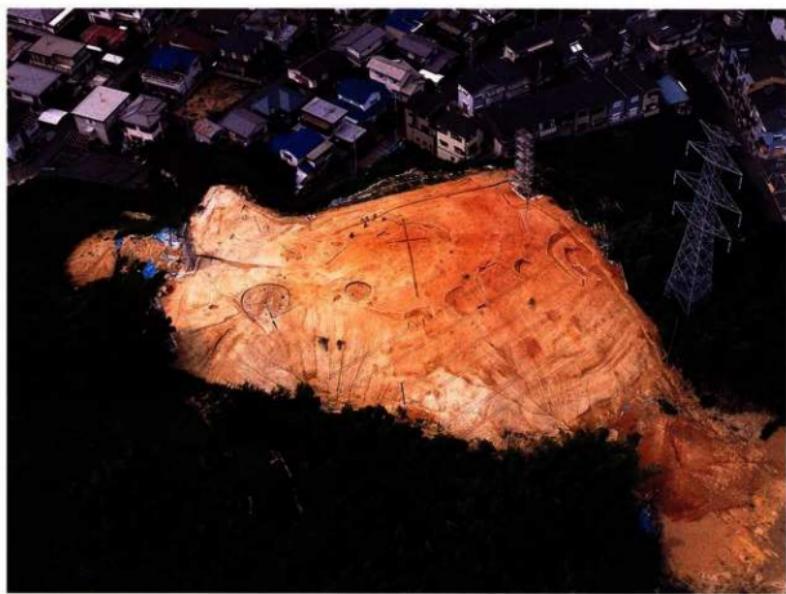
# 尾 平 遺 跡

一般国道309号線富田林バイパス東板持町地内

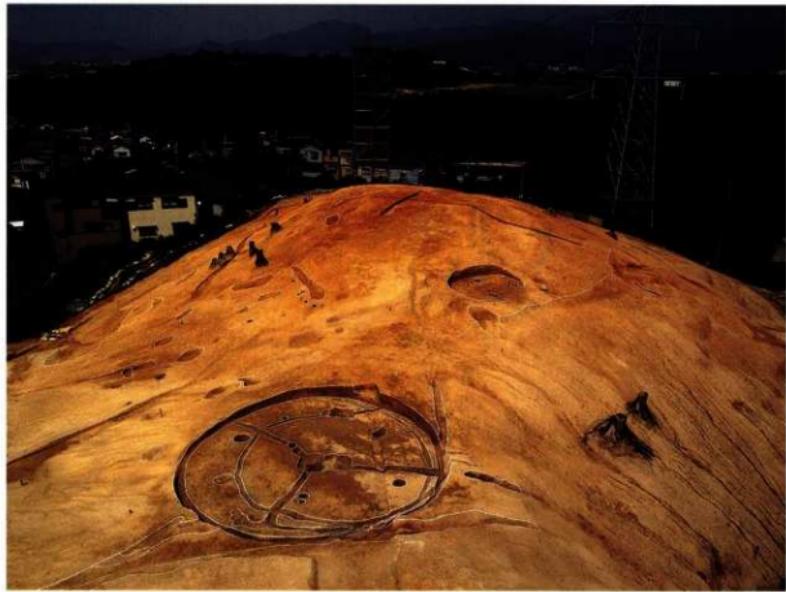
高地性集落と台状墓及び古墳の調査

2000年3月

大阪府教育委員会



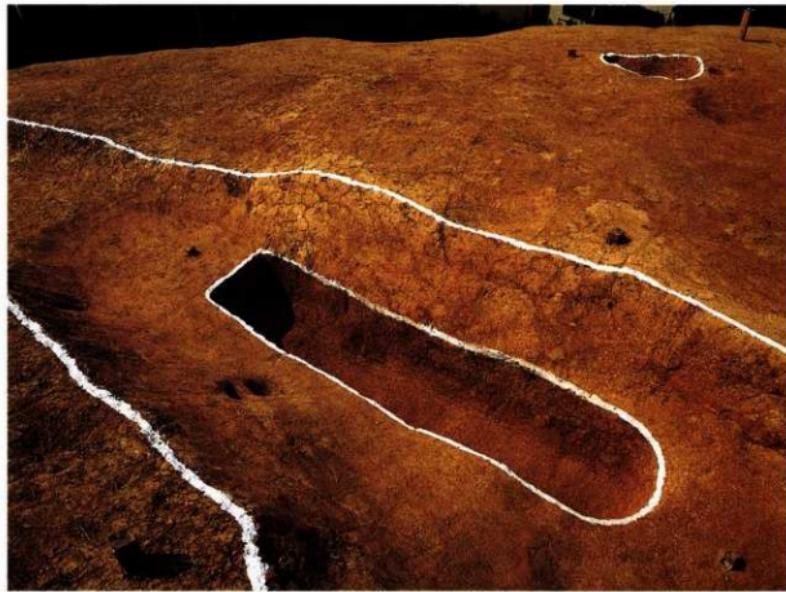
調査地全景



調査地全景



円形住居跡全景



土塚墓2全景

## はしがき

尾平遺跡は、東に金剛・葛城山脈を望み、西に石川と羽曳野丘陵、北は二上山から生駒山地、更には北摂の連山まで望める丘陵の絶好の位置に立地しています。足下には標高1125mの金剛山を源とする佐備川の清流が往時と同じく今も流れています。

一般国道309号道路改良事業に伴う発掘調査は、1978年12月の試掘調査から始め、翌年の新家遺跡の発掘調査を皮切りに、甲田南遺跡、西板持遺跡、神山丑神遺跡、柿ガ坪遺跡、尾平遺跡、寛弘寺遺跡の7遺跡の調査を幾度かの中斷をはさみながら含め、21年にわたり実施してまいりました。

今回の調査は、工事予定地の試掘調査を実施したところ、尾平遺跡が拡大していることが判明したため、発掘調査を行ったものです。

今年度の調査において弥生時代後期の竪穴住居跡やピット、溝等を検出し東板持地区の丘陵上にも弥生時代の集落が存在することを明らかにできました。

また新たに古墳と台状墓に土器棺墓を検出しました。これらの構造は板持古墳群に含めて考えて良く、この地区が弥生時代末頃から古墳時代にかけて墓域であることを知りました。

以上のごとく、これまでの知見に今回の成果を加えてこの地域の歴史像がさらに実り豊かなものになることを願います。

最後に発掘調査の実施にあたり大阪府富田林土木事務所、富田林市教育委員会並びに地元関係各位の多大なご支援とご協力にお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護にご理解とご協力下さいますようお願い致します。

平成12年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

- 1 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部の依頼をうけ、平成10年度に実施した一般国道309号富田林バイパス道路改築事業に伴う大阪府富田林市東板持町地内所在の尾平遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、文化財保護課、技師今村道雄を担当者として実施した。  
発掘調査は、平成10年3月1日に着手、同年7月31日まで行い、引き続き内業整理は、平成10年8月1日に着手し、平成11年3月31日まで実施した。  
遺物整理事業は、平成11年4月1日に着手し、平成12年3月31日に終了した。
- 3 調査にあたっては、大阪府土木部富田林土木事務所、富田林市教育委員会のほか地元関係者のかたがたから多大な援助を受けた。記して感謝の意を表したい。
- 4 本書に示した座標は、国土座標第VI座標系によるものであり、北は座標北を指す。  
標高は総てT. P. 表示した。
- 5 本書に示した遺物番号は通し番号であり、本文、遺物実測図、遺物写真図版すべてに一致する。
- 6 遺物写真撮影は、阿南写真工房に委託した。
- 7 本書の執筆、編集は今村がおこなった。

## 本文目次

第1章 調査に至る経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の方法.....	2
第2章 調査成果.....	3
第1節 調査区の立地.....	3
第2節 調査の概観.....	5
第3節 遺構と遺物.....	5
1 1区と土器棺の調査.....	5
台状墓（板持5号墳）の調査	
土器棺墓の調査	
2 2区の調査.....	14
溝・落ち込み等の調査	
3 3・4区の調査.....	17
住居跡の調査	
溝、土壤、ピット等の調査	
古墳（板持6号墳）の調査他	
4 5区他の遺構と遺物.....	
39	
第3章 まとめ.....	41
報告書抄録.....	49

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 尾平遺跡調査地区割表示図.....	2
第3図 遺跡分布図.....	4
第4図 バイバス平面図.....	6
第5図 台状墓（遺構42）地形測量図（表土除去後）.....	8
第6図 台状墓（遺構42）平面図	
第7図 台状墓（遺構42）十層断面図	
第8図 上墳墓1（遺構38）、2（遺構40）平面図、縦断面、横断面.....	9
第9図 土墳墓1（遺構38）・2（遺構40）土層断面図	
土壤（遺構115）平面図、土層断面図.....	10
第10図 上墳（遺構115）出土遺物実測図.....	10
第11図 土器棺1（遺構41）平面図、断面図 他.....	11
第12図 土器棺1（遺構41）遺物実測図.....	12
第13図 土器棺2（遺構12）平面図、断面図 他.....	12
第14図 土器棺2（遺構12）遺物実測図.....	13
第15図 土器棺3（遺構50）平面図、断面図 他.....	14
第16図 土器棺3（遺構50）遺物実測図.....	14
第17図 溝（遺構1～7）平面図、上層断面図.....	15
第18図 落込・溝（遺構8～11、13～15）平面図、土層断面図.....	16
第19図 住居跡1（遺構90）平面図、断面図.....	18

第20図	住居跡1 (遺構90) 土層断面図	19
第21図	住居跡1 (遺構90) ピット土層断面図	20
第22図	住居跡1 (遺構90) 山上遺物実測図 土器26~32、32~36、石器37~39	21
第23図	住居跡2 (遺構82) 平面図、遺物出土状態平面図 他	22
第24図	住居跡2 (遺構82) 山上遺物実測図41~56	23
第25図	住居跡3 (遺構71) 平面図、断面図 他	25
第26図	住居跡3 (遺構71) 遺物出土状態平面図	26
第27図	住居跡3 (遺構71) 出土遺物実測図57~69	27
第28図	住居跡3 (遺構71) 出土遺物実測図	28
第29図	住居跡4 (遺構56) 平面図、土層断面図	29
第30図	住居跡4 (遺構56) 土層断面図	29
第31図	出土遺物実測図 溝 (遺構15) 16~19、溝 (遺構36) 20~23 土壌 (遺構18) 24上壤 (遺構64) 25	30
第32図	溝・土壤等 (遺構16~18、20~38、107) 平面図、土層断面図	31
第33図 a	溝・ピット (遺構29~36) 平面図、土層断面図 他	32
b	溝 (遺構36) 遺物状態平面図 他	32
第34図	方形上壤 (遺構83)・溝 (遺構84) 他 平面図、土層断面図	33
第35図	東西溝 (遺構88、89) 平面図、土層断面図	34
第36図	落込・土壤 (遺構69、70) 平面図、土層断面図	34
第37図	溝・ピット (遺構43~51) (遺構59、60、62、64) 平面図、土層断面図	35
第38図	6号填 (遺構52、54、55) 他 平面図、土層断面図	37
第39図	包含層および6号填跡 (遺構55) 出土遺物実測図71~76	38
第40図	焼上壤 (遺構66) 平面図、断面図	38
第41図	尾根～谷部 土層断面図	39
第42図	包含層 谷 (西谷) 出土遺物実測図	39
第43図	包含層出土遺物実測図	40

付図 1 尾平遺跡 (平面図) (富田林市東板持町所在)

付図 2 尾平遺跡 (遺構図) (富田林市東板持町所在)

## 表 目 次

表1	遺構一覧表	43
表2	遺物観察表	45

## 図 版 目 次

図版1	遺構 上 調査前全景 1区(右側)、3区(左側)(西から) 下 1区・3区全景(南西から)
図版2	遺構 上 1区・3区全景(西から) 下 1区・3区全景(北東から)
図版3	遺構 上 台状墓周溝 (遺構39) 全景(南東から) 下 周溝部 (遺構39) 近景(西から)
図版4	遺構 上 周溝 (遺構39) 東端土層西面 (西から) 中 周溝 (遺構39) 東端土層南面 (西から)

		下	周溝内土壙墓 2 (遺構40) 土層 (南から)
図版 5 遺構		上	土壤墓 1 (遺構38) 全景 (南西から)
		下	土壤墓 1 (遺構38) 十眉断面 (南西から)
図版 6 遺構		上	土壤墓 2 (遺構40) 全景 (南西から)
		下	土壤墓 2 (遺構40) 全景 (南東から)
図版 7 遺構		上	土器棺 1 (遺構41) 検出状況 (南西から)
		下	土器棺 1 (遺構41) 土層断面 (南から)
図版 8 遺構		上	土器棺 1 (遺構41) 底部 (南から)
		下	土器棺 1 (遺構41) 裸形全景 (東から)
図版 9 遺構		上	土器棺 2 (遺構12) 検出状況全景 (南西から)
		下	土器棺 2 (遺構12) 底部と円形穿孔 (北から)
図版10 遺構		上	土器棺 3 (遺構50) 検出状況 (南から)
		下	土器棺 3 (遺構50) 底部 (南から)
図版11 遺構		上	1区～3区近景 (西から)
		下	1区～3区近景 (南から)
図版12 遺構		上	溝 (遺構2～7) 全景 (南から)
		下	溝 (遺構3～7) 全景 (東から)
図版13 遺構		上	住居跡 1 (遺構90) 全景 (北東から)
		下	住居跡 1 (遺構90) 全景 (西から)
図版14 遺構		上	住居跡 1 (遺構90) 中央土壤土層断面 (南西から)
		下	住居跡 1 (遺構90) 排水溝内遺物出土状況土層断面 (南から)
図版15 遺構		上	住居跡 1 (遺構90) ピット91土層断面
		中	住居跡 1 (遺構90) ピット92土層断面
		下	住居跡 1 (遺構90) ピット99土層断面
図版16 遺構		上	住居跡 2 (遺構82) 全景 (北から)
		下	住居跡 2 (遺構82) 全景 (南から)
図版17 遺構		上	住居跡 2 (遺構82) 調査状況 (北東から)
		下	住居跡 2 (遺構82) 遺物出土状況 (北西から)
図版18 遺構		上	住居跡 2 (遺構82) 遺物出土状況 (南から)
		下	住居跡 2 (遺構82) 埋土土層断面 (南西から)
図版19 遺構		上	住居跡 3 (遺構71) 全景 (西から)
		下	住居跡 3 (遺構71) 遺物山上状況 (東から)
図版20 遺構		上	住居跡 3 (遺構71) 遺物出土状況 (南から)
		中	住居跡 3 (遺構71) 遺物出土状況 (南から)
		下	住居跡 3 (遺構71) 遺物山上状況 (東から)
図版21 遺構		上	住居跡 3 (遺構71) 遺物出土状況 (南から)
		中	住居跡 3 (遺構71) 遺物出土状況 (南から)
		下	住居跡 3 (遺構71) 遺物出土状況 (南から)
図版22 遺構		上	住居跡 4 (遺構56) 全景 (南から)
		下	住居跡 4 (遺構56) 全景 (西から)
図版23 遺構		上	住居跡 4 (遺構56) 土層断面 (南から)
		下	土壤 (遺構115) 土層断面 (東から)
図版24 遺構		上	1区・3区調査状況 遺構20～38、42、57 (西から)
		下	3区 遺構25～36近景 (南西から)
図版25 遺構		上	溝 (遺構36) 調査状況 (南西から)
		下	溝 (遺構36) 遺物出土状況 (南西から)

- 図版26 遺構 上 土壌（遺構83）溝（遺構84）検出状況（北から）  
下 土壌（遺構83）土層断面（東から）
- 図版27 遺構 上 土壌（遺構37）土層断面（北東から）  
下 落込（遺構69）調査状況（東から）
- 図版28 遺構 上 1号墳（遺構52、54、55）全景（北西から）  
下 石室跡 近景（北から）
- 図版29 遺構 上 玄門側壁部 石材残存状況（西から）  
下 玄門側壁部 石材残存状況（北から）
- 図版30 遺構 上 周溝（遺構52）近景（南から）  
下 周溝（遺構52）近景（北東から）
- 図版31 遺構 上 焼土壤（遺構66）全景（南西から）  
下 焼土壤（遺構66）たち割状況（南西から）
- 図版32 遺構 上 溝（遺構49）土層断面（北から）  
下 谷（西谷）遺物出土状況（北から）
- 図版33 遺構 上 包含層内 遺物出土状況  
中 包含層内 遺物出土状況  
下 包含層内 遺物出土状況
- 図版34 遺物 土壌（遺構115）出土遺物 1、2 土器棺1（遺構41）出土遺物 3、4  
土器棺2（遺構12）出土遺物 5～10 土器棺3（遺構50）11～13
- 図版35 遺物 住居跡1（遺構90）出土遺物26～33、35
- 図版36 遺物 住居跡1（遺構90）出土遺物34、36  
住居跡2（遺構82）出土遺物41、42、45、46、53
- 図版37 遺物 住居跡2（遺構82）出土遺物43 44、47、48、49、51、52、54
- 図版38 遺物 住居跡3（遺構71）出土遺物58～61、64～66
- 図版39 遺物 住居跡2・3（遺構82・71）出土遺物53、56、57、62、67～69
- 図版40 遺物 上 包含層および6号墳（遺構55）出土遺物71～76  
下 包含層（西谷）出土遺物78、80～85
- 図版41 遺物 住居跡3（遺構71）出土遺物70、包含層出土遺物101、102、105、106
- 図版42 遺物 溝（遺構15）出土遺物16、17  
土壌（遺構18）出土遺物24 土壌（遺構64）出土遺物25  
住居跡1（遺構90）出土遺物37～39、包含層出土遺物96、97
- 図版43 遺物 溝（遺構15）出土遺物18、19  
溝（遺構36）出土遺物20、21  
谷（西谷）出土遺物77、79、80
- 図版44 遺物 住居跡1（遺構90）出土遺物40a～c  
包含層出土遺物87、89、90、92～95、97～100

# 第1章 調査に至る経過

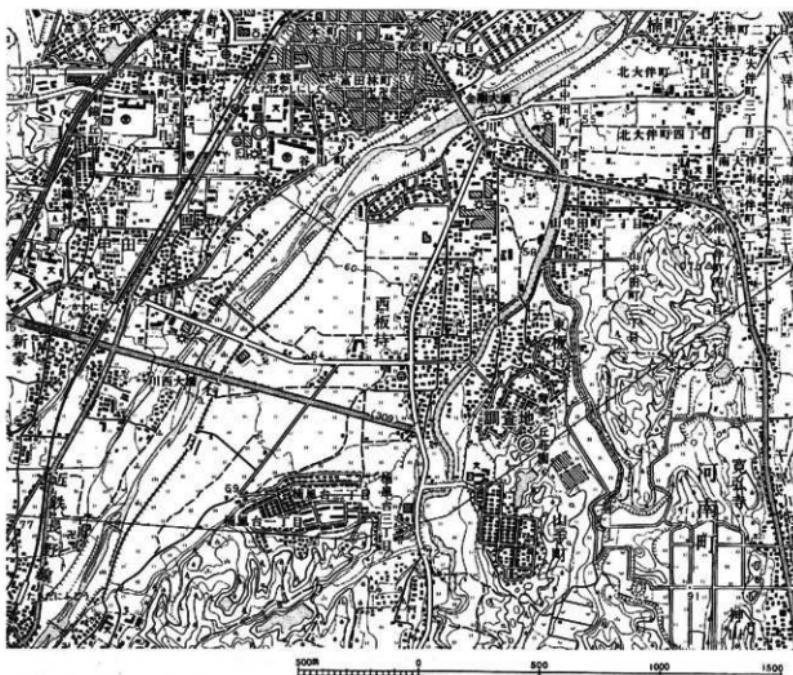
## 第1節 調査に至る経過

本調査区は、1997年富田林バイパス築造工事予定地に未知の遺跡が存在している可能性があり、1997年工事に先立ち本府教育委員会が試掘を実施した。その結果、試掘トレンチの半数以上から遺構と遺物を検出・採集することができた。試掘調査で発見した遺構は、ピットや溝等で、遺物は飛鳥時代から奈良時代の須恵器、土器類が主なものである。

調査は土木事務所が本体工事を発注した後で、諸般の事情から遺跡調査は工事の設計変更で対応するとの内容で協議が成立した。また調査予定範囲の大半が土地境界の提訴地と土砂崩れの危険個所に隣接していることから調査と工事に関する地元協議及び設計変更に関する事務手続きは土木事務所が行うこととなった。調査地は東西80m、南北40m余、面積3276m<sup>2</sup>になり、最高所は標高99m前後、低い箇所は86mで、比高差が12m、さらに谷との比高差は25mある。

### 調査区の現況

調査を開始するにあたり、地元調整は土木部によって行われていたが、樹木の伐採の処分は、地元



第1図 遺跡位置図

住民との調整が進まず、現地に放置されていたため、調査は樹木の後片付けを待って実施した。

2000年3月現在、道路は開通していないため調査を実施した調査区及び付近一帯に大きな変化はない。北、西、南西方向の住宅地・中学校等の横の丘陵は大きく削り取られR309バイパス道路建設事が行われている。いずれ道路が開通すればこの付近は市街地化するのである。東から南方を経て南西の土地は東板持圃場整備地区や西山(寛弘寺)圃場整備地区とその整備にとり残された尾根、斜面の雜木林が入り組んでいる。

## 第2節 調査の方法

尾平遺跡の調査は、調査番号、遺跡の略称については、大阪府教育委員会文化財調査事務所、地区名等は大阪文化財センターが作成した「遺跡調査基本マニュアル」に拠っている。

調査番号 年度(西暦年の下2桁) 当初(4月1日)の最も早く着手した調査(3桁)を5桁の数字で表で表す。例、1998年の38番目の調査、(99038)と表示

遺跡の略称 漢字名で表す。例、尾平遺跡の場合、「尾平」と漢字表記する。

地区名 國土座標第VI系及び大阪府都市計画図を利用し区画する。

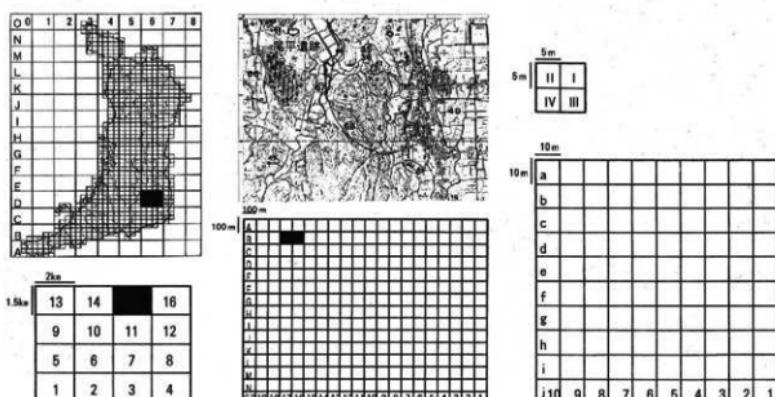
第1区画 大阪府を東西に8kmづつ8区画を数字で、南北に6kmづつ15区画をアルファベットを付け、表記する。例D6。

第2区画 東西8km、南北6kmを東西2km、南北1.5kmに4区画づつ計16区画を区切り、南西隅を1とし、東へ4区画進んだのち、西の下から2段目を5とし、北東隅を16区画にする。例15

第3区画 東西2km、南北1.5kmを東西100m毎に東から1で始め西へ20区画つくり、南北の1.5kmを100m毎に15区画つくり北をAとし南のOまで区切る。例、B16。

第4区画 第3区画の100m四方を東から西へ1から10、北から南へaからjの数字とアルファベットで表す。例、a1、a2。

第5区画 第4区画を5m四方づつ4分割し、北東の区画をI、北西の区画をII、南東の区画をIII、南西の区画をIVとする。例I、II



第2図 尾平遺跡地区割表示図

これらを表示するとD 6-15-B17-a 1-Ⅲのようになる。

今回の調査においては第IV図の10m単位で遺物を採集することにした。

方位は、座標北を示す。これは地区名や測量図化基準を国土座標に依拠しているためである。座標北と真北とは $0^{\circ}12'$ 、磁北とは $6^{\circ}40'$ のずれがある。

調査区名 本調査では現地の地形と地元調整結果、調査着手順、残土置場の位置、使用機械類等を考慮し、1から5区に分割している。

遺構番号 本調査では各調査区毎に1から番号を付し、整理過程で検討しなおした番号をつけ、遺構の種類を決めている。

水準測量 東京湾平均海面水準を基本にしている。遺跡の立地条件に応じて大阪湾平均海面水準を使用する場合もある。

## 第2章 調査成果

### 第1節 調査区の立地と環境

本地区周辺は、石川に面した東側の丘陵各所が1960年前後の早くから、宅地開発造成されたため、丘陵地形はかなりそこなわれている。尾根がどの程度発達していたか判然としないが、残された地形と尾根の痕跡から板持古墳や1～3号墳が立地していた場所が把握されている。同様に南から北に伸びていた尾根の状況も推測せざるをえないが、今回の調査地は北に伸びる尾根と東に伸びる小さい尾根を巧妙に利用した遺跡と考えられる。

当地区の丘陵は、南と北側が住宅地と学校、西側が古くからの板持集落と新興住宅地が混在し、東側は最近造成された東板持圃場整備地区と未整備の雜木林が入り混じり、河南町の寛弘寺地区につながる。以前は、東の河南町側を眺望することは不可能に近かったが、近年西山（寛弘寺）圃場整備工事で丘陵が削平されたため、保存されている寛弘寺4～7号墳や須賀古墳群を望むことができる。北から西側は石川流域一帯の富田林市から羽曳野市街地を望める。

#### 周辺の古墳と遺跡

近くでは6基の古墳が知られている。北250mに円墳の板持丸山古墳や板持4号墳が位置し、西130mに前方後円墳の板持1号墳、西180mには円墳の板持古墳等存在したが開発時に破壊されている。南500mには前方後方墳の板持3号墳、円墳の同2号墳が位置したが調査後消滅している。

板持丸山古墳は未調査で全壇ながら径35m、高さ4mの墳丘を有し、円筒埴輪、形象埴輪、葺き石等の施設や半円方形帶神獸鏡、素環頭状鉄製品等の遺物が出土している。

2号墳は、径15m、高さ約2.5mの円墳で、主体部は長方形の土壤に組合式木棺の構造の痕跡を残していた。遺物は、鉄製刀子・鎌、土製丸玉、須恵器、土師器を副葬し、遺物から6世紀後半に築かれた古墳と考えられている。（調査時は4号墳と呼称されていた。）

3号墳は、全長約40m、後方部幅約25m、高さ約4m、前方部幅約15m、高さ約2.5m、盛り土約50cmが確認され、主体部は墳丘の長軸に平行して設けられた棺床を持つ木棺直葬の土壤墓である。遺物は重圓文鏡、短劍3口、鉄斧1口、銅鐵十数本、鉄鎌十数本を副葬する四世紀末頃に築造されたと考えられている。

遺跡分布図（第3図）や既往の調査によれば、今回の調査地の付近には、30～34の板持古墳、板持丸山古墳、板持2号墳、板持3号墳、35・36の寛弘寺古墳群、寛弘寺遺跡、99の柿ヶ坪遺跡、101の尾平遺跡等が近接している。本調査区は、試掘調査で出土した遺物の時期と尾平遺跡出土遺物の時期に近いことから、本調査地点まで尾平遺跡が拡大していると見られたことから尾平遺跡を拡大している。本調査区内には、現地踏査と1/2500地形図からうかがえる明確な古墳ではなく、この地域の丘陵によく見られるように尾根や谷がなだらかな起伏を繰り返していた。「富田林市史」第1巻 昭和60年3月30日発行



第3図 遺跡分布図

13 【府指】史 水都郡	35 寛弘寺古墳群	101 尾平遺跡（東板持遺跡）
16 川西古墳	36 寛弘寺遺跡	103 佐衛神社西遺跡
22 織籠遺跡	37 加納古墳群	126 太船池遺跡
24 彼方丸山古墳	44 甲田遺跡	128 甲田南遺跡
25 彼方遺跡	45 西板持遺跡	133 円原寺跡
26 港谷A地点遺跡	47 梅田遺跡	134 西大寺山古墳群
27 港谷B地点遺跡	49 平木遺跡（山中田南遺跡）	135 箱山城跡
30 板持4号墳	52 港谷古墳	136 板持1号墳
31 板持古墳	53 彼方西遺跡	144 中佐備窯跡
32 板持丸山古墳	54 柳谷池南遺跡	148 「重央」石造十三重塔
33 板持2号古墳	99 柿ヶ坪遺跡（下佐備北遺跡）	
34 板持3号古墳	100 下佐備南遺跡	

大阪府文化財分布図より

## 第2節 調査の概観

調査区には、南から北に伸びる尾根を主尾根とし、それから東に派生する延長50m余の尾根やその斜面、谷が含まれる。調査を実施するにあたり地形（第4図）と作業方法に応じて調査地を分割することにした。派生している尾根の最高所を1区、その北斜面を2区、南斜面上部を3区、東斜面上部を4区、3、4区の斜面下部を5区としている。

機械掘削は、地表の表土と竹の根を除根することから始め、尾根と斜面上部の大半の表土を剥ぐと一部では地山を露山することが出来た。その後、ベルトコンベアを投入し、人力掘削、遺構検出作業を開始した。

1区からは、最高所に台状墓に伴う土壤と溝、周辺から土器棺等を検出できた。尾根筋の表土下からは地山があらわれ前記以外の遺構は得られなかった。

2区は、東向きと北向き斜面で土器棺の他、多くの溝や落ち込み等を検出している。

3区は南北方向の尾根と東～南向き斜面、4区は東～南東向斜面が該当する。

これらの地区の主な遺構は4棟の竪穴式住居跡、1基の古墳、大小の土壤・ピット・溝等である。竪穴式住居跡は、尾根の稜線中央を避けた鞍部、尾根と斜面の変換点、やや緩い斜面等を立地場所にしている。住居跡の位置・方向は、住居跡1の南10mに住居跡2、住居跡1の東20mに住居跡3、さらにはその東30mに住居跡4が続く。

5区は、3、4区の斜面下部で谷につながる。転落した土器を採集しているが、遺構は認められてなかった。

## 第3節 遺構と遺物

### 1 1区と土器棺の調査

1区は、今回の調査区の中で最も眺望の良い東尾根の最高地点を含む20m四方の範囲で面積は約400m<sup>2</sup>である。1条の周溝と2基の土壤墓、1基の土器棺墓の他1基の土壤を検出している。ここで報告する台状墓は、埋葬施設、中心主体部、墳形、規模、時期等を示す明確な遺構と遺物には恵まれていない。検出した周溝遺構と立地条件から、台状墓として報告している。土器棺墓は、表土直下の山上であるため器体の風化が進み、上部を押圧削平されていたため保存状態はよくない。

### 台状墓（板持5号墳）（遺構42）の調査

位置 調査区西端を南から北に伸びる尾根の鞍部付近から東へ尾根が派生している。その尾根の最高所、標高99m余の地点（第5図）に位置する。先述したように、この墓からは、中心主体部やマウンドの盛土等や土器や鉄製品等の遺物は検出・出土していない。

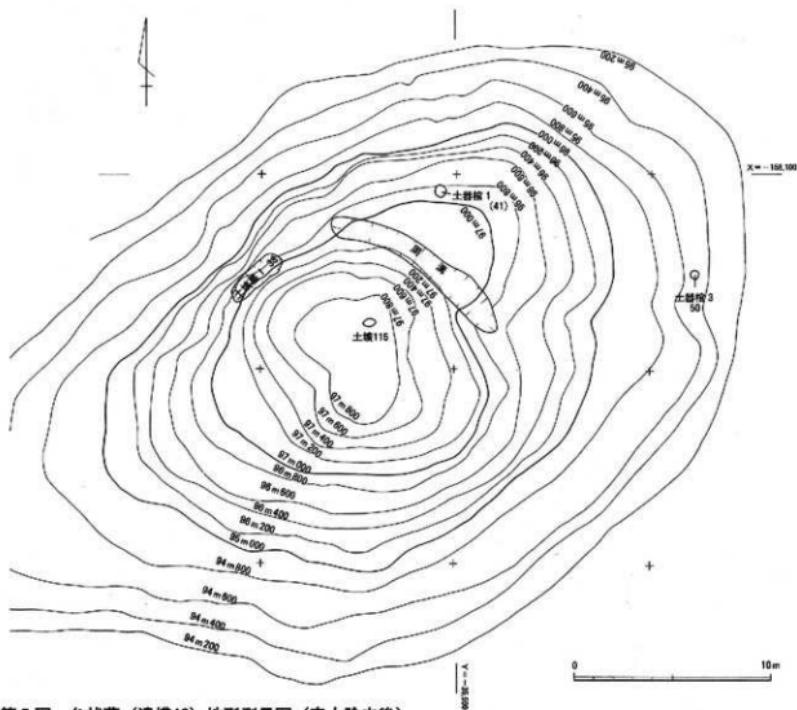
墓周辺は、他の遺構は極めて少ない。北東2mの地点から土器棺1、北8mの地点から土器棺2、東10mの地点から土器棺3を検出している。

調査の開始は、重機械で群生した草木や竹の根を除くため一部を機械掘削から始めた。

表土を剥いだ時点で、大半の個所から地山が露出し、北西斜面から1基の土壤と北東斜面からゆるく弧を描く周溝を確認した。その後、周溝の調査を進めた時点で溝底から1基の方形プランの土壤を



第4図 バイパス平面図



第5図 台状墓（遺構42）地形測量図（表土除去後）

検出した。いずれも立地や形状から土壇墓と考えられる。

墳丘は、盛土等がないため平面形は判然としない。墓の規模・平面形は周溝内側の肩部と1号土壇墓・2号土壇墓の位置から一辺約10.5mの方形プランと考えられる。

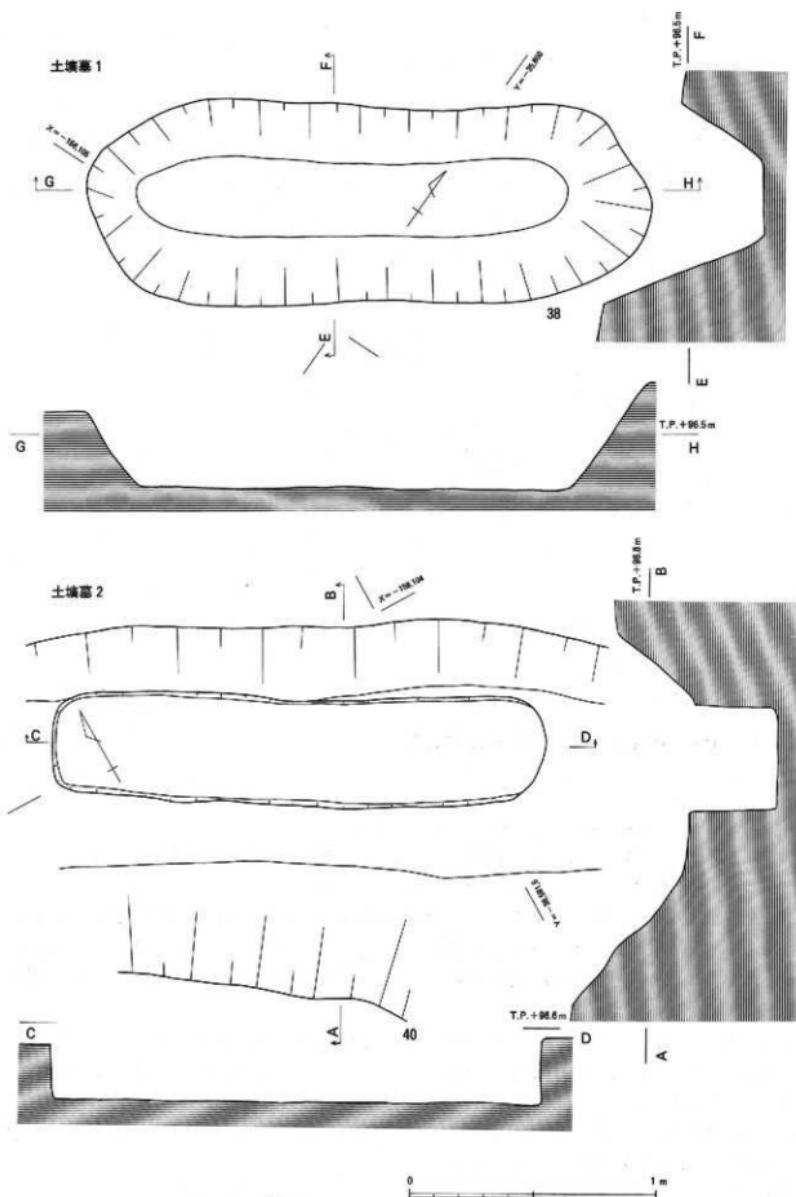
台状墓の表土の下には地山の風化した1・5明赤褐色粘質土の堆積が東西・南北土層断面にあらわれている。墳丘部の東西（土層2～5）、南北土層断面の（1～4）と7～9・12の土層は北東から南西へ傾斜する地山の土層である。地山を削り整形した痕跡は認められなかった。また、表土等から遺物は出土していない。

周溝（遺構39）（第6・7図）は、東へ伸びる尾根の東から北側に掘り込んでいる。

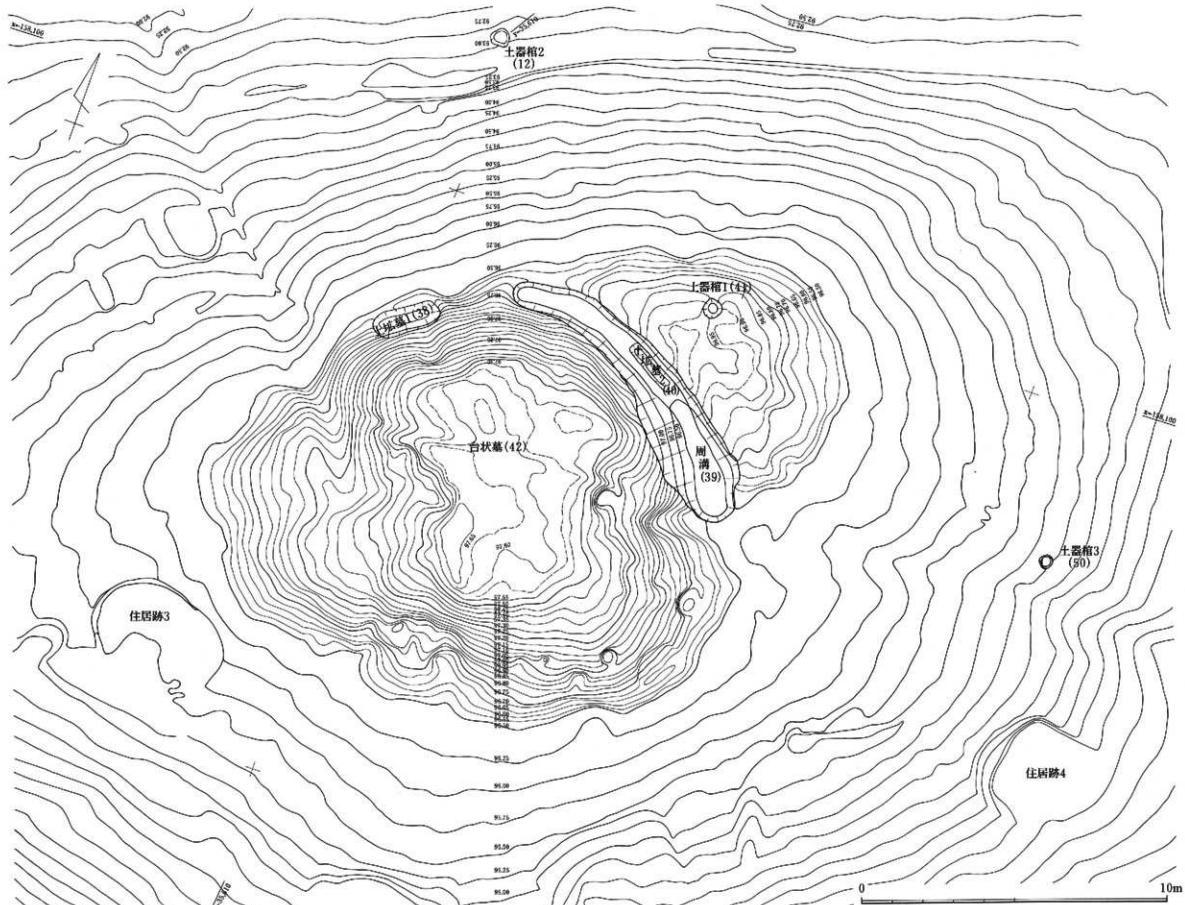
周溝は、長さ10.2m、上幅1.2～2.4m、下幅0.4～1.1m、深さ0.1～1.25mを測る。底はほぼ平坦で東の端部が広く、深くなる。

溝中央には長さ2m、幅40cm前後、深さ30cmの土壇墓2が、溝と同一方向に構築されている。周溝内の遺構は、この土壇墓が唯一のものである。

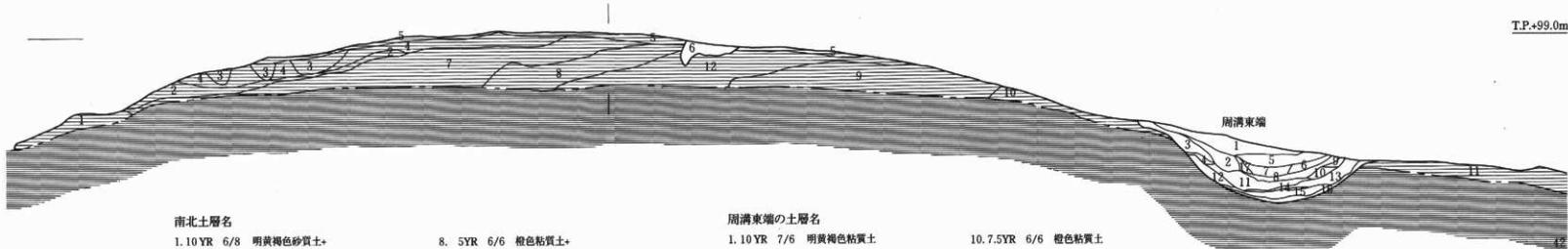
周溝内からは豆粒大的土器片が数点出土しているが、時期、器種は判読できない。



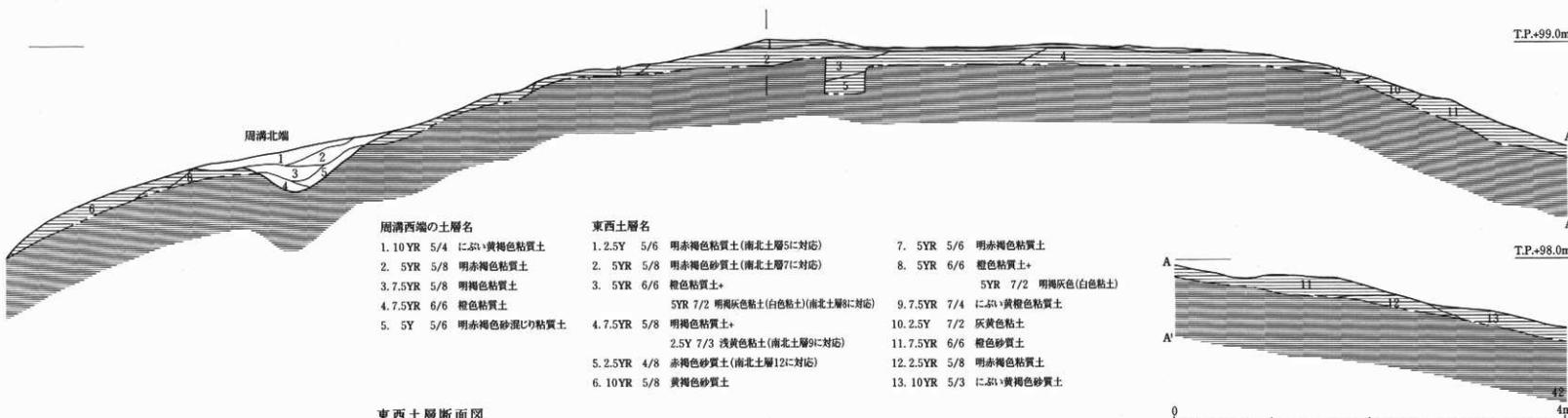
第8図 土塙墓 1 (造構38)・2 (造構40) 平面図、縦断図、横断図



第6図 白状墓(遺構42)平面図



南北土層断面図



第7図 台状墓(遺構4)土層断面図

なお、この台状墓は尾根の一部を周溝によって切断し、墓域（台状墓）を区画（第5・6図、図版11）している。その北側の平坦地から土器棺1を検出している。

最後に、この台状墓が立地する南北方向の丘陵には板持丸山古墳、板持古墳のほかに4基の板持古墳群が点在している。今回調査できたこの台状墓を板持5号墳としたい。

**土壙墓1**（遺構38）（第8・9図、付図1、図版5）傾斜角18°～25°の東尾根の北西斜面、台状墓の裾付近に位置すると考えられる。

土壙の上端は長さ2.26m、幅80cm、下端は長さ1.75m、幅29～33cm、深さ25～57cmを測る。方位はN 56° Eである。

平面形は、長側辺がほぼ真っすぐで、小口側が円弧を描く狭長な方形プランである。特に北東部の小口は円弧のカーブを描く。底面は平坦で凹凸もほとんど認められない。

横断面の形状は、逆台形である。埋土は下部に土層5～8の粘質土、上部には土層1～4の橙色の粘質土が堆積している。下部が水平に薄く、上部が埴側から流入した状況を示す土層の堆積状況から、土壙内に空間があったことが考えられる。

土壙内から遺物、遺体や棺材等は検出されなかった。

**土壙墓2**（遺構40）（第8図、付図1、図版6）上端の長さ1.97m、幅39cm、下端で長さ1.95m、幅42cm、深さ25～35cmを測る。方位はN-60°30' -Eである。

平面形は、土壙の長側辺と西側小口部が、直線的な掘り方なのにたいし、東側小口は円弧を描く狭長な方形プランである。掘り込みは四辺とも垂直乃至それに近い角度である。底は平坦である。

土壙の掘り込みは（第9図）、土層7、12等が溝に堆積した後に掘り込んだものと考えられる。

土壙は堅緻な地山の砂質土に達しているが、土壙内の埋土は非常に柔らかい。側壁に沿って垂直に堆積している土層15は棺材等の痕跡と考えられる。土層16は均一な砂質上で短時間に堆積したことなどが考えられる。

このほか上壙は溝の中心部にあり、周溝の両端からそれぞれ5.5mと5.3mのほぼ等距離を測る。土壙の掘形も溝底の下端に平行である。これらのことから、土壙の位置を決定するにあたり溝の中心部を強く意図してるものと考えられる。

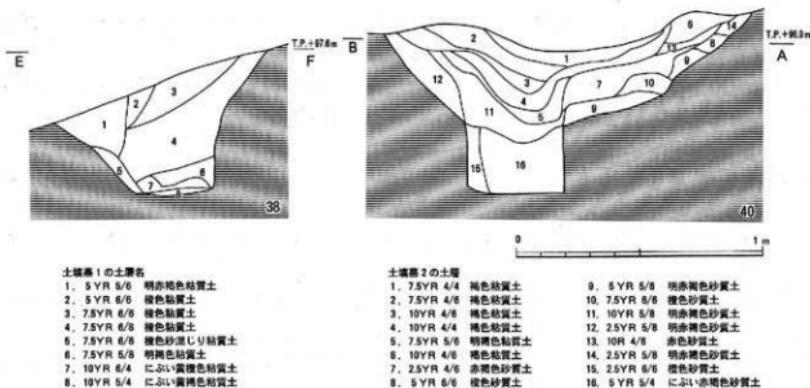
土壙内からは上器等の遺物や棺材、遺体等は検出されていない。

**土壙**（遺構115） 台状墓中央付近の表土下の地山面から検出した不定形なプランの土壙（第5・9・10図）である。規模は長さ60cm、横40cm余、深さ30cm足らずで、埋土は灰褐色炭混じり土が堆積していた。底面は凹凸がある。出土遺物は第10図の外側に叩き目を残す甕の休部と底部である。各破片は2次の火熱をうけ赤変し、器表は荒れている。胎土は角閃石を含む。

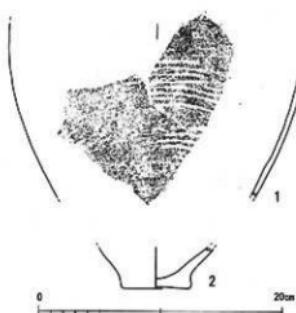
この土壙は、埋土の土質やプランの形状等から台状墓に伴う埋葬主体とは判断し難く、むしろこの遺構は台状墓が築かれる前につくられた遺構とも考えられる。

**土器棺1**（遺構41） 位置 本棺を埋葬している土壙（第11図）は、台状墓の周溝北側の平坦地の一画、周溝から2.5m離れた位置にある。

土壙は、径59cm、深さ18cmで土器より一回り大きい。平面形は円形プランになり、断面は浅鉢状を



第9図 土塙墓1(造構38)・2(造構40) 土層断面図・土塙(造構115) 平面図、土層断面図



第10図 土塙(造構115) 出土遺物実測図

呈する。土器は土塙中央に据えられている。土塙の埋土は赤褐色粘質土である。

棺には壺の底部から体部を利用している。頸部から口縁部は確認できなかった。このほか土器体部下半部を欠損しているのが確認できた。詳細は不明である。あるいは欠損している土器を利用したことと考えられる。棺に穿孔は認められなかった。

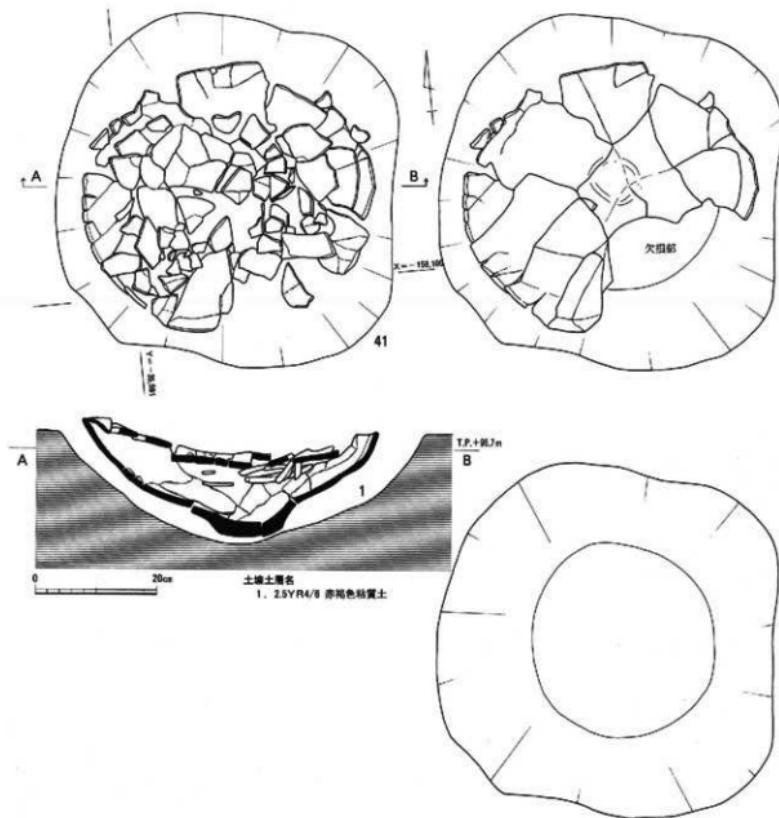
底部から体部下半部はヒビ割れし、土塙内壁に密着していた。棺内には厚さ8cm程度の黄褐色粘質土が堆積し、そのうえに小さな破片が折り重なった状態であった。

棺内外からの副葬や供献の遺物、埋葬された遺体は検出できなかった。

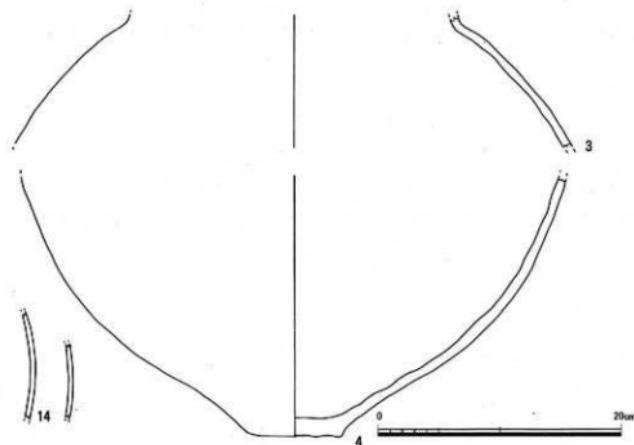
棺に利用された土器（4）は、平底で体部内外面を刷毛目調整している。14は内面をヘラ削りしている器壁の薄い体部片で、4と共に出土した。内面は指で抑えた凹凸が多い。器種は庄内式か布留式土器の甕と考えられる。

**土器棺 2（遺構12）** 本棺は土器棺 1 の北西10.5m、土壤墓 1 の北 9 m、斜度約27°の北西斜面にある土壤内から検出した。土器棺 1 とは比高差が約4 mある。

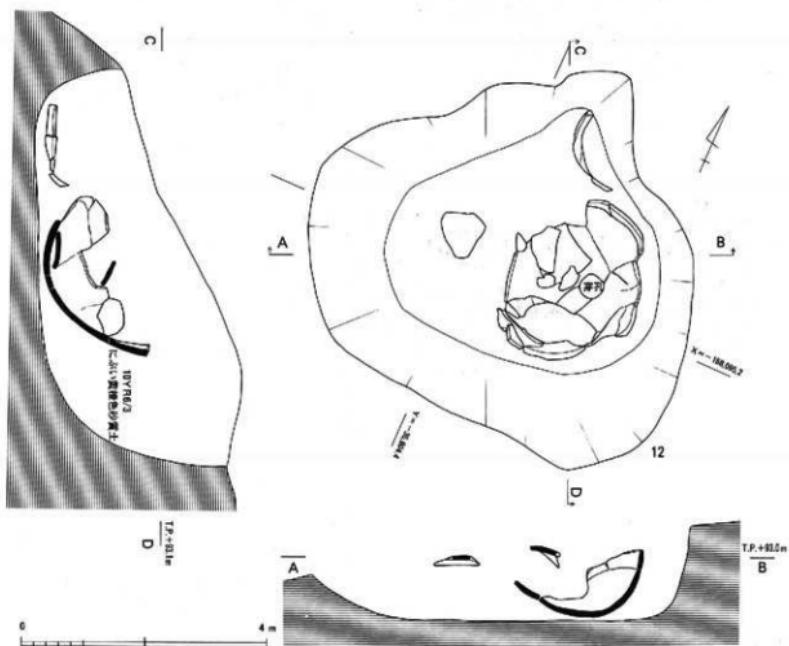
土壤（第13図）のプランは、長軸68cm、短軸48cm、深さ30cmの方形であるが一辺が外に突出する。土壤の断面は鉢状になる。土壤の規模は棺の大きさに比べて大きい。棺は、掘り方の山側に寄せて埋



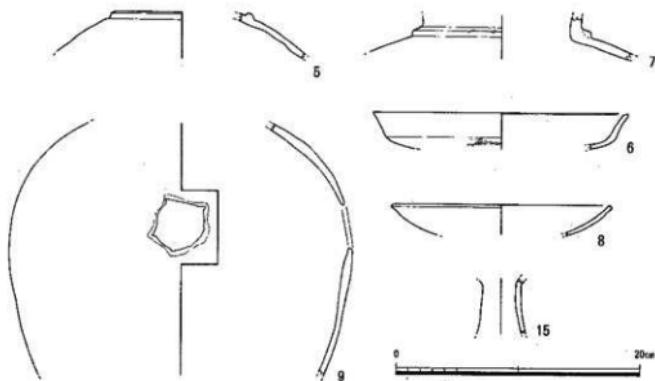
第11図 土器棺 1（遺構41）平面図、横断図 他



第12図 土器棺 1 (遺構41) 遺物実測図



第13図 土器棺 2 (遺構12) 平面図、断面図 他



第14図 土器棺 2 (遺構12) 遺物実測図

められている。土壤と棺の埋土はほぼ共通し、にぶい黄褐色砂質土であるが、棺内の埋土の上の方が粘質性が強い。

棺は3個体の壺の他、高杯等(第14図の5~9・15)が出土している。棺底には径約4cmの穿孔(第14図の9)が認められる。5の土器は頸部付近に貼り付け凸帯を巡らしている。壺の1点(7)は角閃石をおおく含む生駒西麓産の土器である。頸部付け根の貼り付け凸帯には粗な刻み目がつけられている。口縁部は出土していない。この他混入したと思われる高杯(6・8)の杯部片2点、脚部(15)片1が出土している。

なお、棺に利用された土器片が少なく、後世の削平を受け損壊した部分が多いことも考えられる。棺に利用された土器の外面は保存状態が悪く、体部内外面の調整は不明である。上器の出土点数から少なくとも3固体の壺の一部が棺に使われたことが窺われる。土器は庄内式土器から布留式土器に併行する時期のものと考えられる。

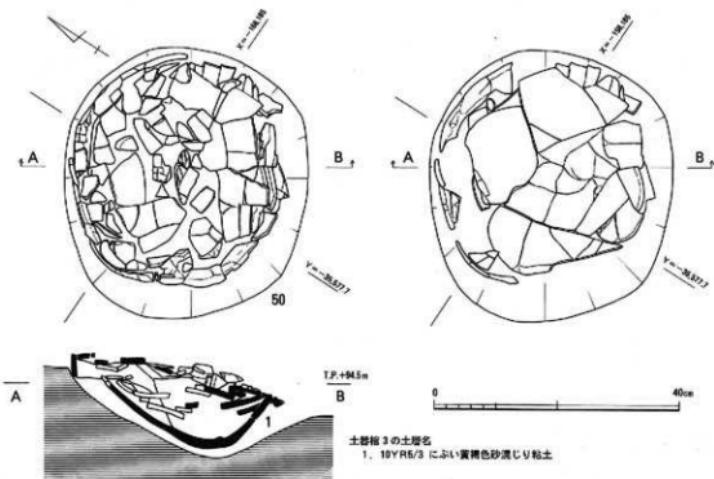
棺内外から副葬品や供獻品等の遺物は出土していない。

**土器棺 3 (遺構50)** 本棺(第15図)は、土器棺1の東南東へ13m、周溝東端より東へ11m、斜度18°の東向き斜面の土壤に埋められている。土器棺1とは、比高差が約2.5mある。

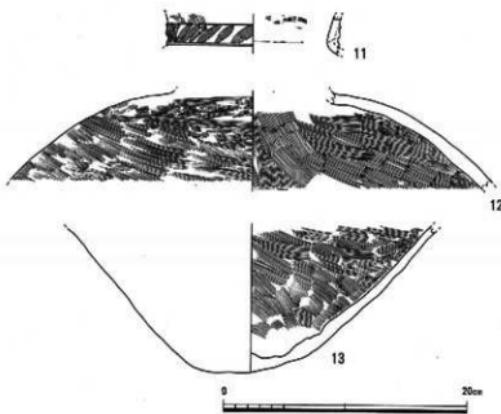
土壤のプランは、一辺44~40cm、深さ12cmのいびつな円形で、断面は摺鉢状を呈する。土壤の中央には棺になる土器を据えている。土壤と棺内の埋土はにぶい黄褐色砂混じり粘土で、棺内の埋土はやや砂が少なく粘性が強い。

棺に利用された土器のうち壺の頸部・体部・底部を検出できた。口縁部は出土していない。底部から体部下半はヒビ割れ、土壤内壁に密着していた。棺内には8cm程度の黄褐色粘質土が流入し、そのうえから土器片が折り重なった状態で出土した。棺上部は欠損している可能性がある。

土器(第16図の1~3)は、内外面を刷毛目調整している体部、尖りぎみの底部、頸部下部に幅の広い凸帯を貼り付け、粗く斜めに刻みを施した壺である。口縁部は出土していない。土器は庄内式土器から布留式土器に併行する時期のものと考えられる。



第15図 土器館3（遺構50）平面図・断面図 他



第16図 土器館3（遺構50）遺物実測図

3基の土器館は、弥生時代末頃から古墳時代にかけて台状墓を含めた墓域に埋葬された小人用の埋葬施設と考えられる。

棺内外から遺物等を検出することはできなかった。

## 2 2区の調査

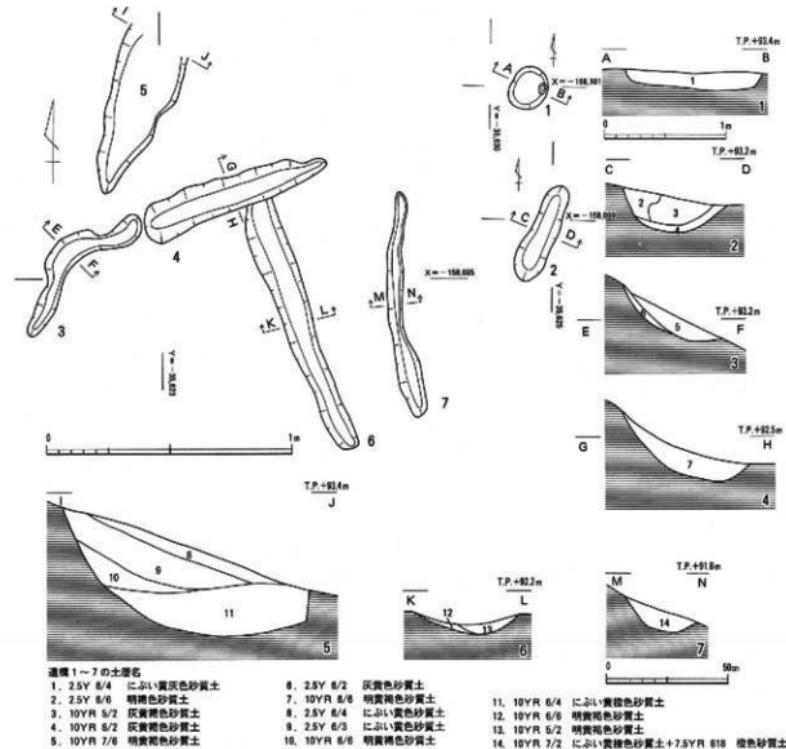
2区は、1区の北斜面から北尾根の一部で幅約8～15m 延長約60m、面積約600m<sup>2</sup>である。東尾根

稜線部とその北斜面や北尾根西側は、冬の季節風が強いときは直接吹きつける地形のため、居住するに不利な条件がある地区である。調査の結果、一段低い尾根上と稜線より4m程低い箇所から多くの土壌、溝と先述した土器棺墓等の遺構を検出し、予想以上の成果を得ることができた。なお旧地形を復元すれば、今は住宅地になっている調査地の北側は、かつては高い尾根があり、北風を遮っていたものと思われる。

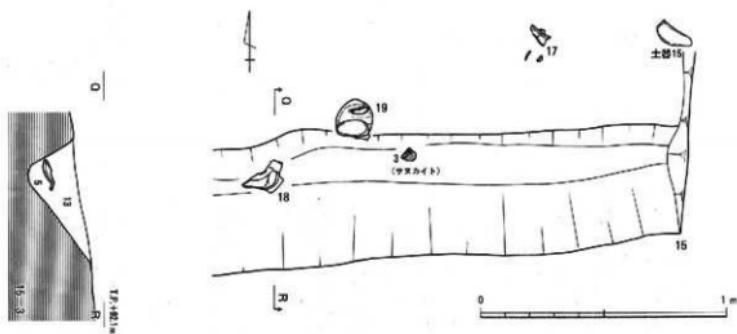
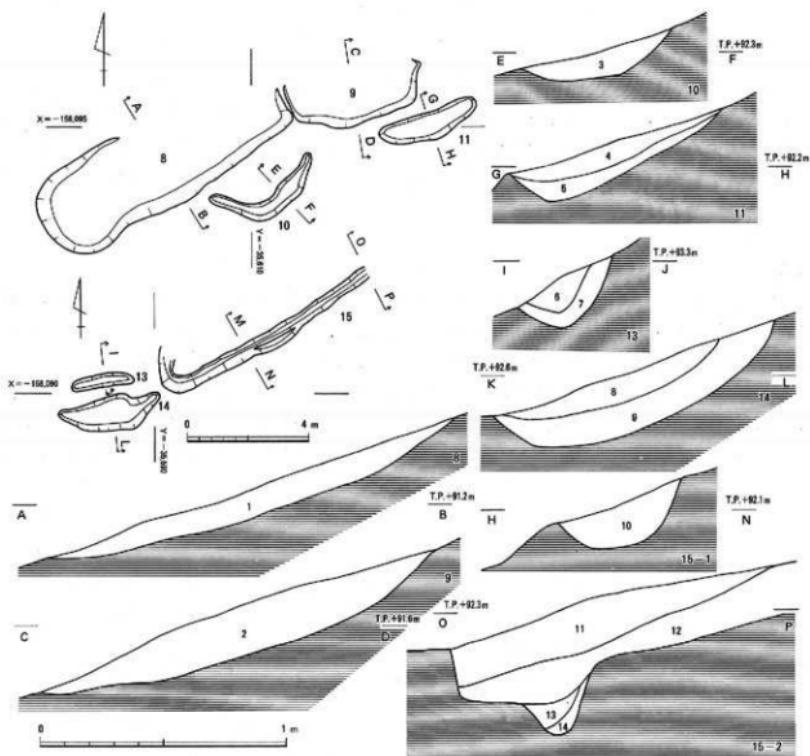
### 遺構1～7

南から北に延びる尾根の東斜面に設けられた浅い溝や溝状落ち込み等の遺構（第17図）である。遺構の大半は標高92m～93mの等高線におおよそ平行のものが多い。遺構1は土壌、2～7は溝である。5の溝の幅は1mを越えるが他は20～60cm余である。6、7は等高線に直交ぎみである。

溝の長さは、1～4m、幅50～80cm程度の規模の小さいものである。埋土は、明褐色、灰黄褐色、にぶい黄色砂質土等である。各遺構からは弥生土器の小片が少量が出土している。遺構8～15（第18図）の位置する北斜面は、遺構1～7の位置する東斜面に連続するが、西側の尾根に北風を遮られて



第17図 溝（遺構1～7）平面図、土層断面図



第18図 落込・溝（造構8～11、13～15）平面図、土層断面図

いる。また北斜面は全般に傾斜が強いが、遺構が立地する部分のみ緩くなっている。

遺構8~11、13、14の出土遺物はみられない。

落ち込み（遺構8・9）は斜面の高い尾根側を断面を皿型やL字型に掘り込む、平面プランは「コ」の字型或いは鍵型を呈している。長さは2~4m、深さ20cmを測る。遺物は弥生時代後期の土器片が少量出土している。

土壇（遺構10、11）は、不定型のプランで長さ2~3m、幅60~90cm、深さ15cmである。埋土は明黄褐色砂質土等である。

土壇（遺構13・14）は1~2m、深さ20~40cmの落ち込みで、埋土は明黄褐色砂質土等である。

溝（遺構15）は、検出長3.6m、幅1m、深さ30cm、断面は逆台形を呈する溝である。埋土は明褐色粘質土等である。

溝15からは（第31図の16~19）の他に土器片、フレーク等が出土している。16は高杯の壊部。17は小型甕の口縁～体部。18の甕は、焼成後内側から穿った径6cmの小孔が体部下部にある。19の甕は底部外面をヘラでかきとった跡を残す調整の粗雑な土器である。

## 2 3・4区の調査

今回の調査区の中で、立地条件のよい南北方向の尾根と東、南斜面を含み約1,750m<sup>2</sup>の面積を測る。東西70mの範囲には、4棟の竪穴住居跡、1基の古墳、1条の東西溝、大小の土壇、ピット、焼土壇等の遺構と土器等の遺物も多く出土している。

### 住居跡の調査

住居跡1（第18~22図、付図1・2、図版13・14・15）

（位置と立地） 本住居跡は、南から北に伸びる尾根が鞍部を形成し、そこから東に小さな尾根を派生するそのつけ根に位置している。住居跡は、尾根鞍部中央より少し南東側の平坦地、標高94.5mに立地している。本調査では、径8.4~8.8mの住居跡の輪郭を確認し、その後深さ5~30cmの床面の調査時に3回建替えられ、溝やピットが切り合っているのを確認した。

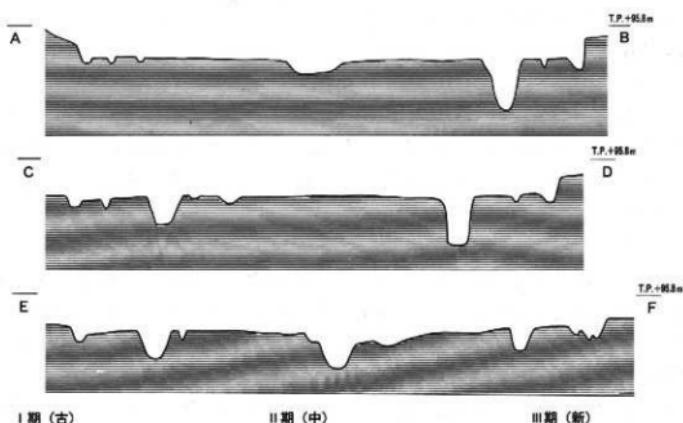
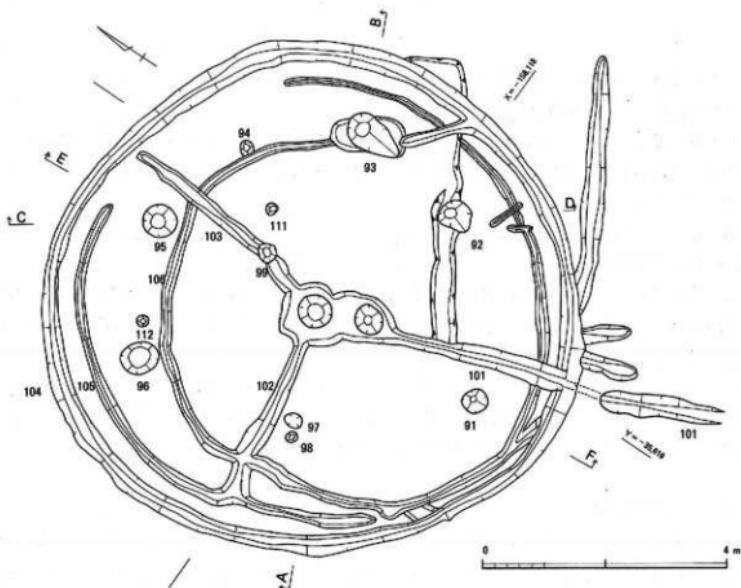
（平面形・規模） 住居跡の平面形（第19図）は壁溝や中央土坑の切りあい関係等から、I期（古）の胴張方形からII期（中）、III期（新）の円形プランを採用する段階へと3回の建て替えが認められ、その都度拡大する様子が観察できる。3回の建て替えの規模とプランは、I期の住居跡はほぼ胴張方形プランで一辺6.0~6.4m、II期の住居跡は円形プランで7.2~7.6m、III期の住居跡は円形のプランで8.4~8.8mを測る。これらの住居跡の深さは最大約30cm程度である。

（面積） 3回建替えられその都度面積が拡大している。I期の面積は約30m<sup>2</sup>、II期の面積は約43m<sup>2</sup>、III期の面積は約56m<sup>2</sup>になり、当初の住居面積に対して約13m<sup>2</sup>づつ拡大し、III期の住居跡は初期の住居跡に対しておよそ倍増している。

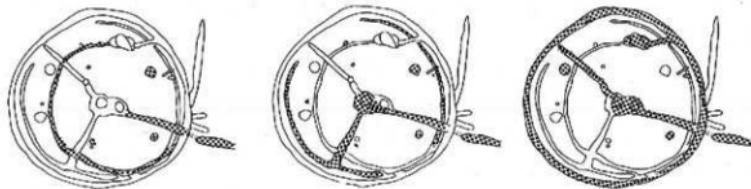
（床面） 床面は、柔らかい粘土、シルト、砂層の地山の上に張床とみられるかなり硬い砂質土が一部堆積している。床面の北半分は、砂質土が堆積し、その下に地山の柔らかいシルト層がある。ピット（遺構94、97、98、99、111、112）は、砂質土を取り除いたシルト層上面で確認した遺構である。

床面は、中央部がレンズ状に溝高低差は約6cmある。

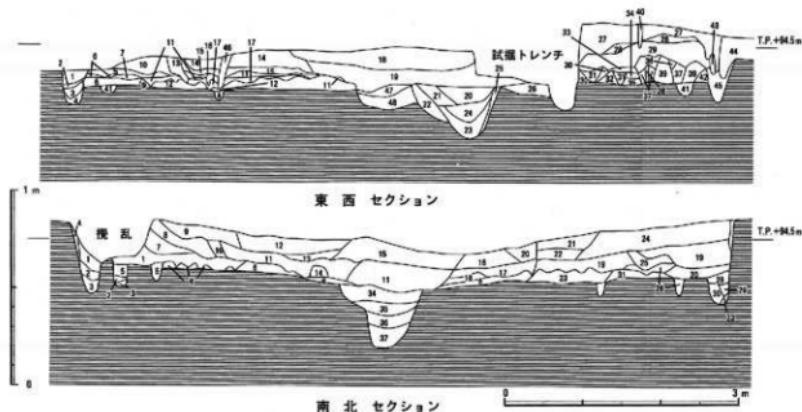
柱穴は、11箇所（第21図）で検出している。主柱穴は、I期が4本で各柱間2.8~3.2m、II期は5本で各柱間3.0~3.4m、III期は4本で各柱間3.6~4.8mを使用したものとみられる。2回目の建替えに



I期(古)                   II期(中)                   III期(新)



第19図 住居跡1（遺構90）平面図、断面図



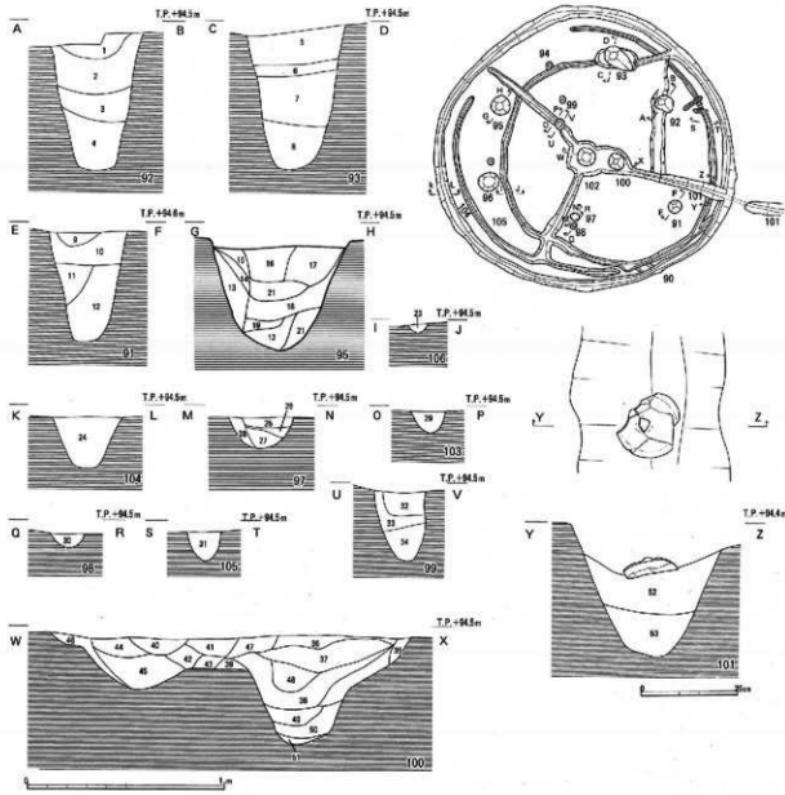
東西セクション土層名

- 10YR 7/4 にぶい黄褐色砂質土
2. 10YR 6/2 底質褐色砂質土
3. 7SYR 6/8 棕色砂質土 (10YR 6/1 増灰色砂質土混じる)
4. 10YR 6/8 増灰色砂質土 (7SYR 6/8 棕色砂質土混じる)
5. 10YR 7/4 にぶい黄褐色砂質土 (黑色成淵じる)
6. 10YR 7/4 增灰色砂質土
7. 10YR 7/4 にぶい黄褐色砂質土 (7SYR 6/8 棕色砂質土混じる)
8. 10YR 6/8 棕色砂質土
9. 10YR 7/3 にぶい黄褐色砂質土
10. 10YR 7/8 增灰色砂質土
11. 10YR 7/4 にぶい黄褐色砂質土 (10YR 7/1 増灰色砂質土混じる)
12. 7SYR 6/8 棕色砂質土 (10YR 6/2 増灰色砂質土混じる)
13. 10YR 8/4 深黄褐色砂質土
14. 2SYR 7/4 深黄褐色砂質土
15. 7SYR 7/8 棕色砂質土
16. 10YR 7/8 增黄色砂質土
17. 7SYR 7/8 增褐色砂質土
18. 10YR 6/4 にぶい棕褐色砂質土
19. 10YR 6/6 增黄色砂質土
20. 7SYR 6/8 棕色砂質土 (7SYR 5/1 增灰色砂質土混じる)
21. 10YR 6/8 棕色砂質土
22. 10YR 6/1 增灰色砂質土
23. 10YR 6/1 增灰色砂質土
24. 10YR 6/8 增褐色砂質土 (7SYR 6/8 棕色砂質土混じる)
25. 10YR 6/1 增灰色砂質土
26. 10YR 6/2 增褐色砂質土
27. 2SYR 7/9 增黃褐色砂質土
28. 10YR 6/4 にぶい棕褐色砂質土
29. 10YR 6/1 增灰色砂質土 (7SYR 5/6 增褐色砂質土混じる)
30. 7SYR 6/8 棕色砂質土
31. 10YR 6/2 底質褐色砂質土
32. 10YR 7/3 にぶい黄褐色砂質土
33. 7SYR 7/8 棕色砂質土
34. 10YR 7/2 にぶい棕褐色砂質土 (7SYR 7/6 棕色砂質土混じる)
35. 10YR 6/3 增褐色砂質土
36. 10YR 6/2 增黃褐色砂質土
37. 10YR 6/2 增黃褐色砂質土
38. 10YR 8/3 深黄褐色砂質土
39. 10YR 7/1 增白色砂質土
40. 10YR 5/2 增褐色砂質土
41. 10YR 5/1 增褐色砂質土 (7SYR 5/8 增褐色砂質土混じる)
42. 10YR 8/3 深黄褐色砂質土 (10YR 8/8 增褐色砂質土混じる)
43. 10YR 6/6 增褐色砂質土 (7SYR 6/8 棕色砂質土混じる)
44. 10YR 6/2 增褐色砂質土
45. 10YR 6/4 にぶい增褐色砂質土 (10YR 5/4 にぶい增褐色砂質土混じる)
46. 10YR 6/2 增褐色砂質土
47. 10YR 4/1 增褐色砂質土
48. 10YR 5/2 增褐色砂質土

南北セクション土層名

- 10YR 6/1 增褐色砂質土
2. 7SYR 6/6 增褐色砂質土
3. 10YR 5/6 增褐色砂質土
4. 10YR 5/4 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
5. 10YR 6/1 增褐色砂質土
6. 10YR 6/8 增褐色砂質土 (10YR 6/1 增褐色砂質土混じる)
7. 10YR 5/1 增褐色砂質土
8. 10YR 5/4 にぶい增褐色砂質土
10. 10YR 5/6 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 5/6 增褐色砂質土混じる)
11. 10YR 6/6 增褐色砂質土
12. 10YR 7/8 增褐色砂質土
13. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土
14. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
15. 10YR 6/4 にぶい增褐色砂質土
16. 10YR 7/6 增褐色砂質土
17. 10YR 6/1 增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
18. 10YR 6/4 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
19. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土
20. 2SYR 8/2 にぶい增褐色砂質土
21. 2SYR 7/4 深黄褐色砂質土
22. 10YR 7/3 にぶい增褐色砂質土
23. 10YR 7/1 增褐色砂質土 (10YR 7/8 增褐色砂質土混じる)
24. 2SYR 7/8 增褐色砂質土
25. 10YR 6/1 增褐色砂質土 (10YR 6/1 增褐色砂質土混じる)
26. 10YR 6/4 にぶい增褐色砂質土 (10YR 7/1 增褐色砂質土混じる)
27. 10YR 6/4 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
28. 10YR 6/6 增褐色砂質土 (10YR 6/1 增褐色砂質土混じる)
29. 10YR 6/1 增褐色砂質土 (10YR 6/1 增褐色砂質土混じる)
30. 10YR 8/4 にぶい增褐色砂質土
31. 10YR 7/1 增褐色砂質土 (7SYR 5/8 增褐色砂質土混じる)
32. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土
33. 10YR 8/2 增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
34. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
35. 10YR 5/3 にぶい增褐色砂質土 (7SYR 6/8 增褐色砂質土混じる)
36. 10YR 4/1 增褐色砂質土
37. 10YR 6/2 增褐色砂質土
38. 10YR 6/3 にぶい增褐色砂質土

第20図 住居跡 1 (構造90) 土層断面図



#### 住居跡1の土用名

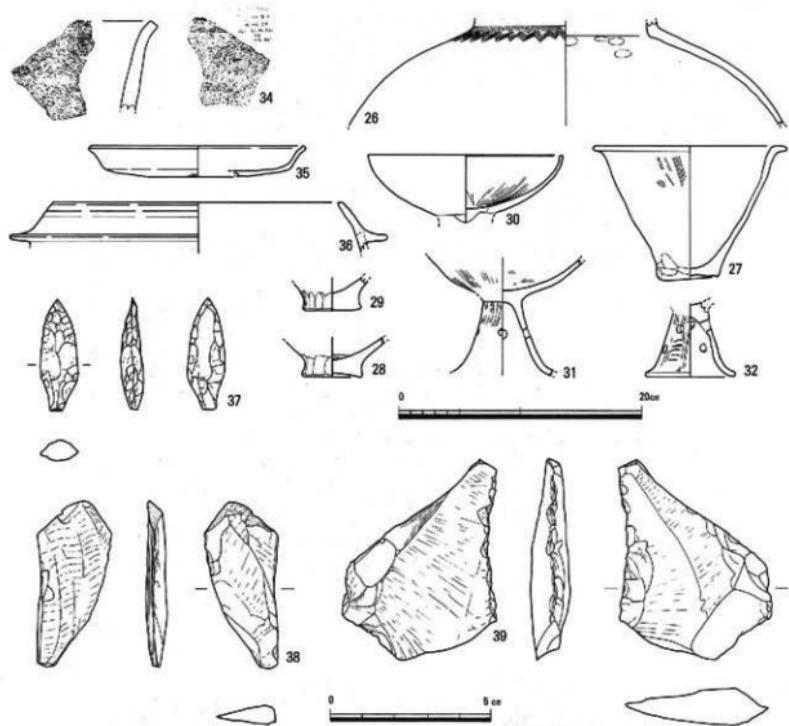
- |              |            |               |               |
|--------------|------------|---------------|---------------|
| 1. 10YR 5/2  | 灰黃褐色砂質土+   | 17. 10YR 5/3  | にぶい黄褐色砂質土+    |
| 7.5YR 5/8    | 褐色砂質土+灰    | 18. 7.5YR 5/8 | 褐色砂質土         |
| 2. 10YR 5/2  | 灰黃褐色砂質土    | 19. 10YR 5/3  | にぶい黄褐色砂質土     |
| 3. 10YR 5/3  | にぶい黄褐色砂質土  | 20. 7.5YR 5/8 | 明黄褐色砂質土       |
| 4. 10YR 5/1  | 褐色砂質土+     | 21. 2.5YR 5/8 | 灰黃褐色砂質土       |
| 7.5YR 8/8    | 褐色砂質土      | 22. 10YR 6/1  | 褐灰色砂質土        |
| 5. 7.5YR 5/1 | 褐灰色砂質土+    | 23. 10YR 6/1  | 灰黃褐色砂質土+じり粘質土 |
| 7.5YR 8/8    | 褐灰色砂質土     | 24. 10YR 6/1  | 灰黃褐色砂質土       |
| 6. 10YR 5/2  | 灰黃褐色砂質土    | 25. 10YR 5/2  | 褐灰色砂質土+       |
| 7. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土+    | 10YR 6/1      | 明黄褐色砂質土       |
| 7.5YR 8/8    | 褐色砂質土      | 26. 2.5YR 5/1 | 灰黃褐色砂質土+      |
| 8. 10YR 5/3  | にぶい黄褐色砂質土  | 10YR 6/8      | 明黄褐色砂質土+灰     |
| 9. 10YR 5/2  | 灰黃褐色砂質土+   | 27. 2.5YR 5/1 | 灰黃褐色砂質土+      |
| 7.5YR 8/8    | 褐色砂質土+灰    | 10YR 6/1      | 明黄褐色砂質土       |
| 10. 10YR 5/2 | 灰黃褐色砂質土    | 28. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土        |
| 11. 10YR 5/3 | にぶい黄褐色砂質土  | 10YR 6/1      | 明黄褐色砂質土+灰     |
| 12. 10YR 5/2 | 褐灰色砂質土+    | 29. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土+       |
| 7.5YR 8/8    | 褐色砂質土      | 7.5YR 6/8     | 褐色砂質土         |
| 13. 10YR 5/4 | にぶい黄褐色砂質土+ | 30. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土        |
| 7.5YR 8/8    | 褐色砂質土      | 7.5YR 6/8     | 褐色砂質土         |
| 14. 10YR 5/2 | 灰黃褐色砂質土    | 31. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土+       |
| 15. 10YR 5/3 | にぶい黄褐色砂質土  | 7.5YR 6/8     | 褐色砂質土         |
| 16. 10YR 5/3 | にぶい黄褐色砂質土+ | 32. 10YR 5/1  | 褐灰色砂質土        |

第21図 住居跡1（遺構90）ピット土層断面図

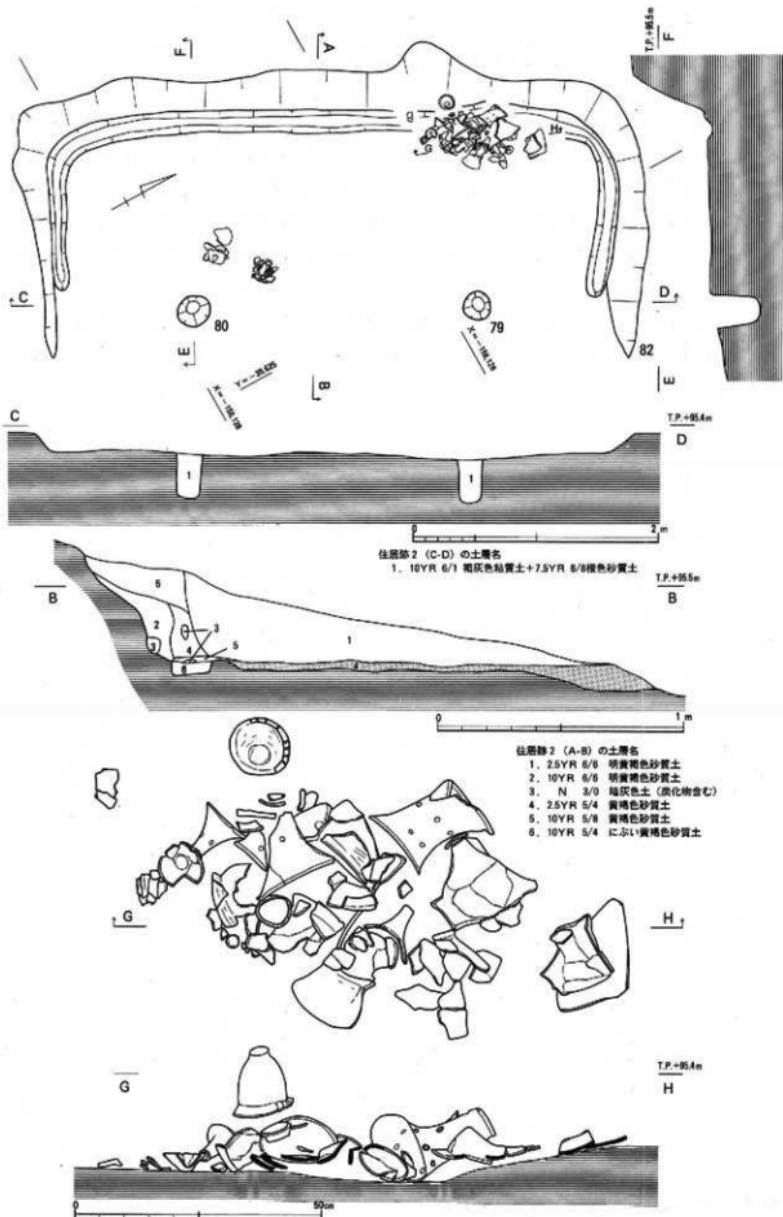
用いられた柱穴は小さく柱材には細い材木が使用されたことが窺える。柱穴91、92、93、は重複して利用された可能性もある。

(中央土坑(炉跡)) 住居跡の中央土坑(遺構100東・西)(第21図)は、3回の建替えに対応するものかもしれないが、平面形や上層断面の観察からは2回の建替えが確認できた。浅く掘りくぼめた土壌の中を一段深く掘り下げている。土壌内の堆積土の中には炭混じり土も認められる。土層の切り合いや堆積状況から東の土壌が新しく考えられる。炉跡は2箇所の掘り込みから2回以上の住居跡の建替えに対応するとみられる。なお、東西の土壌の底は溝101の底より深く、溝から自然排水する事は出来ない。

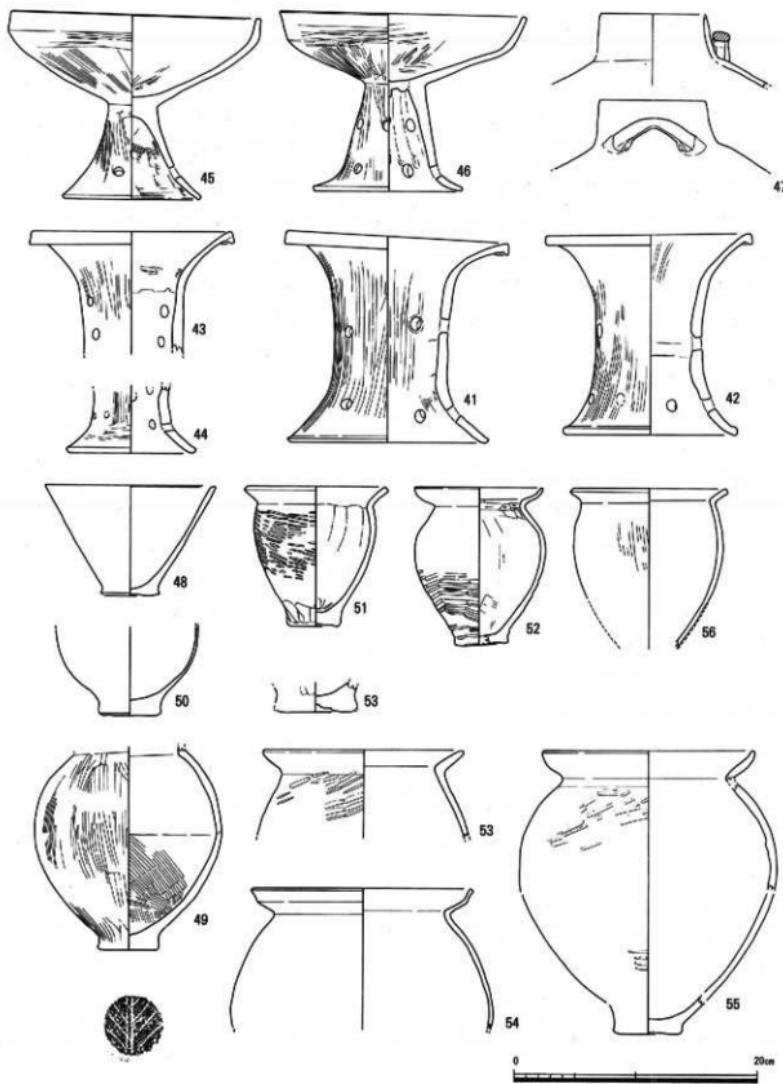
(壁溝)(遺構104~106)は3回の住居跡建替えに対応するものとみられる。Ⅲ期の104が全周するのに対し、Ⅱ期の105は北側が3m余が途切れる。104と105は南西部で切り合う。104と106は南東部で6m程切り合う。



第22図 住居跡1(遺構90)出土遺物実測図  
土器26~32、32~36、石器37~39



第23図 住居跡2（遺構82）平面図、遺物出土状態平面図 他



第24図 住居跡2（遺構82）出土遺物実測図41～56

溝が最も幅が広く深いのは104、次に106、105の順になり、各溝の南東部が最も深い。

これらの溝の時期的共存関係はⅠ期は壁溝106、Ⅱ期は壁溝105と溝102、Ⅲ期は壁溝104と排水溝101、103が伴うと考えられる。

(排水溝) 溝101は、102、103の2本の溝に比べ、広く深く作られており、排水溝としての機能をはたしていた可能性がある。溝101の溝底の勾配は、住居内から屋外へ自然排水となるように南側を深く掘り下げ、南東斜面に排水できるようにしている。また住居跡脛部(外縁部)はトンネルで掘り抜いている。他の溝(遺構102や103)は住居内の間仕切りや補助的な排水機能を担った可能性も考えられる。しかし、周溝(104~106)や排水溝(101~103)と中央土壙等の相互関係は明らかでなく後日に期すところが大きい。

遺構出土の遺物は、溝101からは第21図のような状態で高杯杯部(第22図の30)が出土している。

住居跡1埋内上の出土遺物は(第22図、図版35)の26~29・31~39の土器と石器である。26~29・31~33は弥生時代後期の土器である。26は壺の体部、27は小型鉢、28・29は底部、31は脚部、32は高杯脚部の3ヶ所に爪形状に縦方向に付けた刻み目紋様が見られる。33は2種類以上の粘土を用いた体部の破片で、一つは褐色の胎土は角閃石を含むいわゆる生駒西麓産と言われる胎土と他は橙色の胎土である。遺物は図版44の40a~cのようなサヌカイトのフレーク・チップが周溝101の埋土中の1ヶ所から密集して出土している。サヌカイトのフレークチップは、2mm以下のものが173点、重量8.3g、2~3mmのものが46点、重量8g、3mm以上のものが205点、総重量15.5gである。34~36は後世に混入したと見られる遺物である。混入品とみられるものには3点があり、34は埴輪片、35は土師器壊片、36は瓦質の羽釜片である。埋土中には、指先程の炭片も散発的に出土したが数量は少なく、住居跡が火災に遇った形跡はみられなかった。この住居跡の時期は、30の土器は後期前半、26~29・31~32の住居跡埋土中出土の上器も同様に後期前半に求められる。混入品の3点の上器は、住居跡廃絶後、凹地になり、粘質土が堆積する環境にあったことがうかがわれる。

#### 住居跡2(第23・24図、付図1・2、図版16~18)

(位置と立地) 本住居跡(第23図)は、住居跡1から南へ4m離れた位置にあり、尾根から斜面への変換点、標高95.4mの南東斜面上部に立地する。内部の2ヶ所に土器が廃棄されていた。

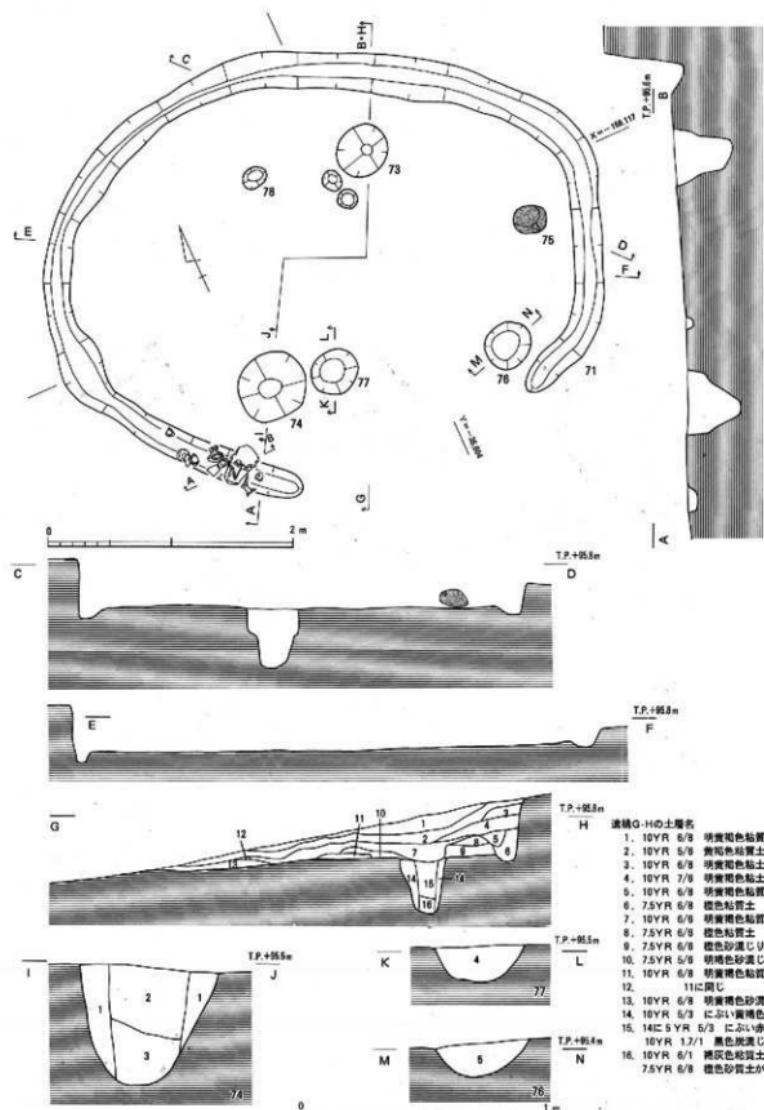
(平面形・規模) 斜面上部から尾根側に築かれた住居跡は、検山長4.6m、奥行1.8m~1.7m、深さ40cm、平面プランは「コ」の字型になる。検出部分は推定復元形の約1/3と考えられる。谷側約2/3は流出したのであろう。

一辺約4.6mの方形プランの住居跡は面積約21m<sup>2</sup>余になる。壁・床 壁面の大半は崩れやすい2層の地山の砂質土が露出している。床面は地山の砂質土の下の粘土層に達している。第23図中央の土層断面図の床面の第4層は整地した土層と考えられる。

床面の2ヶ所からピット(遺構79・80)を検出した。ピット間は約2.3mの距離を測る。ピットは径20数cm、深さ30数cmの小さなピットである。埋土は少量の炭化木片を含みやわらかい。遺物は出土していない。

(溝) 壁脛部に「コ」の字型のプランに掘り込んだ浅く狭い溝を検出している。幅15cm前後、深さ約5cm、埋土は砂質土で、遺物は含んでいない。

(出土遺物) 床面(第24図41~55・図版36・37)の北西部から(41・42・45~55)の器台や壺、

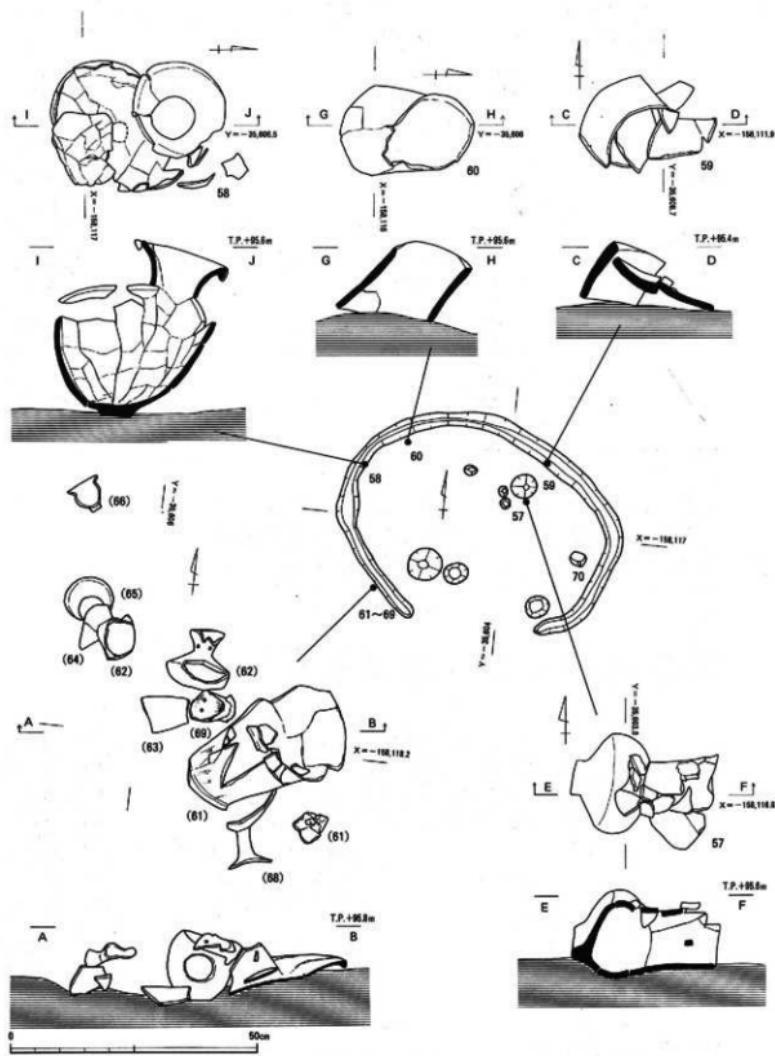


住居跡 3 造構 76・77 の土層名  
 1. 10YR 5/4 に近い黄褐色砂質土  
 2. 10YR 5/4 に近い黄褐色砂質土  
 (5YR 5/3 に近い赤褐色砂質土)  
 10YR 12/1 黑色底泥じり)

3. 10YR 6/1 黄褐色粘質土  
 7.5YR 6/8 棕色粘質土  
 4. 10YR 6/4 に近い黄褐色砂質土  
 7.5YR 6/8 棕色粘質土  
 5. 10YR 5/3 に近い黄褐色砂質土

造構 G-H の上層名	
1. 10YR 6/8	明瞭褐色粘質土
2. 10YR 5/9	黄褐色粘質土
3. 10YR 6/8	明瞭褐色粘質土
4. 10YR 7/9	明瞭褐色粘質土
5. 10YR 6/8	明瞭褐色粘質土
6. 7.5YR 6/8	棕色粘質土
7. 10YR 6/9	明瞭褐色粘質土
8. 7.5YR 6/8	棕色砂泥じり粘質土
9. 7.5YR 6/8	棕褐色砂泥じり粘質土
10. 10YR 6/9	明瞭褐色粘質土
11. 10YR 6/9	明瞭褐色粘質土
12. 10YR 6/8	明瞭褐色粘質土
13. 10YR 6/8	明瞭褐色粘質土
14. 10YR 5/3	に近い黄褐色砂質土
15. 14C 5 YR 5/7	に近い赤褐色砂質土
10YR 12/1	黒色底泥じり粘質土
16. 10YR 6/1	褐灰色粘質土
7.5YR 6/8	棕色砂質土が混じる

第25図 住居跡 3 (造構71) 平面図・断面図 他



第26図 住居跡3（遺構71）遺物出土状態平面図

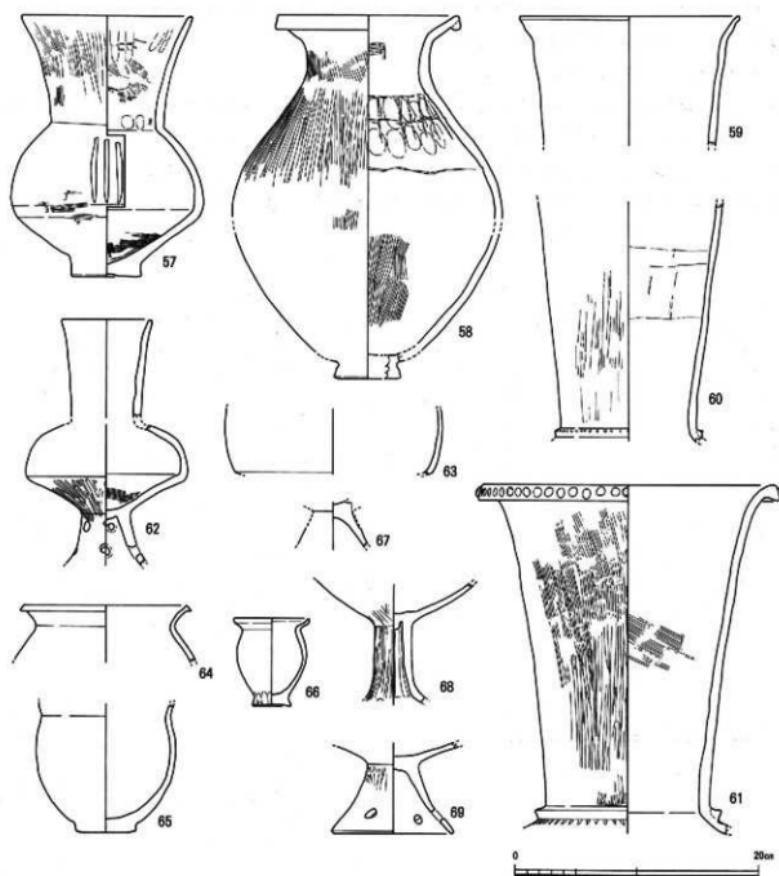
高杯等が14点、床面南半からは2点の器台片(43・44)が出土している。石器やサヌカイト等は出土していない。41~44は器台、45・6は高杯、47は把手付きの壺ないしは水差、48は鉢、49・50は壺で51~55は甕である。49の底部には、木の葉の圧痕がついている。

炉跡とみられる箇所や炭化物は認められなかった。

これらの土器は、住居跡出土の土器と同様の時期、後期前半頃と考えられ、住居跡廃絶の時期も弥生時代後期前半頃に求められる。

#### 住居跡3(第25~28図、付図1・2、図版19~21)

(位置と立地) 住居跡1の東9m余、東へ伸びる尾根筋から1m程下った標高96mの南向き斜面



第27図 住居跡3(遺構71)出土遺物実測図57~69

の傾斜変換点付近に築かれた小判形の堅穴式住居（遺構71）（第25図）である。

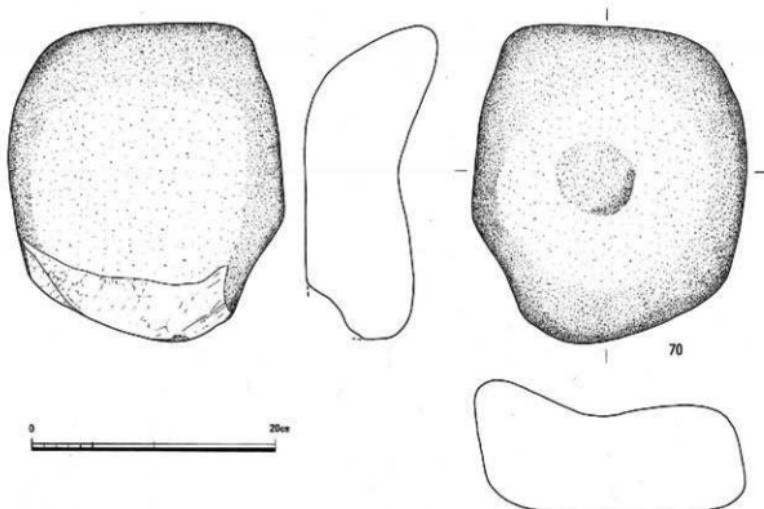
（平面形・規模）住居跡は、南東部の谷側の壁と溝が2m程途切れるものの、検出した溝と壁面から偏円形のプランになり長軸4.5m、短軸3.6m、深さ40cmの住居跡で約12m<sup>2</sup>余の面積を測る。炉跡は認められなかった。しかし、埋土には後で述べるように炭や焼土の小ブロックがかなり認められた。

溝は幅20cm、深さ5～10cmで南側2mは検出できなかった。

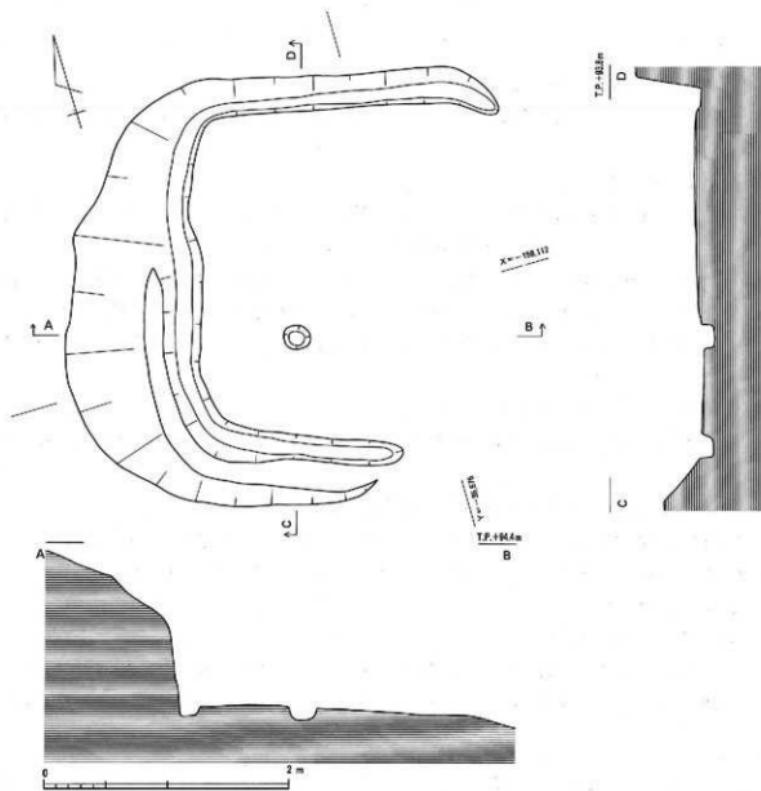
ピットは、3ヶ所から大小7箇を検出したが、ピット73（遺構73）と74（遺構74）が主柱穴で、2本柱になるものとみられる。住居跡埋土は、第27図G～Hの土層断面図中、第7・8・9層に焼土や炭片を含み、特に第7層はバンド状に数層堆積し、量も多い。第5層、第6層は小ブロックの粘質土を含む。ピットの埋土は上部が住居跡埋土に類似した土層で焼土・炭化物片を含み、下部の埋土は柔らかい粘質土に極小量の炭化物片を含んでいる。

いずれのピットも遺物は出土していない。

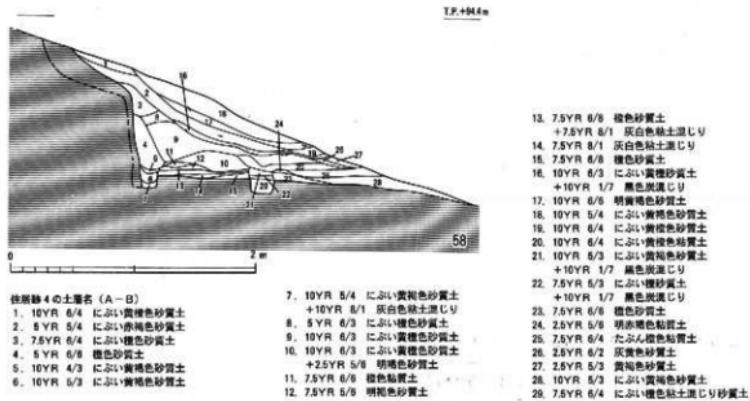
床面（第26図）の南西部の壁溝が途切れる位置から第27図に示す9点の土器（61～69）、住居内北側から4点（57～60）、東側の床から凹み石（第28図の70）が出土している。重量は9.16kgである。南西部の土器は長頸壺（61）、台付き壺（62）、壺（64）、高杯（68）、脚台部（67、69）等が、壁溝内からは小型壺（66）が出土している他、西溝内に壺（58）、床面上に長頸壺の頸部（60）、北溝内に長頸壺



第28図 住居跡3（遺構71）出土遺物実測図



第29図 住居跡4（造構56）平面図、断面図



第30図 住居跡4（造構56）土層断面図

の頸部(59)、床面の北よりから長頸壺(57)が出土している。

出土遺物の時期は弥生時代後期前半頃の土器の特徴を示しており、また、本住居跡廃絶の時期も同時期頃と考えられる。

#### 住居跡4(第29・30図、付図1・2)

(位置) 1号住居跡の東約38m、3号住居跡の東約25m、南向き斜面の標高93mの地点に営まれている。今回の住居跡のうち、最も東端の住居跡(第30図)である。

(規模・平面) 傾斜角26°の南向き斜面を左右約2.7m、奥行き約2.4mの範囲を尾根側を深さ1.3m、断面L字型に掘り込んだ、平面「コ」の字型のプランをとる遺構を検出できた。推定復元プランは方形で約7.3m<sup>2</sup>の面積である。今回この遺構は住居跡として報告するが、性格・機能については疑問の点もあり、後日に期したい。

床面からはピット1ヵ所と溝を検出している。

ピットは径20cm、深さ10cm余で砂質土が充満している。左右の壁からは約90cm離れているが床の中央部南寄りにある。

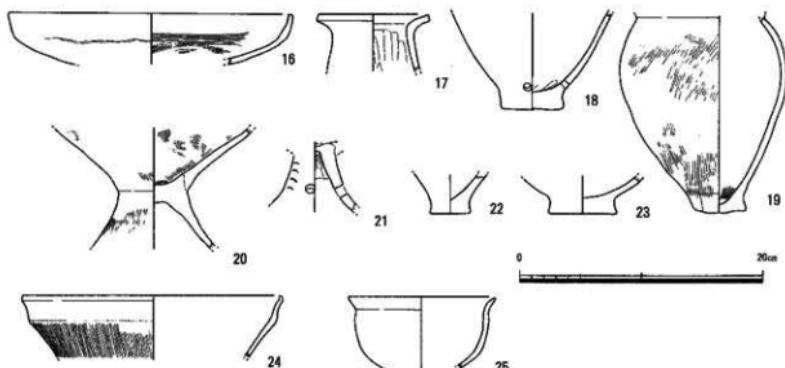
溝は、幅17・8cm、深さ10cm足らずで、埋土は粘質土、砂質土が堆積している。

住居跡埋は、第30図の第16・22層に炭片をバンド含むが他の土層には認められない。

遺物は弥生時代後期の土器片が若干出土しているが、図示できるもの、くわしい時期を判断できるものは認められない。

#### 溝・土壤・ピット等の調査

住居跡等が認められなかったものの広範囲から溝・ピット・土壤等を検出している。遺構が集中している箇所は、住居跡1の北東約10m～20mと、住居跡4の北約15mから南西約20mまでの約35m

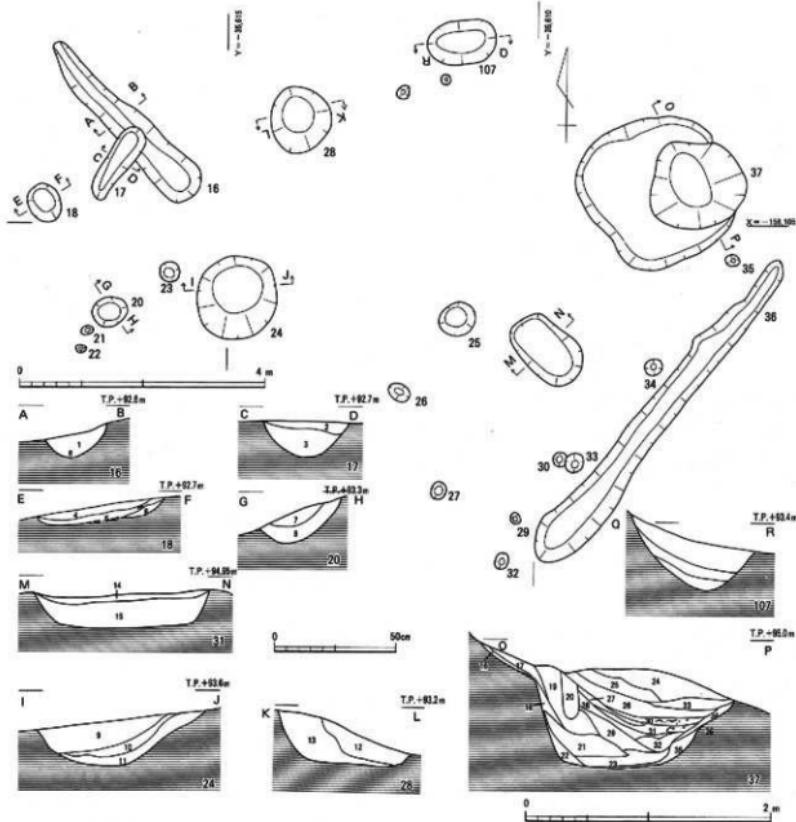


第31図 出土遺物実測図 溝(遺構15) 16~19

溝(遺構36) 20~23

土壤(遺構18) 24

土壤(遺構64) 25

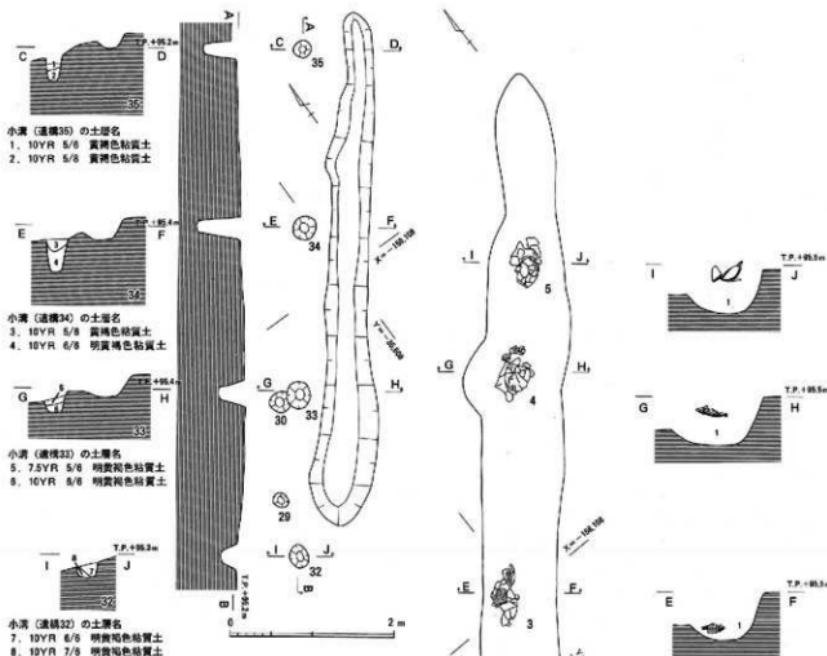


通標16~18・20~24・28~31・37・107の土壤名

1. 10YR 8/6 明黄色粘質土
2. 10YR 8/6 明黄色粘質土
3. 10YR 7/6 明黄色粘質土
4. 10YR 7/3 に54 黄褐色粘質土
5. 10YR 8/3 に54 黄褐色粘質土
6. 10YR 7/4 に54 黄褐色粘質土
7. 10YR 7/4 黄褐色粘質土
8. 2.5YR 8/6 明黄色粘質土
9. 10YR 8/6 明黄色粘質土
10. 10YR 7/5 黄褐色粘質土
11. 10YR 7/6 明黄色粘質土
12. 10YR 8/6 明黄色粘質土
13. 10YR 8/8 明黄色粘質土
14. 10YR 7/6 明黄色粘質土
15. 10YR 8/6 明黄色粘質土
16. 7.5YR 5/6 黄褐色砂質土
17. 7.5YR 8/6 底土
18. 7.5YR 8/6 底土
19. 7.5YR 4/6 底土
20. 2.5YR 8/3 に54 黄色+10YR 4/6 褐色土
21. 10YR 5/6 黄褐色土
22. 10YR 8/6 明黄色粘質土
23. 7.5YR 5/6 明黄色砂質土
24. 5YR 8/4 に54 底色ブロック状粘質土
25. 10YR 5/3 に54 黄褐色ブロック状粘質土
26. 10YR 3/4 増加褐色底土

27. 10YR 5/3 黄褐色土
28. 10YR 5/4 に54 黄褐色土
29. 2.5YR 5/4 黄褐色土
30. 10YR 4/3 に54 黄褐色底土
31. 10YR 4/4 黄褐色底土
32. 7.5YR 6/6 微色ブロック状土
33. 10YR 4/3 に54 黄褐色底土
34. 10YR 4/6 黄褐色砂質土
35. 10YR 5/6 明黄色砂質土
36. 10YR 8/6 明黄色粘質土
37. 10YR 8/6 明黄色粘質土
38. 10YR 7/6 明黄色粘質土
39. 10YR 5/8 黄褐色粘質土

第32図 溝・土壤等(通標16~18、20~38、107)平面図・土層断面図

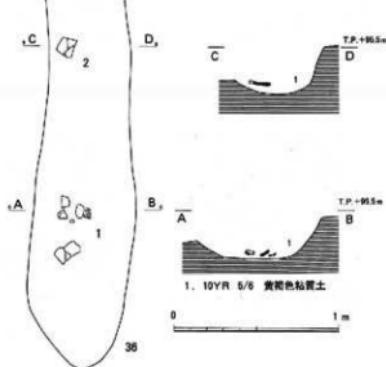


第33図 a 溝・ビット（遺構29～36）  
平面図、土層断面図 他

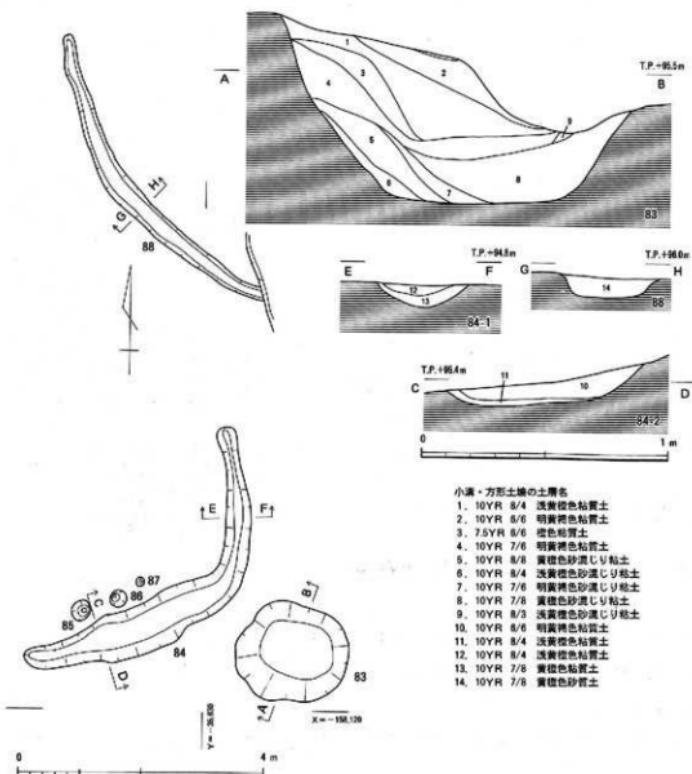
の2箇所である。

遺構16～18、20～37・83・84・88・89・107（第32～34図）

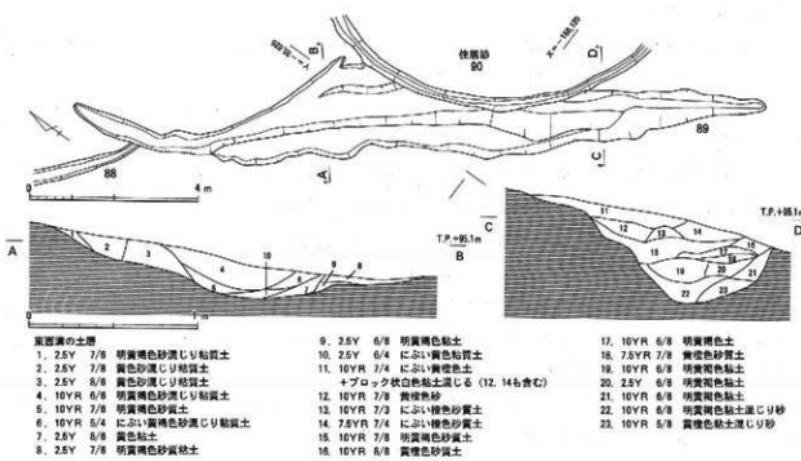
溝は16・17・36（遺構16・17・36）の3条である。溝16・36からは遺物が出土している。溝16の出土遺物は土器小片である。溝36（第32図）は長さ6.2m、幅0.5m、深さ0.2m余、南西から北東にのびる。溝の西側には30～50cm離れた位置にビット32～35（第33図 a）が一列に並ぶ。ビットは、それぞれ径約20～29cm、深さ約17～34cmをはかる。ビット32～33間と、33～34間が各2m、34～35間が2.15m、延べ6.15mを測る。ビット34からは土器片が出土している。溝36とビット32～35等は構造相互の関連から平地式建物等の遺構とも考えら



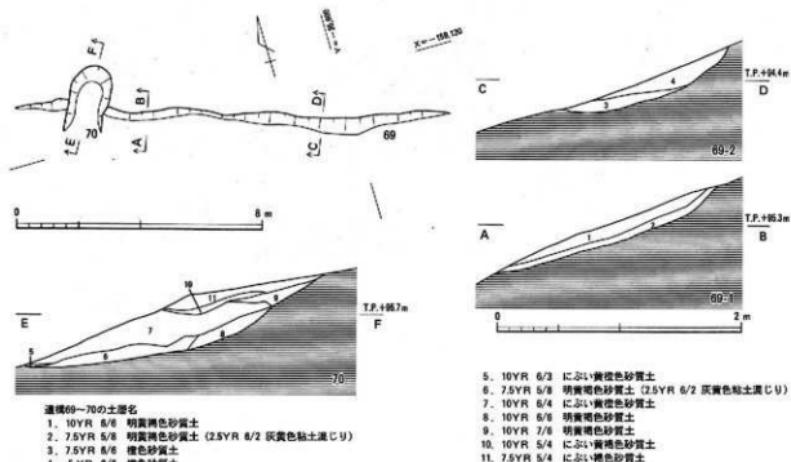
第33図 b 溝（遺構36）遺物出土状態  
平面図、断面図



第34図 方形土壌(遺構83)・溝(遺構84)他 平面図、土層断面図



第35図 東西溝(遺構88, 89)平面図、土層断面図



第36図 落・土壤（遺構69、70）平面図、土層断面図

れるがその性格は即断できない。

遺物（第31図20～23、第33図b）は何れも溝内の底から浮いており、据えられた土器はみとめられない。20は台付き鉢、21の高杯脚部には爪型状の施文具による刺突文が3方向に認められる。22・23は底部破片である。

土壤18（遺構18）この土壤（第32図）は径52～62cm、深さ12cmを計る長円形の浅いすり鉢状の土壤である。

遺物（第31図の24）は土師器片である。この他に弥生土器片が若干出土している。奈良～平安時代の遺構と考えられる。

土壤37（遺構37）一辺約2.4m前後、深さ31～100cmの方形プランの遺構である。出土遺物は弥生土器の細片しかないが弥生時代の遺構と考えられる。

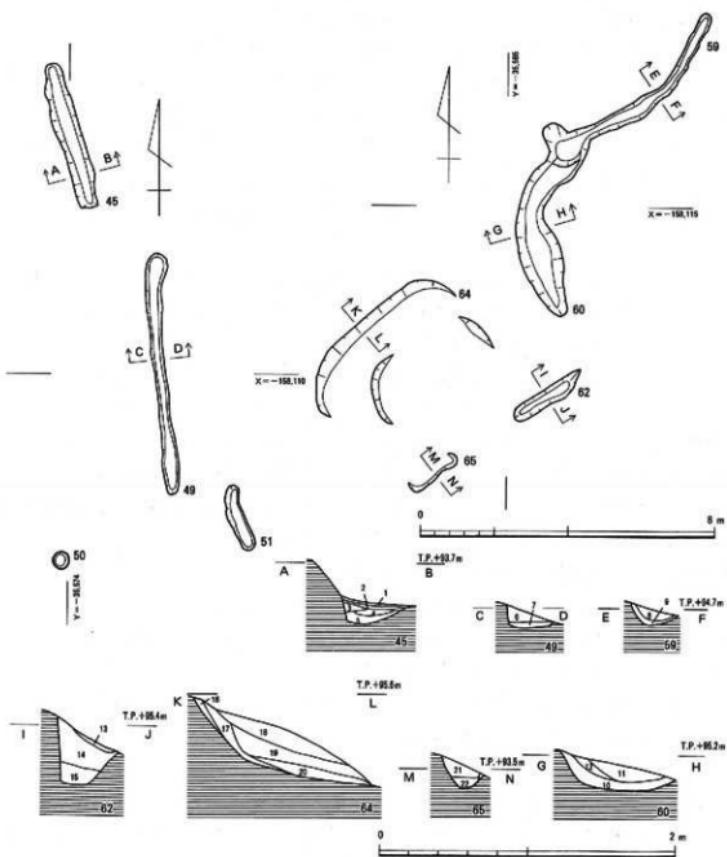
土壤28、31、107（遺構28、31、107）は円形、方形、長円形等のプランをとり、長軸や長径が1mを越える土壤である。出土遺物はほとんどない。

ピット・土壤等（遺構17、20～23、25～27、29、30）には、溝17や10ヶ所以上のピットが含まれる。出土遺物が少ないため遺構の時代は決めがたいが弥生時代後期頃と考えられる。

方形土壤（遺構83）（第34図）は住居跡1の西に位置する。長さ180cm、幅155cm、深さ49～90cmを測る。底は平坦である。遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

土壤に隣接してL字型に屈曲する溝（遺構84）（第34図）とピット等がある。溝は長さは6m、幅約80cm、深さ35cm、ピットは径15～30cmの、深さ10数cmの浅いものである。遺物は弥生土器片が若干出土している。この溝の北側には弧状の溝88がある。

段状テラス（遺構69）（第36図）は、住居跡3の南側斜面標高91m付近を断面L字型に掘り込んだ東西長14m、段差数10cmのテラスである。性格は決めがたい。



造構43-49-59-60-62-64-65の土層名

1. 5 YR 7/8 棕色砂質土
2. 5 YR 4/4 にぶい赤褐色（赤土質土赤泥じり）
3. 5 YR 6/8 棕色粘土質土
4. 5 YR 5/8 明赤褐色粘土質土
5. 5 YR 4/8 赤褐色粘土質土
6. 7.5 YR 5/8 明褐色砂質土
7. 9 YR 5/8 明赤褐色砂質土
8. 2.5 YR 5/8 明赤褐色砂質土
9. 7.5 YR 6/8 棕色砂質土
10. 9 YR 6/8 明褐色砂質土
11. 7.5 YR 6/8 棕色砂質土

12. 7.5 YR 7/8 黄褐色砂質土

13. 10 YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土
14. 7.5 YR 6/8 棕色砂質土
15. 5 YR 5/8 明赤褐色砂質土
16. 5 YR 5/8 明赤褐色砂質土
17. 8 YR 6/8 棕色砂質土
18. 10 YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土
19. 10 YR 6/8 明黄褐色砂質土
20. 7.5 YR 6/8 棕色砂質土
21. 10 YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土
22. 5 YR 6/8 棕色砂質土

第37図 溝・ビット（造構43～51）（造構59、60、62、64）平面図、土層断面図

土壤（遺構70）（第36図）は、住居跡3の南西1mにある。長さ2.5m、幅1.2m、深さ80cmを計る。遺物は出土していない。

#### 溝、落ち込み（遺構45、49、51、59、60、62、64、65）（第37図）等の調査

これらの遺構は、台状墓の東側から南側の斜面に築かれた遺構（第37図）である。遺構は溝、落ち込みが多く、2区の遺構と住居跡3までを含めれば尾根を鉢巻き状に切れ目なく取り巻いている。包含層からは弥生時代後期の上器が出土している。遺構からは出土していない。ピット（付図1・2）は溝45の横に2ヵ所と49の東側に3ヵ所見られる。径は20~30cm、深さ10数cmだが、40cm近いものもある。これらの遺構から東斜面中腹にも住居跡等の何らかの施設が存在したことが考えられる。

溝（遺構45）は、長さ約410cm、幅約65cm、深さ約12cmを測る直線的な形状で横断面はU字型である。

溝（遺構49）は、長さ640cm、幅29cm、深さ15cmを測る細く直線的な溝である。横断面は角型になる。

溝（遺構59、60、62）は、長さ2.2~5.8m、幅40~115cm、深さ10~50cm足らずの不整形な溝である。断面はU字型、逆台形、L字型等になる。

落ち込み（遺構64、65）は、南向き斜面に築ており検出長は約5mと約1.6m、幅は1mと30cm、深さは40cmと5cmは平面コの字形プランの落ち込みである。遺物は出土していない。

（遺構88・113）住居跡1（第34図）の西にある2条余の円弧状の溝は幅20~40cmで検出長5.25mと6.9m余の弧状の溝を検出している。これらの溝は住居跡に伴う壁溝の痕跡の可能性がある。

東西溝（遺構89）この溝（第35図）は、住居跡1の南側の東西に走り尾根を南北に区切る。長さは13.5m、幅1.2~1.5m、深さ約70cmを計る。溝の西側は弧状の遺構（88・113）を切っている。

#### 古墳（板持6号墳）（遺構52）（第39・40図）の調査地

調査区東斜面中央部から、石室主軸が等高線に平行に構築され、南に開口する石室跡（第38図）と周濠と羨道部を検出した。石室～羨道の石材は大半を抜き取られ、遺物は残存していなかった。原位置に残存していた石材は玄門部の最下段のみである。

残存していた玄門部の石組（第39図）には、9個の自然石を使用している。右側壁は縦横各45cm程の自然石が一石残り、左側壁は横幅約55cmと約20~30cmの自然石の5石である。玄門部の閉塞は幅80cmで人頭大の自然石を3石据えている。

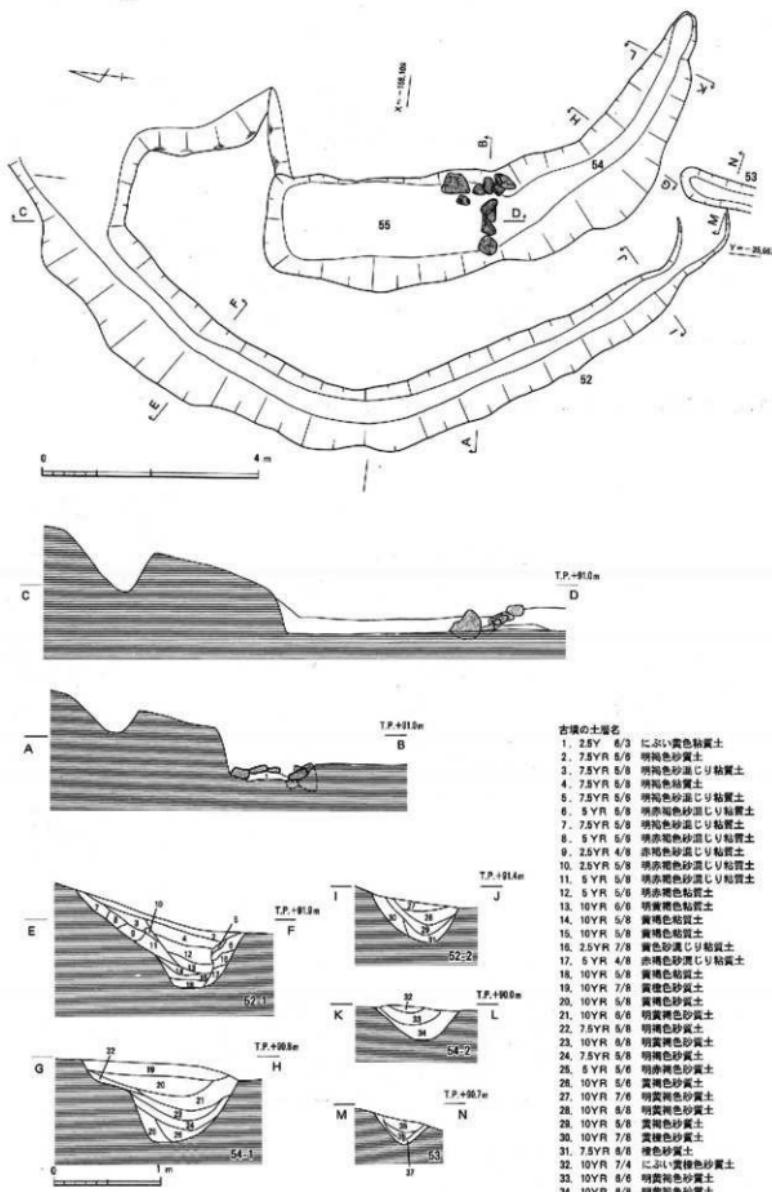
玄室は石材を抜かれているが、痕跡は幅約1.4m、奥行約3.4m、方位はN-7°-Wの細長い石室である。石材の厚みを考慮すれば石室幅約1mたらず、長さ3m前後のプランが復元できる。石室・羨道・墓道部は搅乱を受け、遺物は原位置を保っていない。

搅乱上からの遺物（第39図）は須恵器壺、葉壺、土師器杯、弥生土器片等が出土している。この他鉄釘2点が第39図の86と共に羨道先端付近の搅乱層から出土している。第40図の86~88も当古墳、古墓関連の遺物かもしれない。

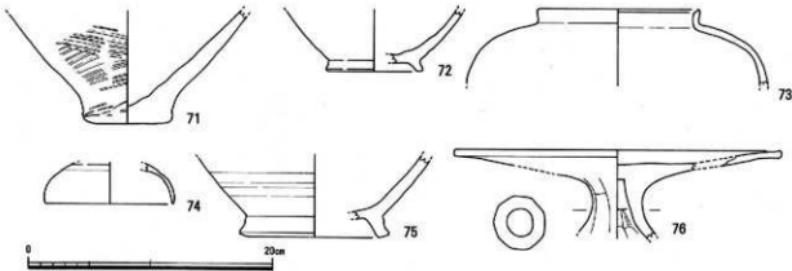
羨道～墓道部は、全長約5.2m、幅約1.5~1m、深さ約1mである。標高は玄室側から墓道先端に向かって徐々に低くなる。

墓道は中央部で「く」の字形に屈曲する。先端は玄室主軸に対し64°の角度で、東南東にのび、等高線に直行する。遺物は弥生土器片が出土しているが混入したものであろう。

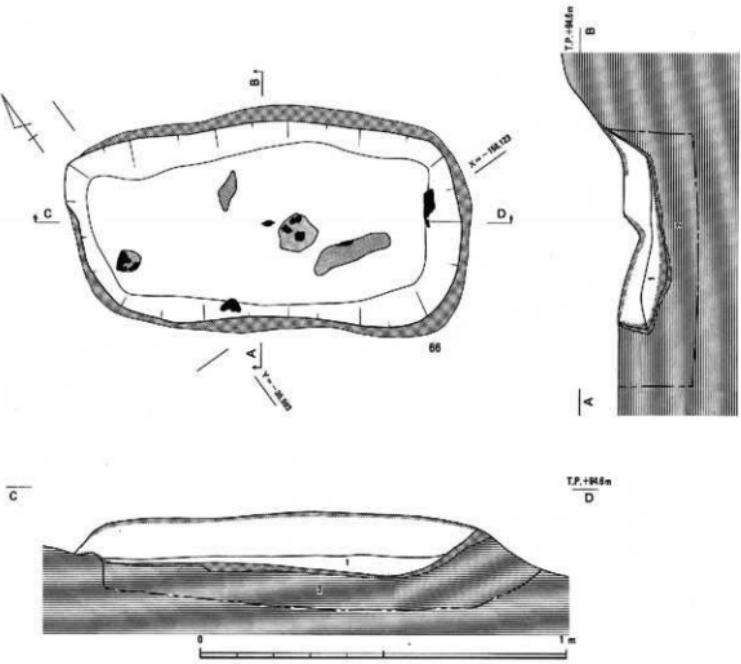
石室の西～北側約2.5mに掘られた周溝の平面プランは、ゆるい「く」の字形を呈し、上幅1.1~1.4



第38図 6号墳（造構52、54、55）他 平面図、土層断面図



第39図 包含層および6号墳（遺構55）出土遺物実測図71～76



埴土塙の土層名  
1. 10YR 5/8 赤色粘質土  
2. 5Y 7/2 灰白色+7.5YR 6/8 棕色粘土

第40図 焼土塙（遺構66）平面図、断面図

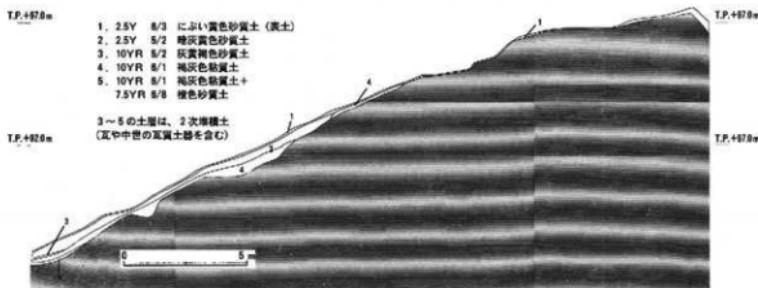
m、下幅20~40cm、深さ1.1mを測り、断面は逆台形になる。周溝と墓道部の残地の間隔は1m余、石室西側で2.5m、奥壁背後で3mの距離を残している。

遺物は少量の混入した弥生土器片（第39図）が出土している。

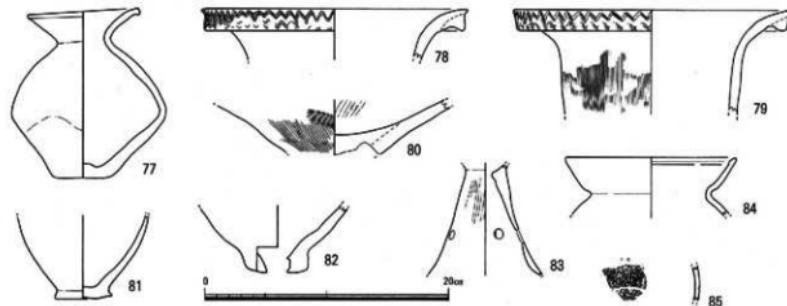
遺物の出土状況は、表土を含む整地土の堆積がブロック状になって石室床面にまで堆積しており、遺物もその土中から採取したものがほとんどである。石材の抜き取り穴の痕跡も残さないほどに攢乱したものと考えられる。副葬品等も石室外へ運びだされたのであろう。

古墳の墳形は、マウンドがないため周溝の平面プランと石室のプランの位置をもとに、墓道の先端部と周溝の南端部が東に曲がり石室中心部からの距離が双方とも6m余を測り、奥壁側も石室中心部から周溝まで約6m余であることから南北約12mの規模の古墳と考えられる。東西方向の規模は、西側が石室から周溝まで約3mの間隔があることから東西3m以上と考えられる。東側は調査区外に伸びるため不明である。以上、一部のデータからではあるが南北約12m、東西約6mの長円形の墳形のプランが考えられる。

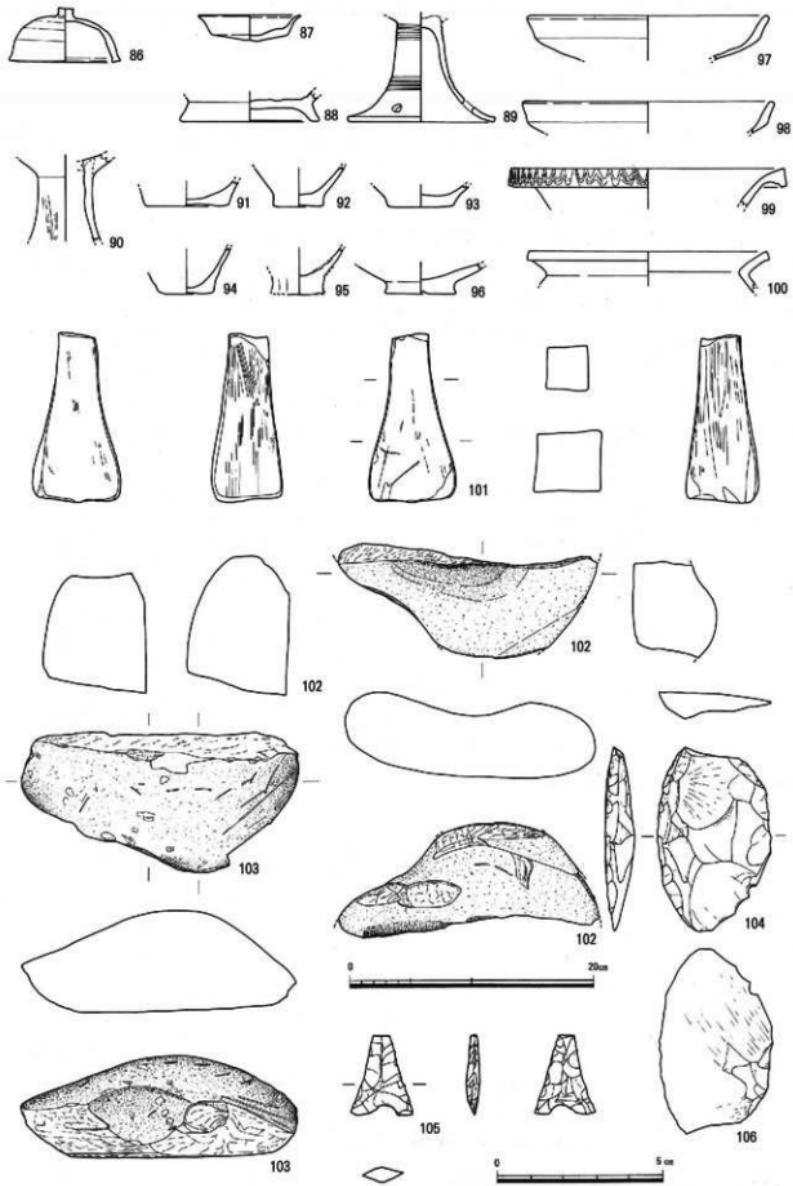
これまでに板持丸山古墳等の立地する丘陵上には、2基の古墳と1~4号墳の合計6基の古墳が知られている。今回の調査で発見されたこの古墳は先の5号墳につづき、板持6号墳になる。



第41図 尾根～谷部 土層断面図



第42図 包含層 谷(西谷) 出土遺物実測図



第43図 包含層出土遺物実測図

**焼土壙**（遺構66）（第40図）は住居跡3の東南東10mの緩い南斜面に位置する。

土壙は、コの字形落ち込み（遺構67）が斜面をL字形に掘り下げた個所に築いている。平面はいびつな方形プランになり、断面は皿状を呈する規模は長さ95cm、横55cm、壁は良く焼き締まり、残存高16cmを測る。床面は赤変した土が厚さ1～3cm、壁は同様に1～4cm焼けて赤変し、周囲の土より若干固くなっている。この土壙の上部構造は不明だが、残存している床と壁は地山と同一の質のもので、スサ入りの張り床や張り壁の痕跡は認められない。また、北コーナーの壁の一部は、幅14cm、深さ数cm程が一段低くなっている。また床と壁の赤色化の度合いは、南側の赤色範囲が広い。構造や立地条件（土質）、燃焼条件等が赤色化の範囲を左右したのかもしれない。土壙の底には最大厚さ約5cm程の黒色の炭層がレンズ状に堆積している。土壙内外から遺物は出土していない。遺構の年代、時期は確定できない。

### 5 区他の遺構と遺物

本調査区は、3・4区の南斜面の下方に相当する部分である。本区の斜面勾配は、全調査地の中で最もきつく、住居跡2の下の斜面は40°住居跡4の下の斜面は33°を測り、歩行にはかなりの困難を伴う。遺構は認められず、住居跡1～3の下方の谷部から弥生上器が集中して出土したほか2点の須恵器と1点の布留式土器（84）を採集することができた。弥生土器以外の遺物はこれら3点である。これらの土器は西と北側の尾根上から廃棄された遺物であろう。

この他1～4区の包含層からは第43図の遺物が出土している。遺物は、（86）～（88）の奈良時代の須恵器、（91）～（100）の弥生土器の他に（101）～（106）の砥石、凹み石、石鎌などである。弥生時代後期後半の土器はみられない。

## 第3章 まとめ

今回の尾平遺跡の調査で検出した遺構は、弥生時代から古墳時代に属するものが大半である。他に奈良時代の遺構が若干認められる。繩文時代以前と平安時代以後の遺構は確認していない。

出土遺物からみると本遺跡に人々が定着し集落を営みだしたのは、住居跡1～4や大半の土壙、溝が築かれた弥生時代後期前半であろう。その時期の住居跡は、円形のもの、方形のもの、小判型のもの、胴張り方形のものに4分類できる。住居跡1に見られプランは、3回の建て替えのうち最も古い時期の住居は胴張り方形のプランで、その後円形のプランに変化している。壁溝はすべての住居跡に備わっている。炉跡を持つのは住居跡1のみである。主柱穴は全ての住居跡に認められるが構成する本数にばらつきがある。柱径を反映すると見られるピットの径や深さにも明確な規則性はうかがえないと、住居跡1では30cm前後の小さいものから1m前後のものまである。ピット91～93・95に使われた柱材は土層断面観察から抜き取られた可能性がある。集落の継続期間は、住居跡1の建て替え回数や出土上器から長くて数十年かと窺われる。

弥生時代の集落の廃絶時期は、住居跡2・3に廃棄された土器から、少し時間を経てからのことと考えられるが弥生時代後期前半におさまるようである。住居跡2からは第23図のような状態で使用可能な器台、高杯、甕、鉢等15点以上（第24図）が廃棄され、住居跡3の住居内からは第26図のような位置から壺、台付き壺、甕のほか凹石等13点（第27図）が出土している。4棟の住居跡の廃絶原因は、炭化木や2次的熱を被った土器は少なく、火災による住居の放棄という事態はなかったものとみられる。

住居跡1の埋土からは、土器の他にサヌカイトの石錐や刃器のほかフレークが、壁溝内からはチップが密集して出土している。他の住居跡からは石器やフレーク等は出土していない。住居跡4からは土器片が若干出土しているのみである。石包丁や石斧、鉄器等は出土していない。

台状墓は、今回の調査で約10m、高さ約1mの方形にプランを復元することも可能である。中央の主体部、墳丘盛土等は削平され失われたと考えられる。墳丘全面で地山を観察でき、周溝部から墳頂までは高さ1～1.2mの比高差を測る。墳丘の下半部は地山を削り、整形したのである。特に北東側は意識したらしく溝を設け、尾根を切断している。墓の裾部には土壙墓を配置し、更にその外縁には3基の土器棺を埋葬し、墓域を構成していたと考えられる。

古墳は、盛土、石室の石材、棺、副葬品等、全てを抜き取っていた。かろうじて玄門部に自然石を用いた右組みが残されていただけである。石室部や周囲からは第39図に示すような遺物が出土している。出土遺物のうち弥生土器を除く遺物を棺材や古墳副葬品とすれば、古墳の建築・横穴式石室へ木棺を埋葬した時期は7世紀代が考えられ、8世紀の時期に追葬ないし蔵骨器が埋葬されたことが（72・73・75・76・86・87）の出土須恵器・土師器から考えられる。今回検出した古墳は1基であるが周辺にまだ未発見の古墳が存在する可能性がある。

横穴式石室ではあるが、従来の巨材を用いた石室とは異なり、大人が数人で動かせるような自然石を加工せずに使用しているのが特徴である。また、古墳の墳形は円形とも方形とも表現し難い状況である。ここに古墳建築に携わった人々の集団が小規模化した様子が、墳形、古墳と石室の規模、使用石材の大小の加工度合によって知ることができる。

土壤 現場 番号	調査区	地区名	土壤 構名	現場 土壤 構名	平面形	方位	規 模 (長さ・幅・深さ) (単位cm)
1	2区	a3	土壤	S-1	長円形	N23° 30' E	68・56・10~14
2	2区	j3	溝	SD-2	直線	N21° 40' E	166・42・19
3	2区	j3	溝	SD-3	くの字形	N43° 15' E	260・40・2~27
4	2区	j3	溝	SD-4	直線	N70° 30' E	314・52・32 (19)
5	2区	j3	溝	SD-5	不定形	N20° 15' E	255・105・48 (28)
6	2区	j3	溝	SD-6	直線	N20° 15' W	430・47~64・13 (18)
7	2区	j3	溝	SD-7	ゆるいくの字形	N5° W	365・22~38・18~10
8	2区	j2	落込	S-1	くの字形	N61° E	860・280・45~27
9	2区	j1	落込	S-2	くの字形	N10° W	420・178・31
10	2区	j1	落込		台形	N39° 40' E	360・56・34~14
11	2区	j1	落込		弧状	N70° 30' E	330・90・23 (17)
12	2区	j1	土器棺-2		方形	N63° 45' E	62・65・15~30
13	2区	j10	落込		直線	N94° E	195・40・33
14	2区	j10	落込		始形	N78° 30' E	336・114・34~48
15	3区	i19	落込		くの字形	N57° E	750・48・46
16	3区	a2	溝		直線	N41° W	330・50・9
17	3区	a2	溝		直線	N32° E	130・37・16
18	3区	a2	土壌	小型	円形	N36° W	52・62・12
19	3区	a2	ビット		長円形	N36° 15' W	33・28・18
20	3区	a2	上傾		円形	N73° 20' E	57・52・24
21	3区	a2	ビット		円形	N5° 30' W	20・16・16
22	3区	a2	ビット		円形	N4° W	17・12・19
23	3区	a2	ビット		円形	N13° E	36・32・28
24	3区	a2	土壤		かくばった円形	N13° 30' W	136・128・25 (50)
25	3区	a2	土壤	小型	円形	N53° E	60・54・12~23
26	3区	a2	ビット		長円形	N60° W	36・27・27~33
27	3区	a2	ビット		円形	N29° 20' E	28・26・12
28	3区	a2	上傾		三角状の円形	N22° 30' W	108・97・21~41
29	3区	a2	ビット		円形		17・15・21~26
30	3区	a1	ビット		円形	N73° 30' W	34・22・19
31	3区	a1	土壤		方形	N41° 30' W	128・80・8~30
32	3区	b1	ビット		長円形	N13° 30' E ピット ト判N35° 40' E	28・22・21~
33	3区	a1	ビット		角ばった円形	N7° 30' W	29・28・17~30
34	3区	a1	ビット		円形	N7° 30' W	27・26・31
35	3区	a1	ビット		円形	N57° 50' E	20・18・34~24
36	3区	a1	溝		直線	N38° 15' E	623・48 (74)・26~20
37	3区	a1	上傾		方形	N24° 10' W	247・243・31~100
38	1区	a10+1	土壤盛1		圓丸方形	N56° E	226・80・25~50寸172・29・30
39	1区	a9+10	溝		弧状	N60° W	1070・85~220・12~83,70,90.
40	1区	a10	土壤盛2	土壤盛4	長方形	N60° 30' W	197・43・28~31
41	4区	a10	土器棺1		円形	N19° E	59・57・15
42	4区	a9+10, b9+10	台状墓	SX-1	方形	N60° W	高さ100以上 (推定値) 一辺約10.5m
43	4区	j8	ビット		円形	N78° 10' E	15・17・14~19
44	4区	j8	ビット		円形	N25° W	30・28・13~16
45	4区	j8	溝		直線	N21° W	410・65・12
46	4区	j8	ビット		円形	N79° E	28・26・19~28
47	4区	j8	ビット		円形	N72° E	26・24・32~39
48	1区	j8	ビット		円形	N76° 20' E	30・27・14~2
49	4区	j8	溝		直線	N4° W	640・29・15
50	4区	a8	土器棺3		いびつな円形	N34° E	44・39・15
51	4区	a8	溝		ゆるいくの字形	N18° 25' W	175・44・18
52	4区	a7, b7	溝	台状墓の周溝	直線 2条の溝	N33° E (北西) N 32° W (南西)	(北西) 750・120~160・70~120、(西側) 800~ 80~115・40~80
53	4区	b7	溝		直線	N10° E	208・52・17
54	4区	a7, b7	溝 無道		弧状	N70° ~40° W	540・(上) 100~180 (下) 40~60・20~120
55	4区	a7	石室跡	SX-2落込	方形	N7° W	(上) 410・220・100、(下) 360・140・100
56	4区	b8	住居址4	SB-5	方形	N14° 15' E	(上) 360・350・103、 (下) 280・265・30~100
57	4区	b8	ビット	SB-4柱穴	円形	N64° 45' W	23・20・14
58	4区	b8	溝	SB-4壁溝	コの字形	N14° 15' E	(北) 250 (西) 270 (南) 150・14・13

地盤 現場 番号	調査区	地区名	造構名	現場造構名	平面形 方 位	堤 模(長さ・幅・深さ)(単位cm)
59	4区	b9	溝		直線	N46° 40' E 580・46・13
60	4区	b9	溝	くの字形	N19° ~33° W 460・55~115・22~44	
61	4区	b9	自然地形			
62	4区	b9, c9	溝	直線	N54° E 220・40・47	
63	4区	c9	自然地形	自然地形		
64	4区	b9	溝込	コの字形	N48° E 485・100・40	
65	4区	b9	落込	直線	N52° E 160・30・5	
66	3区	c10	施土壟	方形	N85° W 95・56・5~16	
67	3区	c10	段状ナラ落込	コの字形	N83° E 490・95・60~98	
68	3区	c10	溝	くの字形	N7° E, N65° W 250・32・5~17	
69	3区	c10+1	段状ナラ	直線	N71° W 1400・50・30	
70	3区	b1	落込	馬蹄形	N20° E 250・120・30~80	
71	3区	b1	住居跡3	SB-3	長円形	N64° 10' W 460・360・44
72	3区	b1	溝	SB-3	長円形	N84° 10' W 960・20・12~16
73	3区	b1	ピット	SR-3	円形	N25° E 45・40・40
74	3区	b1	ピット	SB-3	円形	N30° E 55・50・40
75	3区	b1	凹み石	SB-9	方形	20・20・14
76	3区	b1	ピット	SB-3	円形	N65° E 40・35・12
77	3区	b1	ピット	SB-3	円形	N12° 45' E 38・36・16
78	3区	b1	ピット	SB-3	円形	20・15・19
79	3区	c3	ピット	(北) SB-2	円形	24・24・33
80	3区	c3	ピット	(南) SB-2	円形	28・24・39
81	3区	c3	溝	SB-2	コの字形	(420+110+120) 650・15・15
82	3区	c3	往開跡2	SR-2	方形(コの字形)	500・220・60
83	3区	b3	方形土壟		鷹丸方形	N78° W 180・155・90~49
84	3区	b3+4	溝		ゆるいし字形	N5° 15' W, N79° (250+350) 600・76~35・10
85	3区	b4	ピット		角ばいた円形	N61° 30' E 30・30・14
86	3区	b4	ピット		角ばいた円形	85-86N56° E 27・25・18
87	3区	b4	ピット		角ばいた円形	15・12・15
88	3区	b3+4	溝	b3+b4の小溝	弧状	N37° 30' W 526・40 (20)・12~14
89	3区	b3+4	溝	東西溝	直線	N50° 30' E 1350・120~150・67~
90	3区	b3+3, c3+3	住居跡1	SB-1	円形(A, B) 脚張鷹丸方形(C)	N20° W (A) 865・845・22~54 (B) 720・720・15~10 (C) 450・450・15~6
91	3区	b2+3	ピット	SB-1 P-1	鷹丸方形	91-92N43° W 97・40・38・61~63
92	3区	b2+3	ピット	SB-1 P-2	不定形	99-92N42° 30' E 56・48・72
93	3区	b2+3	ピット	SB-1 P-3	不定形	93-95N59° W 89・51・74
94	3区	b2+3	ピット	SB-1 P-10	円形	N41° W 23・17・18
95	3区	b3	ピット	SB-1 P-7	円形	95-93N59° E 53・53・43
96	3区	b3	ピット	SB-1 P-8	胸張円形	64・52・9
97	3区	b3	ピット	SB-1 P-13	長円形	N18° 30' W 23・18・61
98	3区	b3	ピット	SB-1 P-14	円形	18・17・18
99	3区	b13	ピット	SB-1 P-4	円形	32・27・31
100	3区	b13	中央土壟	SB-1 炉跡(東西)	円形	N28° W (東) 90・70・ (20+15) 断、 (西) 105・95・ (40+21) 古
101	3区	b2, c2	溝	SB-1	直線	N20° W 560・20~35・15~40
102	3区	b3	溝	SB-1	直線	N89° E 300・200~300・10
103	3区	b2	溝	SB-1	直線	N6° E 330・15~20・8~12
104	3区	b2+3	溝A	SB-1	円形	N20° W 88850~835~20~35・10~11
105	3区	b2+3	溝B	SB-1	円形	N29° W 760・740・6~12
106	3区	b2+3	溝C	SB-1	胸張方形	N20° W 600~530~400~400~1930~4~6
107	3区	a3	土壟	S-2	長円形	N6° W 106~67~34~7
108	3区	b1	ピット	SB-3	円形	15・15・7
109	3区	b1	ピット	SB-3	円形	18・15・7
110	3区	b1	ピット	SB-3	円形	10・10・4
111	3区	b2	ピット	SB-1	円形	18・17・10
112	3区	b2+3	ピット	SB-1	円形	8・8・22
113	3区	b3	溝	b3+4の小溝	弧状	N46° 30' W 690・48・2~8
114	2区	a3	ピット		円形	28・28・10
115	1区	a10	土壟	土壟	方形	60・42・28

# 遺物観察表

件番No.	種類	器種	法 器 類				色 調	地成	既存 %	持 土	備 考
			口 徑	器 高	径	その他					
1, 2	弥生	底部		残存3.1	5.4		(内) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (外) 10YR7/3Cに近い黄褐色 (断) 10YR5/4Cに近い黄褐色	やや 良	1	やや粗、1~4mmの砂粒、 5大の小石粒、貝 岡石	生駒西麓の土使 用
3, 4	弥生	口			7.3		(内) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (外) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (断) 10YR5/4Cに近い黄褐色	やや 良	4	やや密、2~3mm粒	
5, 9	弥生	底	細胞底3.7 体部底20.4				(内) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (外) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (断) 10YR5/4Cに近い黄褐色	やや 良	10	やや密、1~4mmの微砂粒及び4mm の大の小石粒	
6	弥生	高环(环部)	(20.8)	残存3.95			(内) 2.5YR5/3に近い赤褐色 (外) 5YR7/1赤褐色 (断) 2.5YR4/3に近い赤褐色	やや 良	5	やや密、長石、石 英	反転復元
7	弥生	底		残存3.5			(内) 7.5YR1/1赤褐色 (外) 7.5YR4/2灰赤褐色 (断) 7.5YR4/2灰赤褐色	やや 良	5	やや粗、長石、チャ ート	反転復元
8, 15	弥生	高环	直径 17.6				(内) 10YR7/4Cに近い黄褐色 (外) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (断) 10YR4/2灰赤褐色	やや 良	10	密、1mm以下の微 砂粒	
11	弥生	底		残存3.2			(内) 8YR3/2赤褐色 (外) 5YR4/6赤褐色 (断) 5YR4/6赤褐色	良		やや密、長石、石 英	反転復元
12, 13	弥生	表	体部底7.9	9.2	復元體部径 12.6		(内) 10YR5/1赤褐色 (外) 5YR5/6赤褐色 (断) 7.5YR4/4に近い褐 色	良	10	密、1~4mmの砂 粒	
14	弥生	不明		残存8.3			(内) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (外) 10YR5/4Cに近い黄褐色 (断) 10YR5/4Cに近い黄褐色	やや 良	1	密0.5~2の砂粒	
16	弥生	高环	(23.2)	残存4.2			(内) 10YR5/6灰赤褐色 (外) 2.5YR7/6灰赤褐色 (断) 5YR4/6灰赤褐色	やや 良	5	密、1mm前後の粗 粒	
17	弥生	小平裏	(8.8)	残存4.65			(内) 2.5YR4/2赤褐色 (外) 2.5YR4/2赤褐色 (断) 2.5YR4/4に近い赤褐色	やや 良	20	やや密、長石、ク サリ隕	反転復元
18	弥生	底		残存7.9	4.8		(内) 5YR7/4Cに近い 色 (外) 5YR7/4Cに近い 色 (断) 2.5YR5/8灰赤褐色	やや 良	100	やや粗、長石、石 英	
19	弥生	(長環) 底		残存16.0	4.4		(内) 10YR7/3Cに近い黄褐色 (外) 10YR7/4Cに近い黄褐色 (断) 5YR5/6灰赤褐色	やや 良	50	密、1mm前後の粗 粒	
20	弥生	台付鉢		残存9.9			(内) 5YR5/6灰赤褐色 (外) 10YR5/6灰赤褐色 (断) 10YR5/6灰赤褐色	やや 良	20	密、1mm前後の粗 粒	
21	弥生	高环(脚部)		残存5.6			(内) 2.5YR4/2灰赤褐色 (外) 2.5YR4/2灰赤褐色 (断) 2.5YR4/6灰赤褐色	やや 良		粗粒のような粗粒 構造がスカラシ間に 連続されている	
22	弥生	底(底部)		残存3.1	復元5.2		(内) 10YR5/3Cに近い黄褐色 (外) 10YR4/2灰赤褐色 (断) 7.5YR4/4に近い褐 色	良	1	やや密、1~4mm 砂粒	
23	弥生	(底部)		3.1	7.4		(内) 2.5YR4/2灰赤褐色 (外) 2.5YR4/2灰赤褐色 (断) 2.5YR4/2灰赤褐色	良	1	やや密、1~4mm の砂粒、小石粒	
24	土師器	鉢	(10.5)	残存5.0			(内) 10YR5/6灰赤褐色 (外) 7.5YR5/6灰赤褐色 (断) 7.5YR5/6灰赤褐色	良	5	密	
25	弥生	鉢	(12)	残存5.8			(内) 2.5YR5/2灰赤褐色 (外) 2.5YR5/2灰赤褐色 (断) 2.5YR5/2灰赤褐色	良	30	密1mm、以下の微 砂粒	
26	弥生	底		残存8.7			(内) 10YR5/3Cに近い黄褐色 (外) 5YR5/4Cに近い黄褐色 (断) 5YR5/3C黒褐色	良	5	粗、長石、石英、 クサリ隕、チャ ート	反転復元
27	弥生	底	15	10.9	底径4.1		(内) 10YR5/1灰赤褐色 (外) 10YR4/6灰赤褐色 (断) 5YR4/6灰赤褐色	良	30	粗、長石、石英	一部反転復元
28	弥生	底(底部)		残存3.3	底径4.7(4.0)		(内) 7.5YR3/3に近い 色 (外) 7.5YR4/1灰赤褐色 (断) 7.5YR4/4灰赤褐色	やや 良		やや密、長石、石 英	
29	弥生	底(底部)		残存2.7	底径4.4(4.7)		(内) 7.5YR3/1灰赤褐色 (外) 7.5YR2/1灰赤褐色 (断) 7.5YR4/4灰赤褐色	やや 良	80	やや粗、長石、石 英、チャート	
30	弥生	高环(脚部)	15.6	残存5.6			(内) 10YR5/6灰赤褐色 (外) 7.5YR5/6灰赤褐色 (断) 5YR4/4Cに近い赤褐色	やや 良	60	粗、長石、石英、 クサリ隕	
31	弥生	高环		残存9.6			(内) 5YR5/3Cに近い 色 (外) 10YR4/6灰赤褐色 (断) 5YR5/6灰赤褐色	良	25	やや密、長石、石 英、チャート	反転復元
32	弥生	高环(脚部)		残存6.0	底径7.2		(内) 10YR5/3Cに近い 色 (外) 10YR5/3Cに近い 色 (断) 5YR5/3B灰赤褐色	良	80	やや密	反転復元
34	埴輪	円筒		残存7.3			(内) 5YR5/1灰赤褐色 (外) 5YR5/1灰赤褐色 (断) 5YR5/1灰赤褐色	良		やや粗、長石	

井戸番号	種類	器種	法 量				色	地或 塊存 在	胎 土	備 考	
			口 徑	高 度	径	その他					
35	上層部	皿	17.4	残存2.5			(内) 5YR6/4にない黒 (外) 5YR6/3にない黒 (断) 5YR4/1赤褐色	良	20	やや粗、長石、ク サリ繊、雲母	反転復元
36	瓦質	羽根	23.5	残存4.1		胸深89.6	(内) 5D3/1黒青灰 (外) 5D3/1灰青灰 (断) 7.5YR7/1灰白	良	5	やや密、長石、石 英	反転復元
41	寄生	器台	17.7	17.2	底径16.8		(内) 2.5YR5/8明赤褐 (外) 2.5YR5/8明赤褐 (断) 7.5YR6/6暗褐	やや 良	65	やや粗、長石、ク サリ繊	
42	寄生	器台	16.5	16.4	13.8		(内) 2.5YR5/8明赤褐 (外) 2.5YR5/8明赤褐 (断) 7.5YR6/6暗褐	良	100	やや粗、長石、ク サリ繊、石英	
43	寄生	器台	16.2	残存9.8			(内) 2.5YR5/8明赤褐 (外) 2.5YR5/8明赤褐 (断) 7.5YR6/6暗褐	良	60	やや粗、長石、ク サリ繊	反転復元
44	寄生	器台		残存5.45	10.2		(内) 2.5YR5/4にない赤褐 (外) 2.5YR5/4にない赤褐 (断) 2.5YR5/8赤褐	良	瓶部 付近 60	やや密、長石、ク サリ繊	反転復元
45	寄生	高环	20	15.2	底径10.8		(内) 2.5YR6/6暗 (外) 2.5YR6/6暗 (断) 2.5YR6/6明赤褐	やや 良	70	やや粗、長石、ク サリ繊、雲母	
46	寄生	高环	19.8	14.6	底径11.9		(内) 5YR6/6暗 (外) 5YR6/6暗 (断) 5YR6/6褐灰	良	80	やや粗、長石、ク サリ繊	
47	寄生	壺 (把手付)	推定復元 8.4	残存5.9			(内) 10YR7/1灰白 (外) 5Y7/1灰白 (断) 2.5Y5/5黄褐	やや 不良	口縁 部付近 10	粗、小石片を多量 に含む	
48	寄生	鉢	(13.8)	9.05	4.8		(内) 7.5YR7/7灰白 (外) 10YR6/2灰赤褐 (断) 2.5YR4/4にない赤褐	良	30	粗、長石、クサリ 繊、石英	一部反転復元
49	寄生	壺		残存16.5	4.4最大(4.9)		(内) 10YR6/2灰赤褐 (外) 10YR6/3にない黄褐 (断) 10YR6/2灰赤褐	やや 良	瓶体 部付近 60	外壁木葉痕 (柘木)	
50	寄生	壺 (底板)		残存7.25	4.95		(内) 10YR7/1にない黄褐 (外) 10YR7/1にない黄褐 (断) 5YR5/4暗赤褐	やや 不良	100	粗、長石、クサリ 繊、石英	反転復元
51	寄生	壺	11.3	11.4	底径3.9		(内) 7.5YR3/3暗褐 (外) 7.5YR3/3暗褐 (断) 10Y5/5黄褐	やや 良	90	粗、長石、石英	一部反転復元
52	寄生	壺	10.3	12.9	底径4.1		(内) 10YR5/1灰褐 (外) 2.5YH6/8暗赤褐 (断) 2.5YR6/8暗赤褐	やや 良	85	やや密、長石、石 英	
53	寄生	壺	16.1	残存7.1			(内) 2.5YR7/3灰 (外) 10YR6/1暗赤褐 (断) 10YR6/3にない黄褐	良	60	やや粗、長石、石 英、クサリ繊	一部反転復元、 外面爆付
54	寄生	壺	17.6	残存11.5			(内) 2.5YR7/3灰 (外) 7.5YR7/7灰白 (断) 2.5YR7/3灰	良	10 以下	やや粗、長石、石 英、クサリ繊	反転復元
55	寄生	壺	16.9	推定47(35)			(内) 7.5YR7/4にない黒 (外) 7.5YR4/1褐色 (断) 7.5YR5/6明赤褐	やや 不良	45	やや粗、長石、石 英、クサリ繊	
56	寄生	壺	長径部12.4 短径部11.7	残存12.9			(内) 5YR4/2灰褐 (外) 10YR6/3にない黄褐 (断) 5YR5/4にない赤褐	良	80	粗、長石、クサリ 繊、石英	一部反転復元
57	寄生	壺	(13.8)	21.25	5.3最大(5.8)		(内) 5YR5/6明赤褐 (外) 5YR5/6明赤褐 (断) 5YR5/6明赤褐	やや 不良	60	やや粗、長石、石 英、クサリ繊	一部反転復元
58	寄生	壺	(14.4)	推定復元 29.3	5.4		(内) 2.5YR6/2灰 (外) 10YR6/4にない黄褐 (断) 10YR6/4にない黄褐	良	90	粗、1~5mmの砂 粒	
59	寄生	壺 (脚部)	(13.4)	残存10.5			(内) 2.5YR6/4にない黄褐 (外) 10YR5/3にない黄褐 (断) 10YR5/3にない黄褐	やや 良	10	やや粗、1~8mmの 砂粒及び小石粒	生垣西側の土を 使用
60	寄生	壺 (長頸)		残存19.4			(内) 10YR5/3にない黄褐 (外) 10YR5/3にない黄褐 (断) 10YR4/3にない黄褐	やや 良	口縁 部付近 70	粗、長石、角閃石、 雲母	一部反転復元
61	寄生	壺 (長頸)	(23.6)	残存28.3			(内) 5YR5/6明赤褐 (外) 5YR5/6明赤褐 (断) 5YR5/6明赤褐	やや 不良	60	やや粗、長石、ク サリ繊	反転復元
62	寄生	壺 (台付長 頸)	(7)	残存30.0			(内) K3/0黑 (外) 2.5YR5/6明赤褐 (外) 2.5YR4/1赤灰	良	体部 80	やや粗、長石、雲 母、クサリ繊	口縁部反転復元
63	寄生	高环		环部残5.3	胸深3.8		(内) 7.5YR4/4暗 (外) 7.5YR4/4暗 (断) 7.5YR4/4暗	やや 良	粗、長石、石英、 クサリ繊	反転復元	
64	寄生	壺	(13.1)	残存4.6			(内) 10YR6/3にない黄褐 (外) 2.5YR5/3にない黄褐 (断) 2.5YR5/3赤褐色	やや 不良	5	やや粗、長石、石 英	反転復元
65	寄生	壺	(推定復元) 10.5	5			(内) 10YR5/3にない黄褐 (外) 2.5YR5/3にない黄褐 (断) 10YR5/3にない黄褐	やや 良	60	粗、1~3mmの砂 粒	

件名	種類	器種	度量				色調	地成	保存%	崩土	備考
			口径	器高	径	その他					
66	寄生	小豆甕	(6)	7.1	2.9		(内) 10YR7/6明黄褐色 (外) 10YR7/6明黄褐色 (断) 5YR5/3明黄褐色	良	20	やや粗、長石、石英、チャート	一部反転復元
67	寄生	高环					(内) 10YR7/6明黄褐色 (外) 10YR7/6明黄褐色 (断) 7.5T/4H4/4輪	やや良	一部	粗、長石、カオリナイト、石英	反転復元
68	寄生	高环		残存10			(内) 5YR5/3C15ない青褐色 (外) 5YR5/3C15ない青褐色 (断) 5YR5/3明黄褐色	良	90		
69	寄生	鉢(台付)		残存7.45	(9.6)		(内) 5YR5/3C15ない青褐色 (外) 5YR5/3C15ない青褐色 (断) 5YR5/3明黄褐色	良	25	粗、長石、カオリナイト、石英	一部反転復元
71	寄生	甕(底部)		残存9.3	6.7		(内) 7.5T/4H4/4輪 (外) 2.5T/4H5赤褐色 (断) 2.5T/4H5赤褐色	やや不良	100	粗、チャート、長石、鐵、雲母	一部反転復元
72	須恵器	壺(底部)		残存5.2	高台(7.5)		(内) 5P2B1/古青 (外) 5P2B1/古青 (断) 5P2B1/古青	良	20	やや密	反転復元
73	須恵器	有蓋鋸足壺	(12.9)	残存6.3			(内) 10HG5/1灰褐色 (外) 10HG5/1灰褐色 (断) 10HG5/1灰褐色	良	30	やや暗、白、灰色 砂粒	反転復元
74	須恵器	環蓋	(10.3)	残存3.2			(内) 10YR7/1灰白色 (外) 5P2B1/古青 (断) 5P2B1/古青	良	20	やや暗	反転復元
75	須恵器	壺(底部)		残存6.7			(内) 10Y/1灰 (外) 5P2B1/古青 (断) 5P2B1/古青	良	5	やや暗、白、灰色 砂粒	反転復元
76	土師器	高环	(16.4)	残存7.2			(内) 7.5T/4H4/6輪 (外) 2.5T/4H5赤褐色 (断) 2.5T/4H5赤褐色	やや良	密、長石		一部反転復元
77	寄生	壺	9.1	13.5	4.9		(内) 10YR7/4C15ない青褐色 (外) 10YR7/4C15ない青褐色 (断) 10YR7/4C15ない青褐色	やや良	100	やや密、0.5~5mmの砂粒 の織	5×7.5cmの黒斑 あり
78	寄生	壺	復21.6	残存4.2			(内) 10YR7/4C15ない青褐色 (外) 10YR7/4C15ない青褐色 (断) 10YR7/4C15ない青褐色	やや良	5	やや暗、1~3mm の砂粒	
79	寄生	壺	復20.2	残存8.5			(内) 2.5T/4C15ない青 (外) 10YR5/3C15ない青褐色 (断) 10YR7/3C15ない青褐色	やや良	5	密1~4mm、の砂粒	
80	寄生	高环		残存4.5		基部外径7.4、 内径3.7	(内) 7.5T/6H6輪 (外) 2.5YR6/6輪 (断) 10YR7/4H4明黄褐色	やや良	10	やや密、0.5~5mm の織、1~6の角閃石 、石	环底円盤部に生 れ西側の上使用、 环底部表面に上
81	寄生	小豆甕		残存6.7	長径4.6 短径4.3		(内) 5YR6/6輪 (外) 10YR7/4C15ない青褐色 (断) 2.5T/4C15赤褐色	やや良	20	やや密、1~3mm の砂粒	4.5×5.0cmの黒 斑あり、穿孔1.5 ×1.1cm
82	寄生	甕(底部)		残存5.6	5		(内) 10YR7/4C15ない青褐色 (外) 10YR7/4C15ない青褐色 (断) 10YR7/2灰黄褐色	やや良	5	密、0.5~2mmの砂 粒、穿孔1.5 ×1.1cm	
83	寄生	高环(脚部)		残存9.0			(内) 7.5T/4H4/灰 (外) 2.5T/4H5赤褐色 (断) 7.5T/4H5赤褐色	やや良	30	やや暗、0.5~2mm の織	西方スカシあり
84	土師器	甕	(14)	残存4.6	(9.2)		(内) 2.5T/4H4/灰 (外) 5YR6/6輪 (断) 2.5T/4C15赤褐色	良	5	密、1mm以下の砂 粒、砂粒	
85	寄生	壺(新面のみ)		残存2.9			(内) 7.5T/5H4/4C15ない織 (外) 7.5T/5H4/4C15ない織 (断) 7.5T/5H4/4C15ない織	良	1	密	新面のみ
86	須恵器	壺(裏)	7.8	4.4			(内) 5P1B1/明青灰 (外) 5P2B1/明青灰 (断) 5P2B1/明青灰	良	100	やや暗	ロクロ回転右方 向
87	須恵器	壺	8.5	2.2			(内) 5P2B1/明青灰 (外) 5P2B1/明青灰 (断) 5P2B1/明青灰	やや不良	90	やや密	裏か
88	須恵器	壺(底部)		残存2.5	11.1		(内) N6/0灰 (外) N6/0灰 (断) N6/0灰	良	100	やや密	
89	寄生	高环(脚部)		残存8.6	(11.7)		(内) 10YR7/4赤茶褐色 (外) 10YR7/4赤茶褐色 (断) 5YR5/6赤褐色	やや不良	50	粗、長石、カオリナイト、石英	一部反転復元
90	寄生	高环(脚部)		残存7.0			(内) 10YR7/4赤茶褐色 (外) 10YR7/4赤茶褐色 (断) 10YR7/4赤茶褐色	やや良	5	密	反転復元
91	寄生	底部		残存2.1	6.3(最大6.9)		(内) 2.5T/4H4/6輪 (外) 2.5T/4H4/6輪 (断) 2.5T/4H4/6輪	やや良	底部のみ	粗、長石、角閃石、 チャート	
92	寄生	底部		残存3.2	3.5(最大4.1)		(内) 7.5T/5H6/6輪 (外) 2.5T/5H6/6輪 (断) 7.5T/5H6/6輪	やや良	底部 充形	やや粗、長石、石英、カオリナイト	
93	寄生	底部		残存1.75	4.5(最大5.5)		(内) 10YR7/4C15ない青褐色 (外) 2.5T/5H6/赤褐色 (断) 10YR7/4C15ない青褐色	やや良	底部 充形	やや粗、長石、石英、カオリナイト、雲母	一部反転復元

序号	種類	岩種	法 量				色 調	鉄 成	残 存 %	附 上	備 考
			口 径	高 さ	径	その他					
94	寄生	底部		残存3.8	3.4(最大4.5)		(内) 10YR4/6弱黄褐 (外) 10YR4/6赤 (断) 7.5YR4/6褐	不良	底部のみ	粗、長石、カツリ 鐵、石英	
95	寄生	底部		残存3.85	推定2.35		(内) 7.5YR3/1黒褐 (外) 7.5YR3/2黒褐 (断) 7.5YR3/3暗褐	やや 良	底部一部	やや富	
96	寄生	煮		残存3.5			(内) 10YR7/4Cに近い黄褐 (外) 10YR6/6弱黄褐 (断) 10YR6/6弱黄褐	良	1	やや粗、1~2mm の鐵砂粒	
97	寄生	高坏(坏部)	(19.2)	残存3.65			(内) 2.5YR3/6褐 (外) 2.5YR3/6褐 (断) 7.5YR3/2褐褐	やや 不良	5 以下	やや粗、長石、石 英、カツリ鐵	反転復元
98	寄生	高坏(坏部)	(20)	残存3.6			(内) 5YR5/3弱赤褐 (外) 5YR5/3弱赤褐 (断) 5YR5/4C近い赤褐	不良	5 以下	やや粗、長石、石 英、カツリ鐵	反転復元
99	寄生	煮(口縁)	(22)	残存3.2			(内) 5YR4/6赤褐 (外) 5YR4/6赤褐 (断) 5YR5/6褐	良	5 以下	やや粗、長石、石 英	反転復元
100	寄生	裏	(19.2)	残存3.45			(内) 10R5/7赤 (外) 10R5/7赤 (断) 10R5/7赤	良	5 以下	やや粗、長石、石 英、カツリ鐵	反転復元

### 石器一覧表

区分	種類	長さ	幅	厚さ	実測図
37	ドリル	3.4cm	1.14cm	0.6cm	
38	刃器	4.55cm	2.2cm	0.64cm	図11
39	刃器	5.3cm	4.64cm	1.2cm	図12
40a	チップ	2mm以下			
40b	チップ	2~3mm			
40c	チップ	3mm			
70	凹み石	25.9cm	22.4cm	9.75cm	図36
101	砥石	13.58cm	7.09cm	5.5cm	図94
102	凹み石	21.25cm	7.8cm	7.3cm	図95
103	石皿	22.4cm	11.4cm	8.4cm	図92
104	刃器	5.4cm	3.5cm	0.84cm	
105	石鏡	2.95cm	1.25cm	0.5cm	図93

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	おひらいせき
書名	尾平遺跡
副書名	一般国道富田林バイパス 高地性集落と台状墓及び古墳の調査
卷次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1999-4
編著者名	今村道雄
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おひらいせき 尾平遺跡	おおさかふとんだ ばやし 大阪府 富田林市 東板持町	27214	28	34° 29' 20"	135° 37' 14"	1998年3月 1998年7月	3276m <sup>2</sup>	一般国道 R309号 富田林バイ バス建設工 事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾平遺跡	集落跡 台状墓 古墳	弥生時代 古墳時代	住居跡 溝 土壙 台状墓 (板持5号墳) 土器棺 古墳 (板持6号墳)	弥生土器 須恵器 土師器	弥生時代後期の 高地性集落 弥生時代～古墳 時代の台状墓 古墳時代後期の 横穴式石室

大阪府文化財調査報告1999-4

**尾 平 遺 跡**

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

T E L. 06-6941-0351㈹

発行日 2000年3月

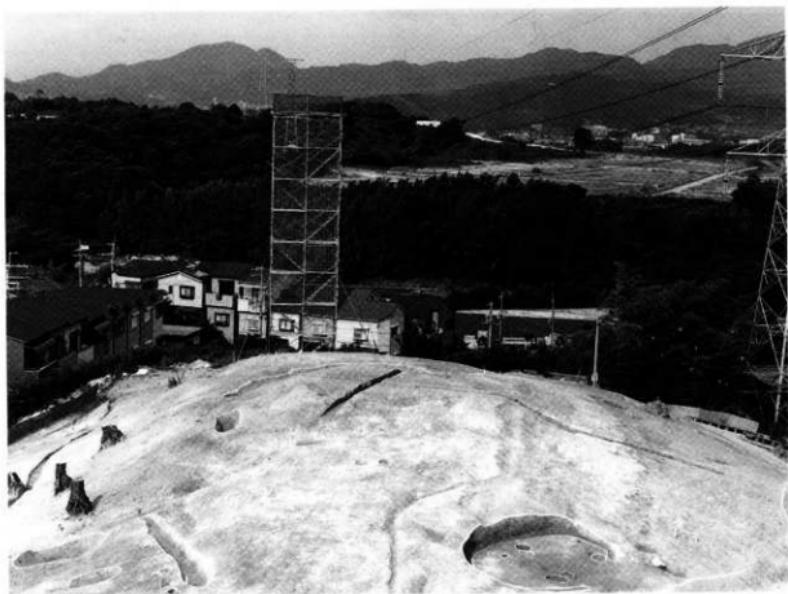
印 刷 ダイコウ印刷株式会社

〒544-0034 大阪市生野区桃谷5丁目3番3号

T E L. 06-6712-6709㈹



調査前全景 1区(右側)、3区(左側)(西から)



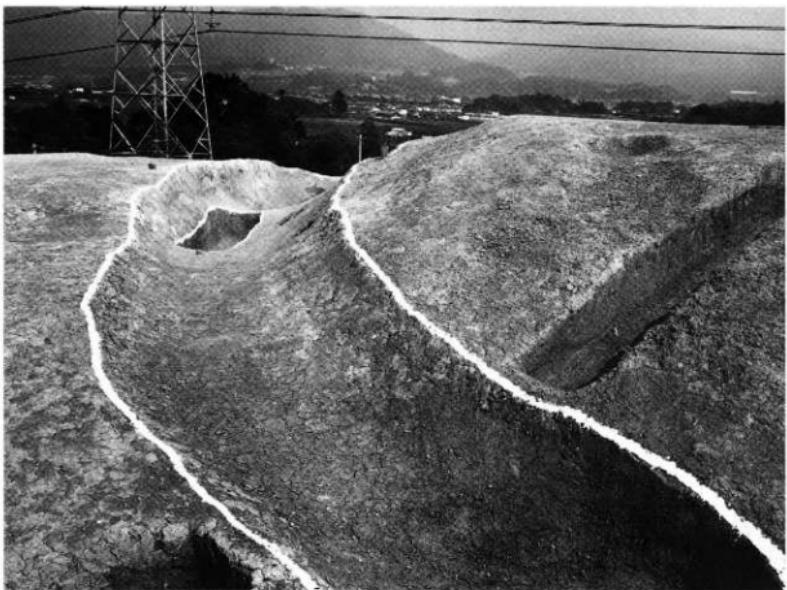
1区・3区全景(南西から)



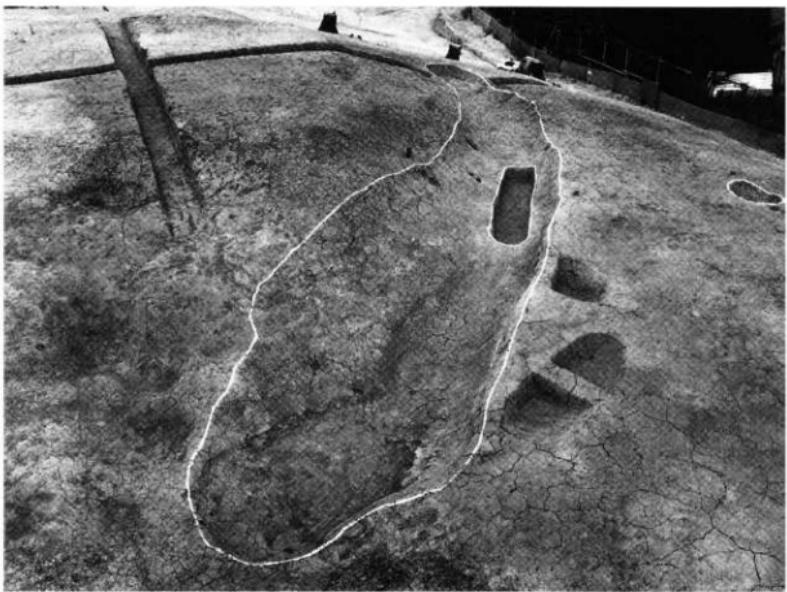
1区・3区全景(西から)



1区・3区全景(北東から)



1号台状墓周溝(遺構 39)全景(南東から)



周溝部(遺構 39)近景(西から)



周溝(遺構 39) 東端土層西面(西から)



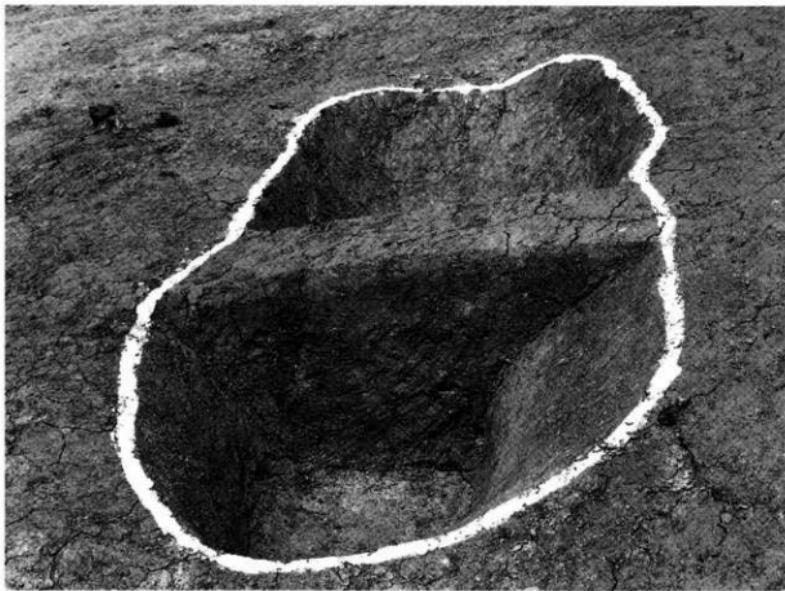
周溝(遺構 39) 東端土層南面(西から)



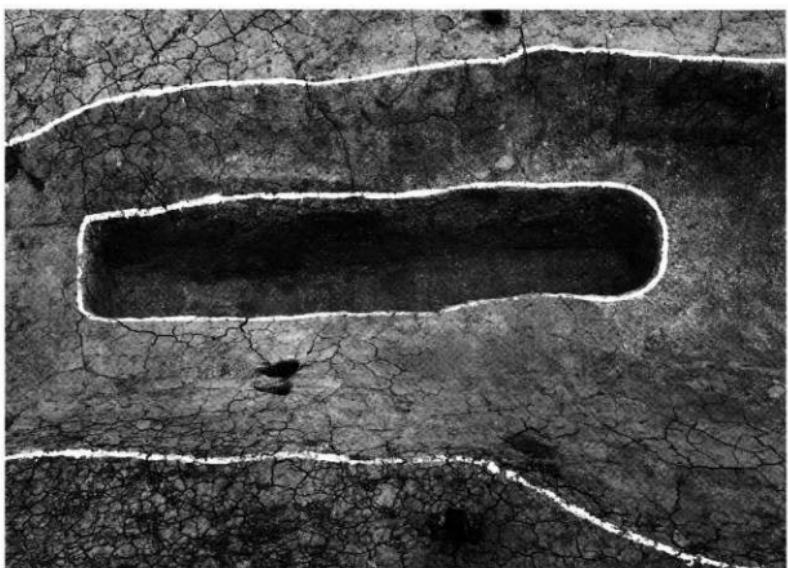
周溝内土壤墓 2(遺構 40) 土層(南から)



土壇墓 1(遺構 38)全景(南西から)



土壇墓 1(遺構 38)土層断面(南西から)



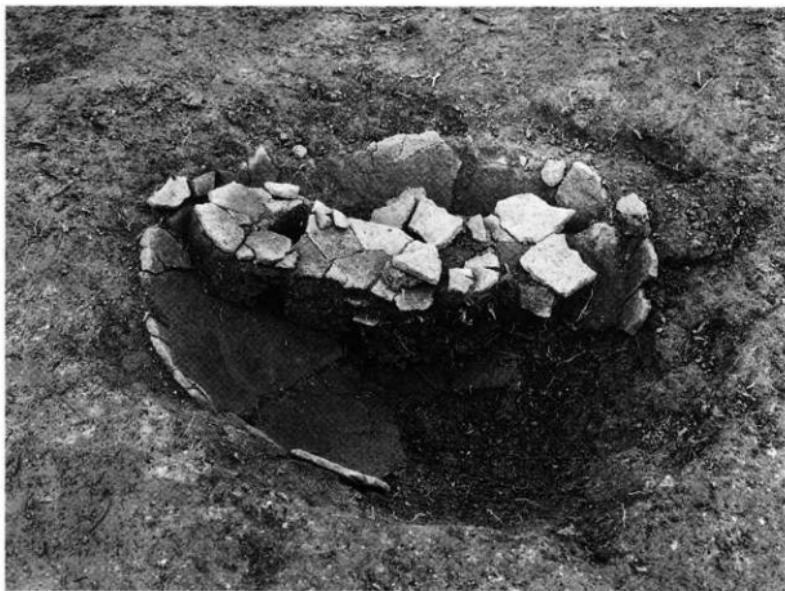
土塙墓 2 (遺構 40) 全景(南西から)



土塙墓 2 (遺構 40) 全景(南東から)



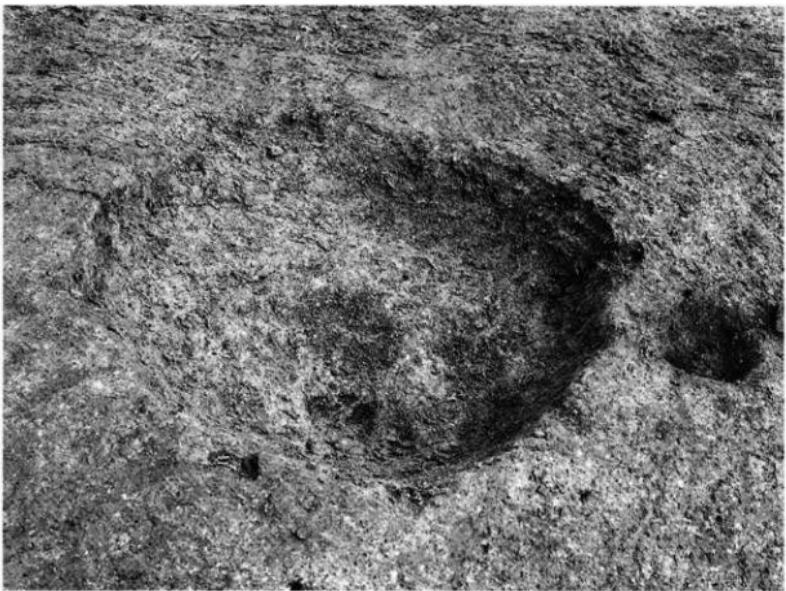
土器棺 1(遺構 41)検出状況(南西から)



土器棺 1(遺構 41)土層断面(南から)



土器棺 1(遺構 41)底部(南から)



土器棺 1(遺構 41)掘形全景(東から)



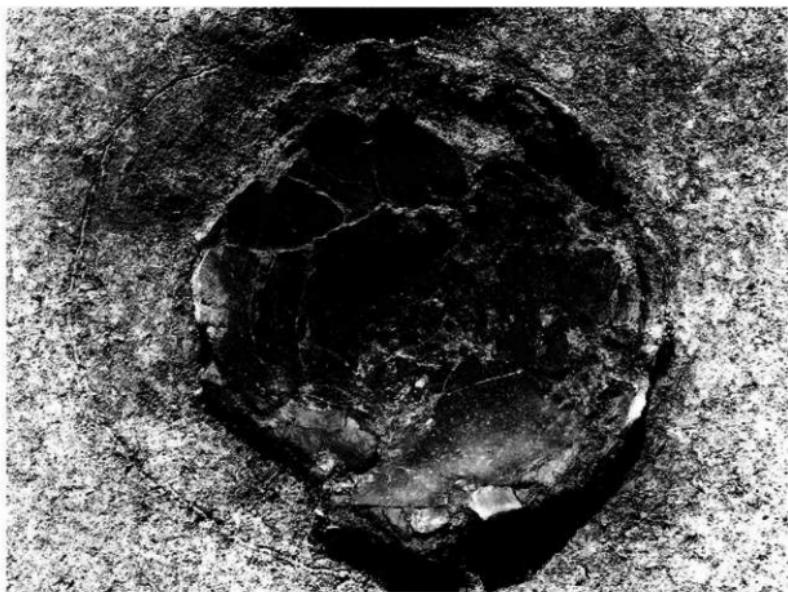
土器棺 2(遺構 12)検出状況全景(南西から)



土器棺 2(遺構 12)底部と円形穿孔(北から)



土器棺 3 (遺構 50) 檢出状況(南から)



土器棺 3 (遺構 50) 底部(南から)



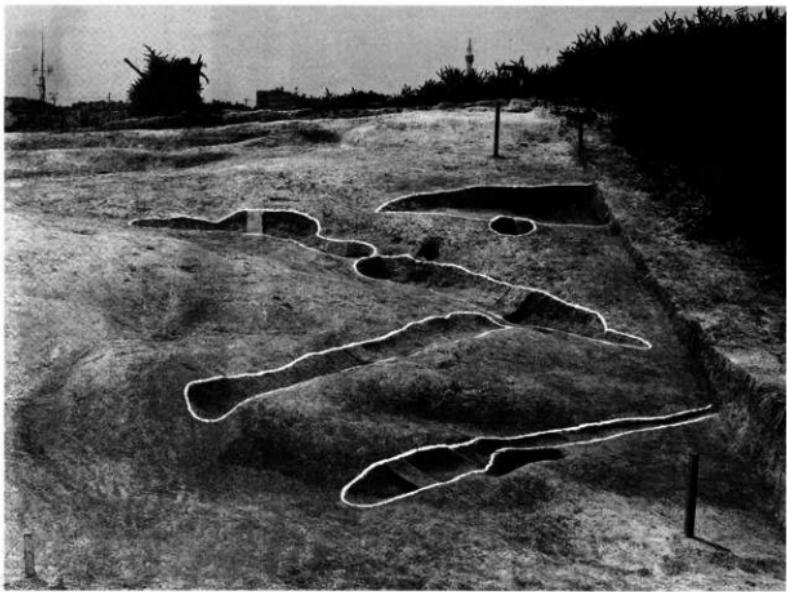
1区～3区近景(西から)



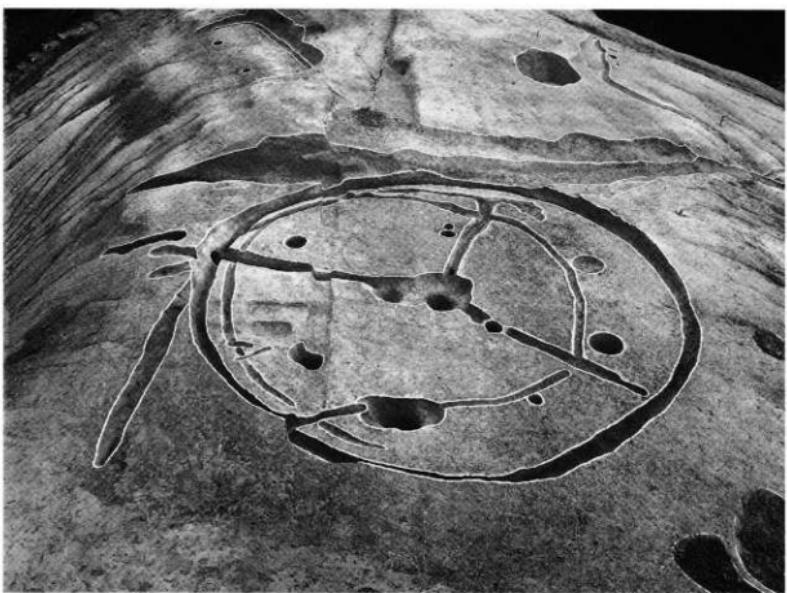
1区～3区近景(南から)



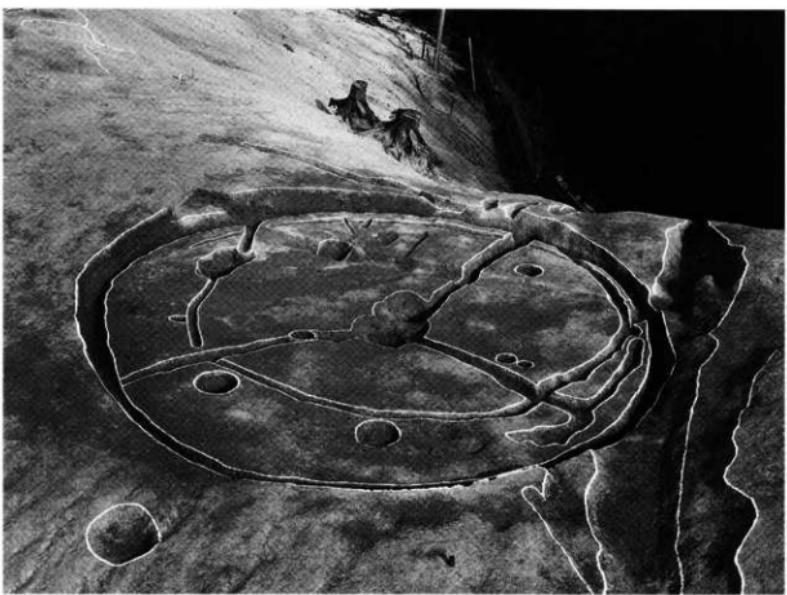
溝(遺構 2~7)全景(南から)



溝(遺構 3~7)全景(東から)



住居跡 1 (遺構 90) 全景(北東から)



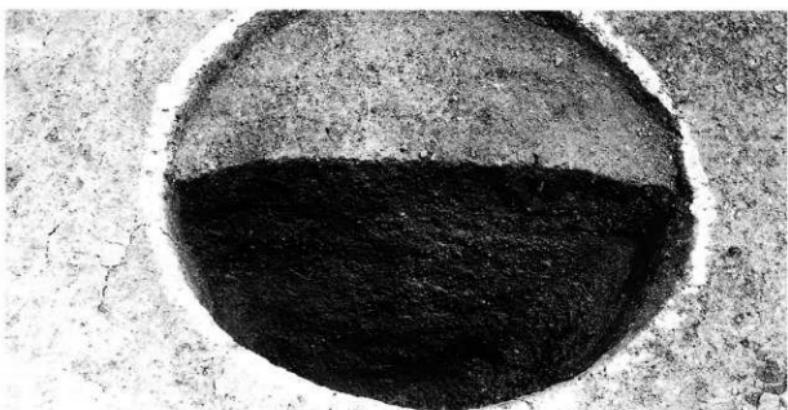
住居跡 1 (遺構 90) 全景(西から)



住居跡 1 (遺構 90) 中央土壤土層断面(南西から)



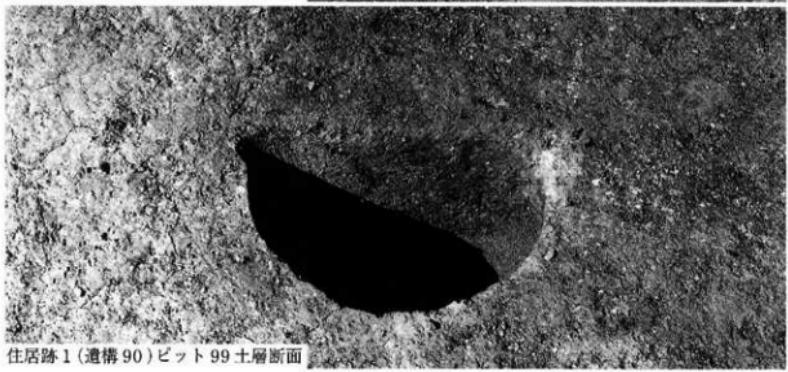
住居跡 1 (遺構 90) 排水溝内遺物出土状況土層断面(南から)



住居跡 1(遺構 90) ピット 91 土層断面



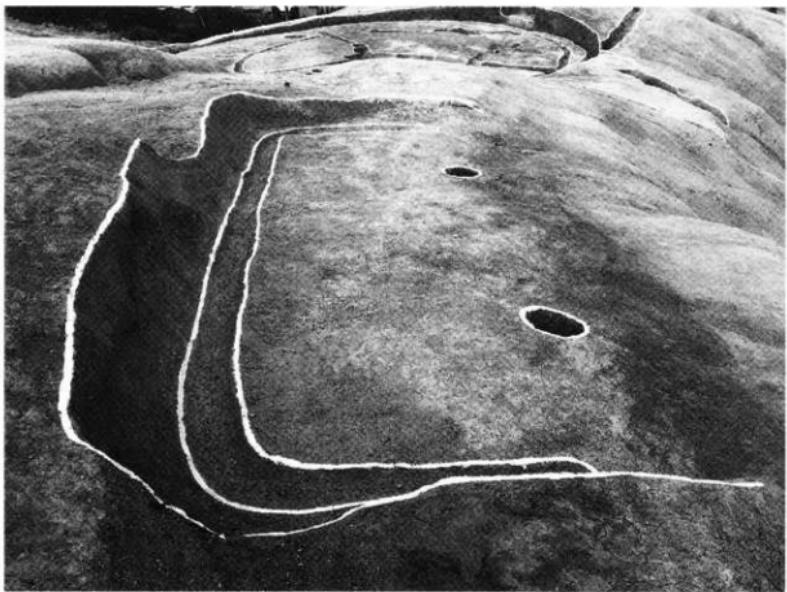
住居跡 1(遺構 90) ピット 92 土層断面



住居跡 1(遺構 90) ピット 99 土層断面



住居跡2(遺構82)全景(北から)



住居跡2(遺構82)全景(南から)



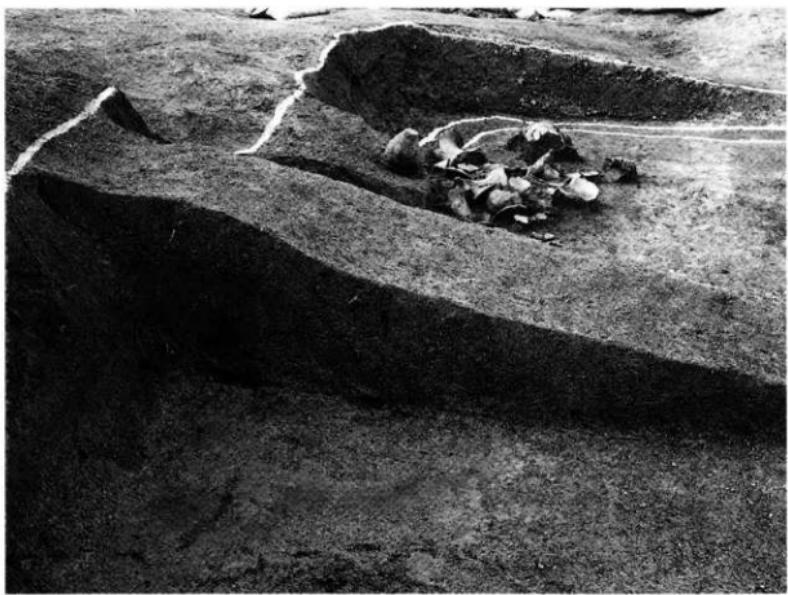
住居跡 2 (遺構 82) 調査状況(北東から)



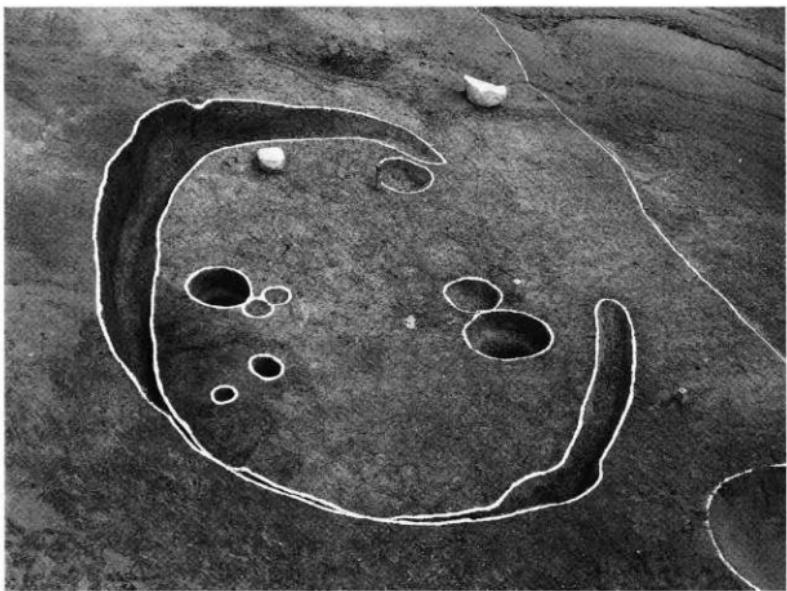
住居跡 2 (遺構 82) 遺物出土状況(北西から)



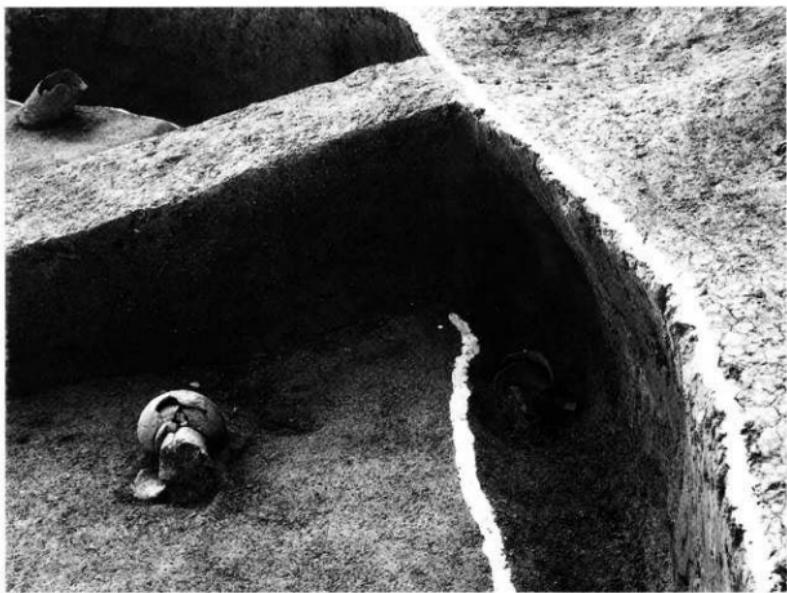
住居跡 2(遺構 82) 遺物出土状況(南から)



住居跡 2(遺構 82) 填土土層断面(南西から)



住居跡 3(遺構 71)全景(西から)



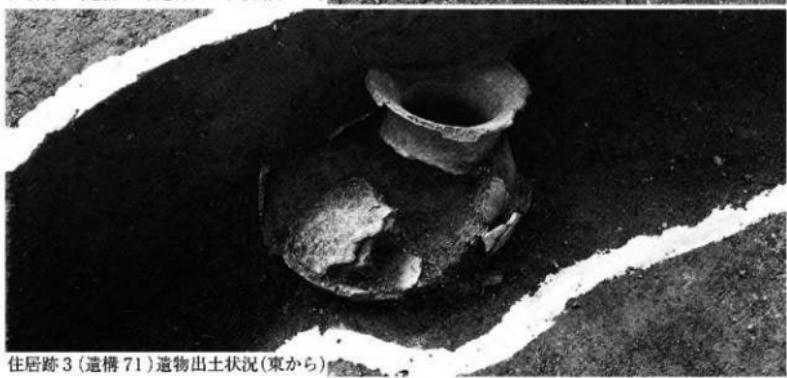
住居跡 3(遺構 71)遺物出土状況(東から)



住居跡 3(遺構 71) 遺物出土状況(南から)



住居跡 3(遺構 71) 遺物出土状況(南から)



住居跡 3(遺構 71) 遺物出土状況(東から)



住居跡 3 (遺構 71) 遺物出土状況(南から)



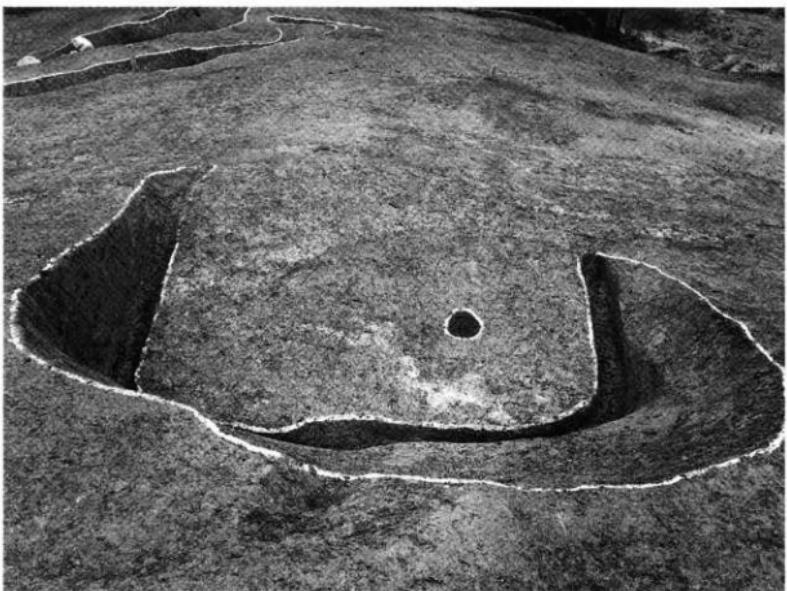
住居跡 3 (遺構 71) 遺物出土状況(南から)



住居跡 3 (遺構 71) 遺物出土状況(南から)



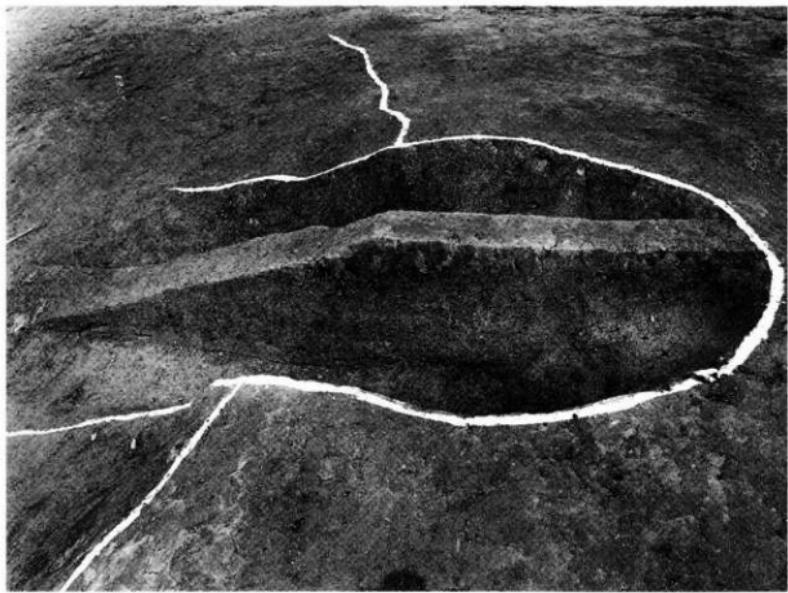
住居跡4(遺構56)全景(南から)



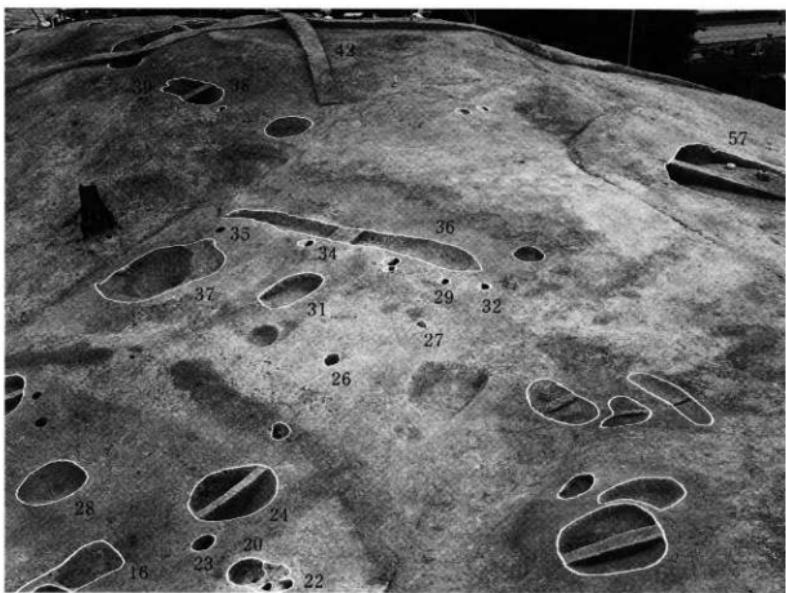
住居跡4(遺構56)全景(西から)



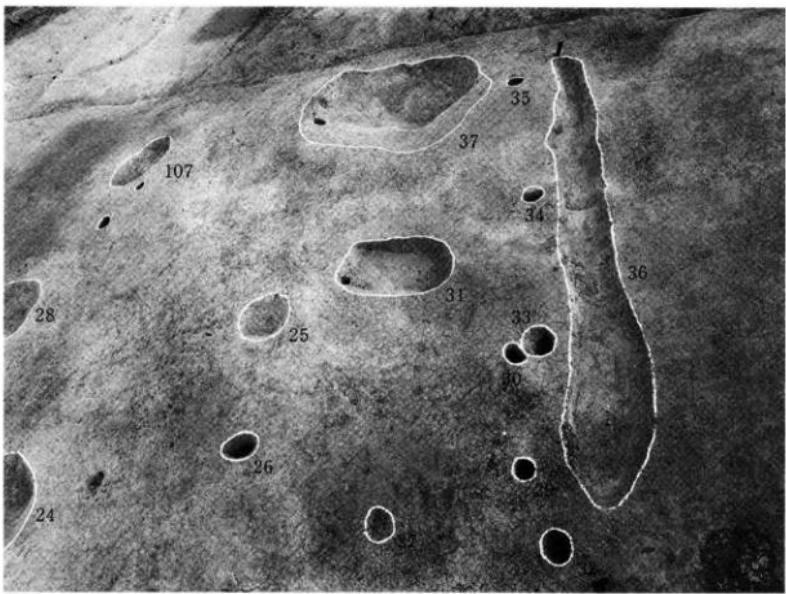
住居跡 4 (遺構 56) 土層断面(南から)



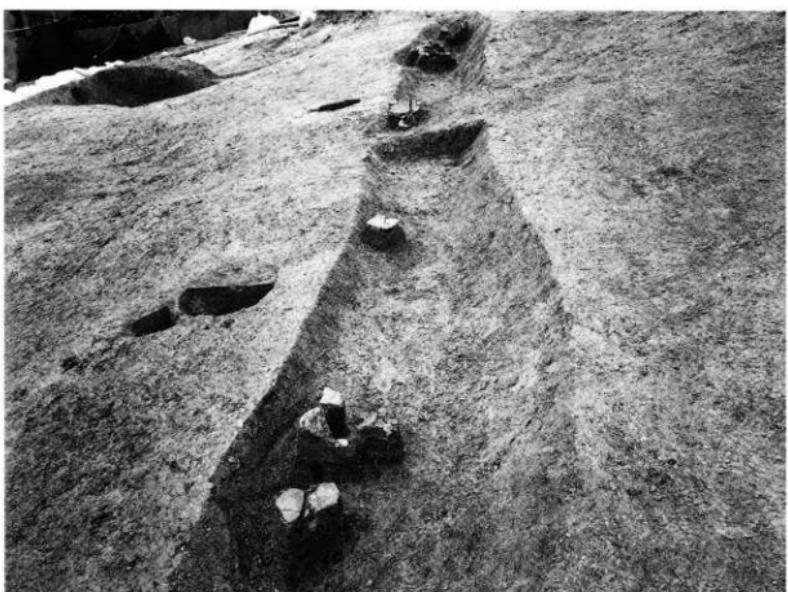
土壤(遺構 115) 土層断面(東から)



1区・3区調査状況 遺構 20~38、42、57(西から)



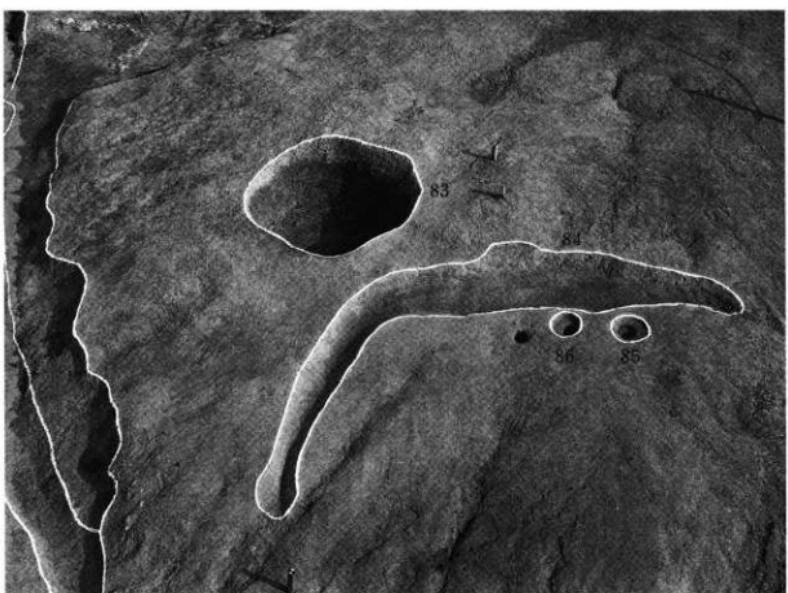
3区 遺構 25~36近景(南西から)



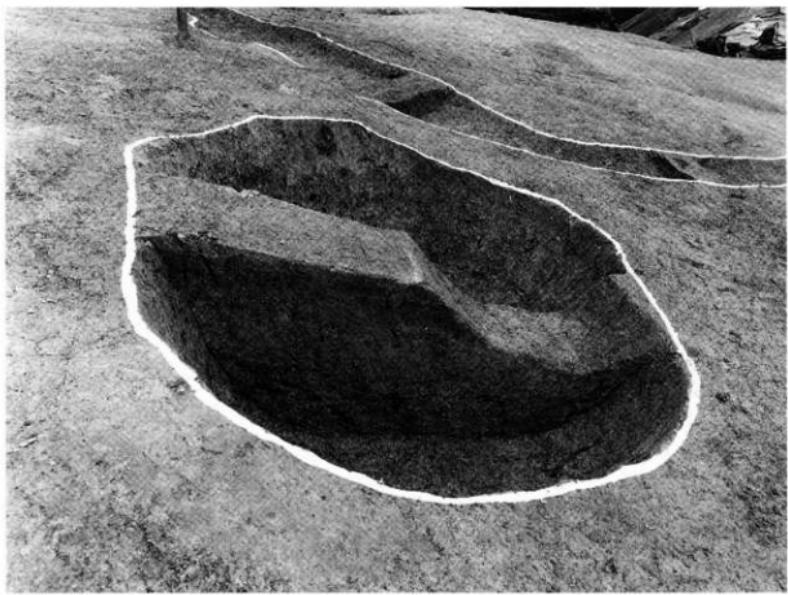
溝(遺構 36)調査状況(南西から)



溝(遺構 36)遺物出土状況(南西から)



土壙(遺構 83)溝(遺構 84)検出状況(北から)



土壙(遺構 83)土層断面(東から)



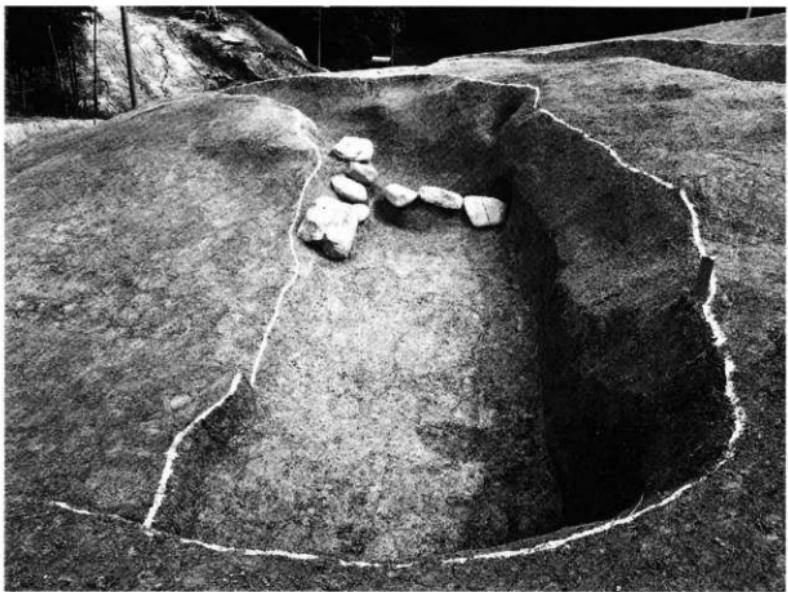
土塗(遺構 37)土層断面(北東から)



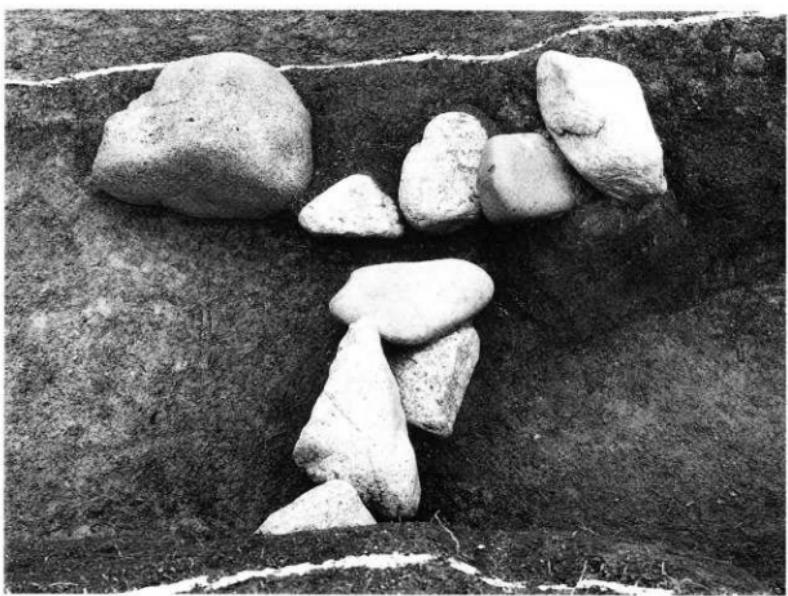
落込(遺構 69)調査状況(東から)



1号墳(遺構 52、54、55)全景(北西から)



石室跡 近景(北から)



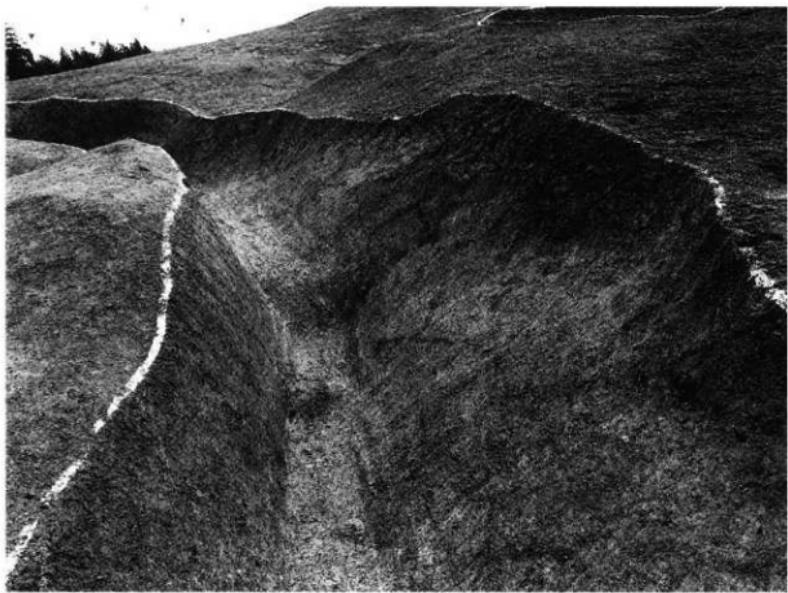
玄門側壁部 石材残存状況(西から)



玄門側壁部 石材残存状況(北から)



周溝(遺構 52)近景(南から)



周溝(遺構 52)近景(北東から)



焼土壤(遺構 66)全景(南西から)



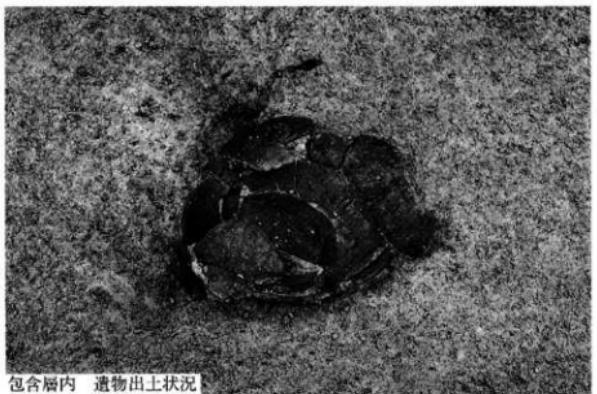
焼土壤(遺構 66)たち割状況(南西から)



溝(遺構 49)土層断面(北から)



谷(西谷)遺物出土状況(北から)



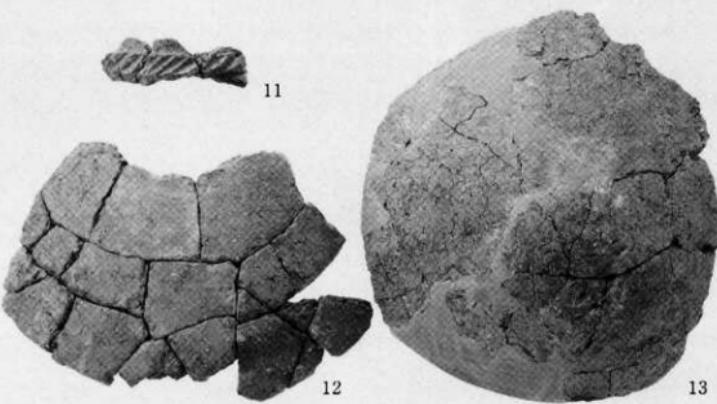
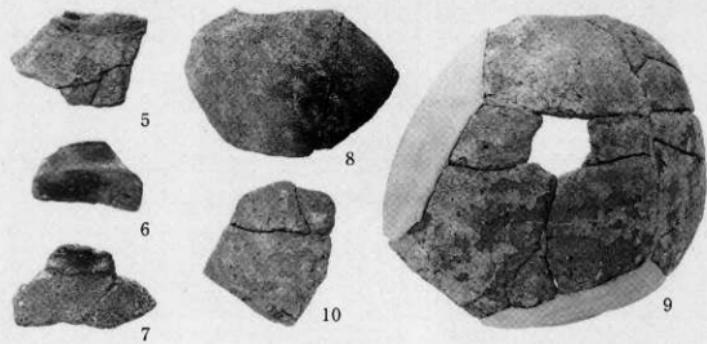
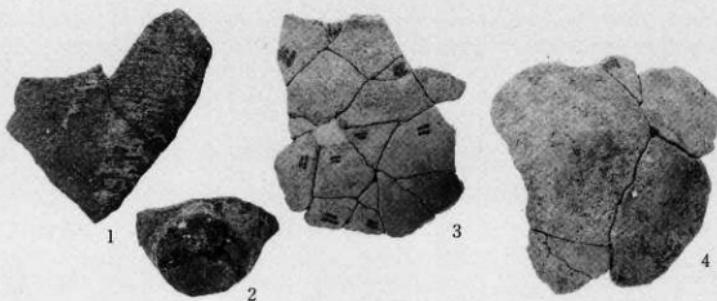
包含层内 遗物出土状况



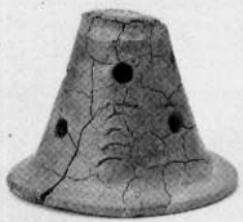
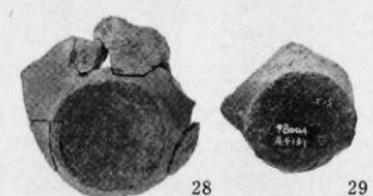
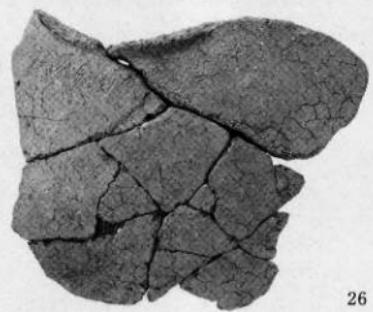
包含层内 遗物出土状况



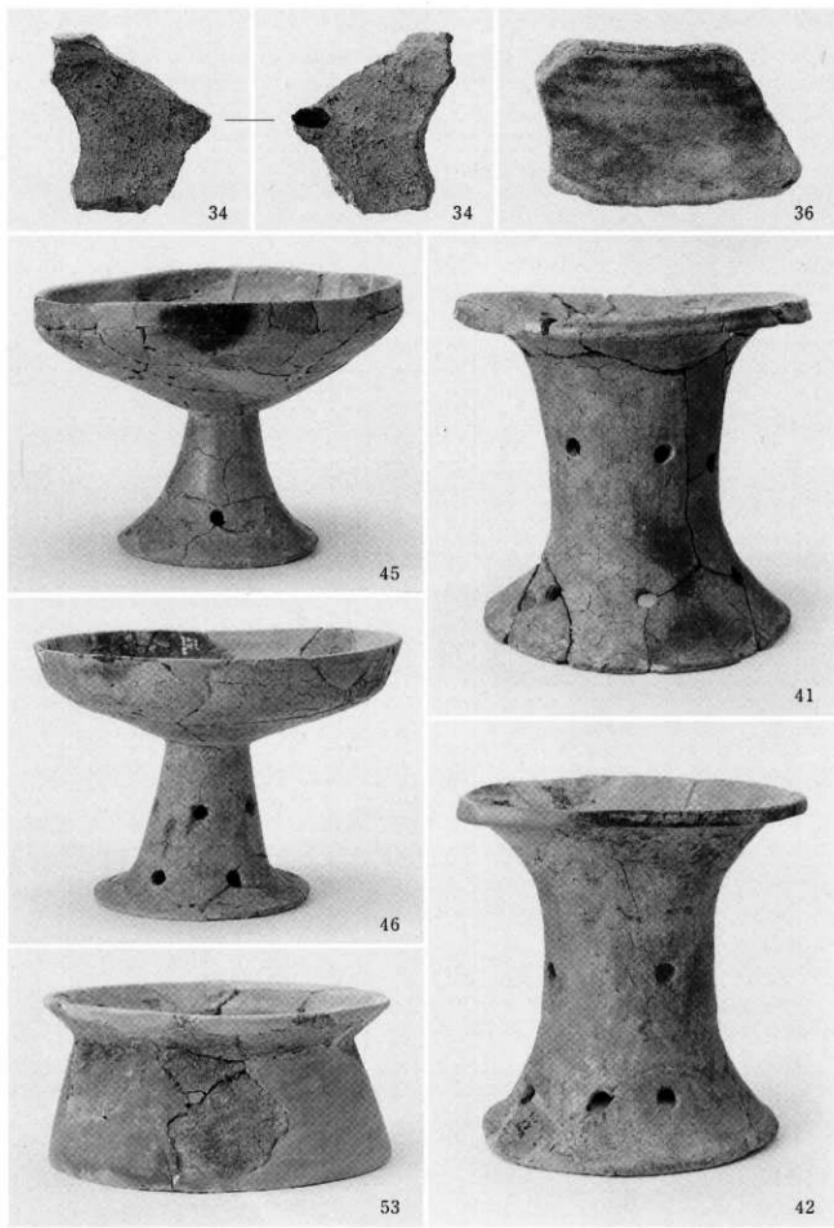
包含层内 遗物出土状况



土壤(遺構 115)出土遺物 1、2 土器棺 1(遺構 41)出土遺物 3、4  
土器棺 2(遺構 12)出土遺物 5~10 土器棺 3(遺構 50)出土遺物 11~13

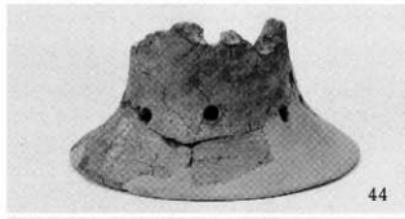
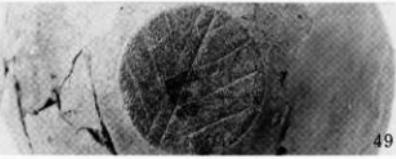


住居跡 1 (遺構 90) 出土遺物 26~33、35



住居跡 1(遺構 90)出土遺物 34、36

住居跡 2(遺構 82)出土遺物 41、42、45、46、53



住居跡 2 (遺構 82) 出土遺物  
43、44、47、48、49、51、52、54



61



60



65



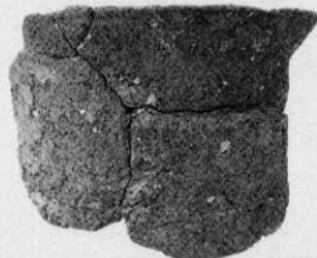
58



66



64



59

住居跡 3 (遺構 71) 出土遺物 58~61、64~66



52



56



62



57



68

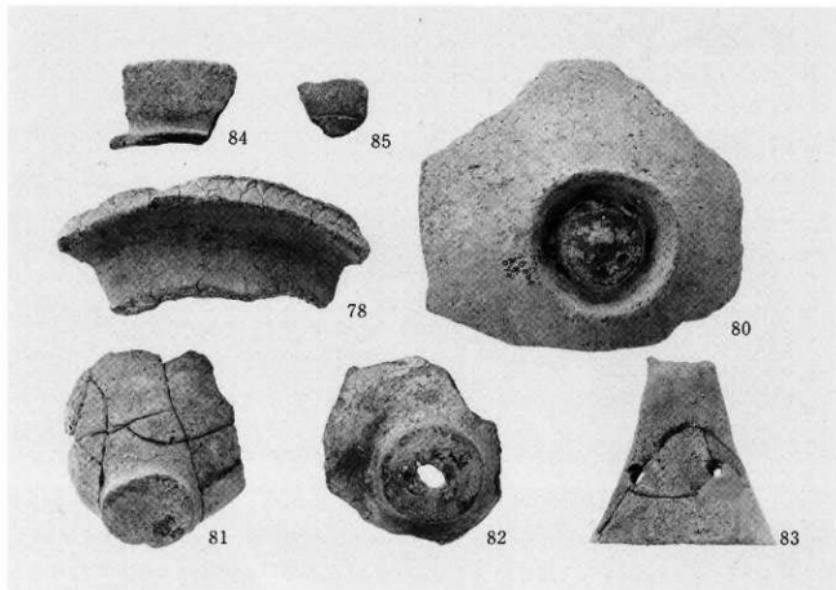
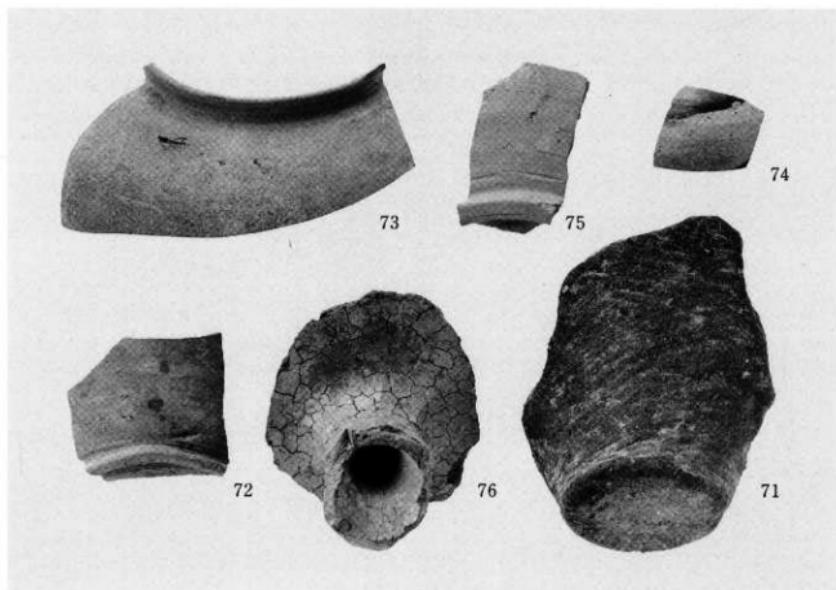


69



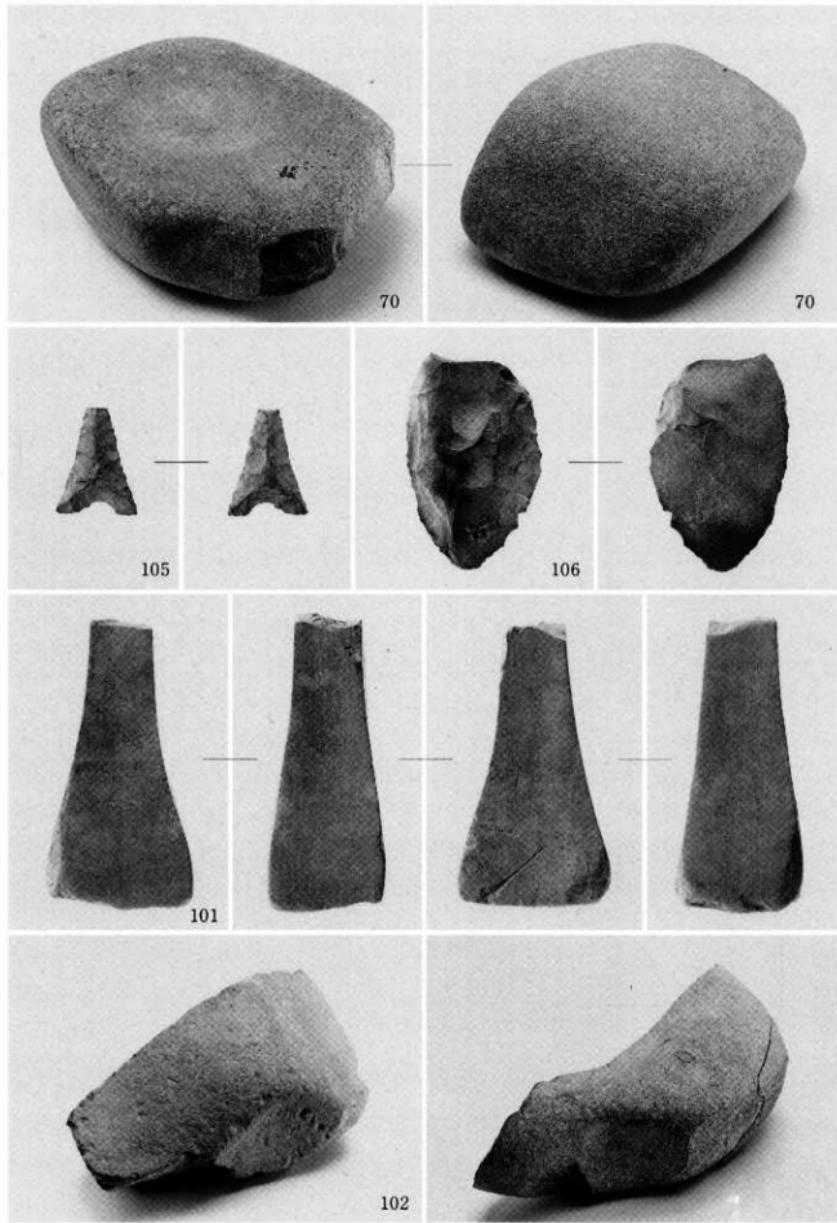
67

住居跡2・3(遺構82・71)出土遺物52、56、57、62、67~69

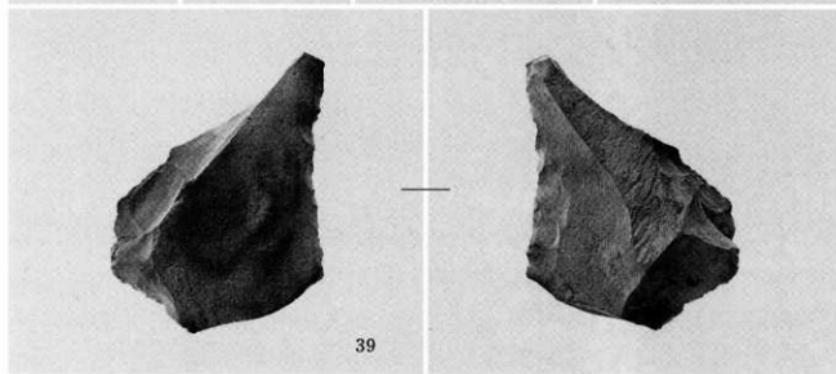
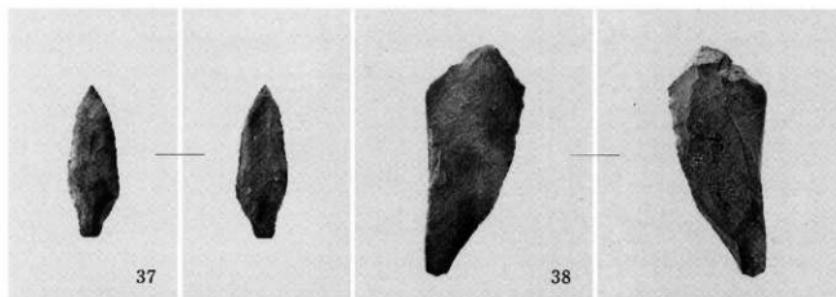
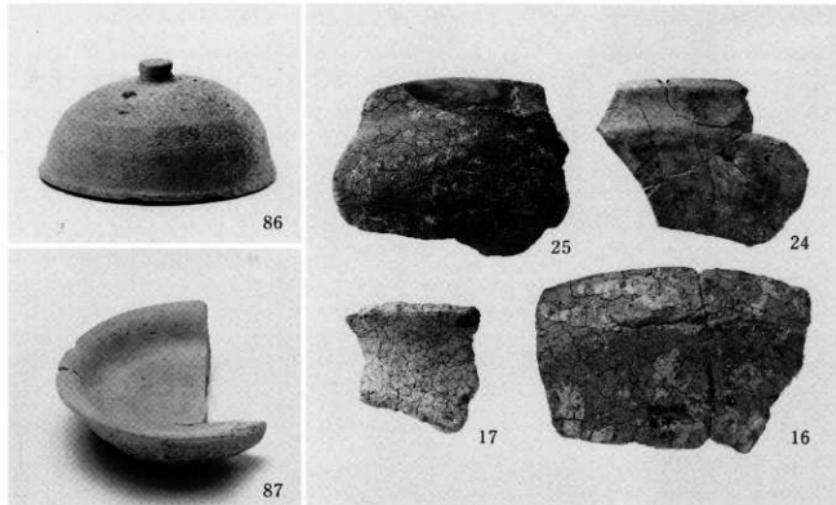


上 包含層および1号墳(遺構55)出土遺物 71~76

下 包含層(西谷)出土遺物 77~85



住居跡3(遺構71)出土遺物70 包含層出土遺物101、102、105、106



溝(遺構 15)出土遺物 16、17 土壙(遺構 18)出土遺物 24 土壙(遺構 64)出土遺物 25  
住居跡 1(遺構 90)出土遺物 37~39 包含層出土遺物 86、8 7



18



19



20



21

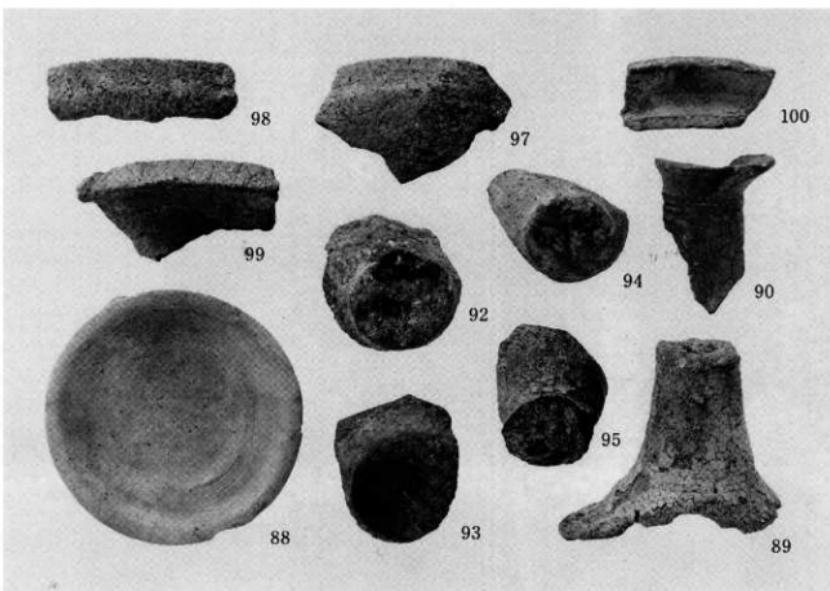
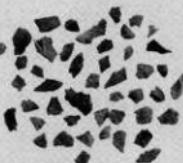
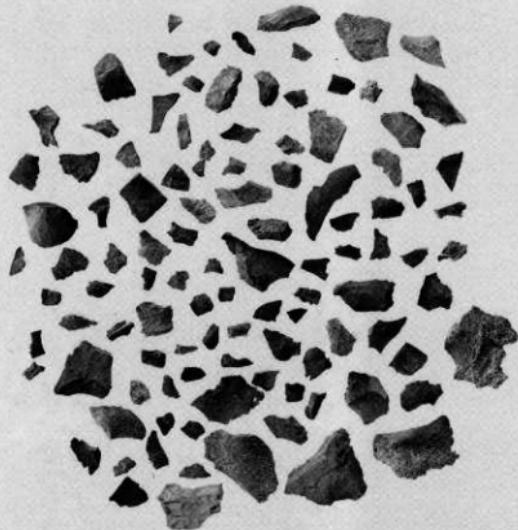


77



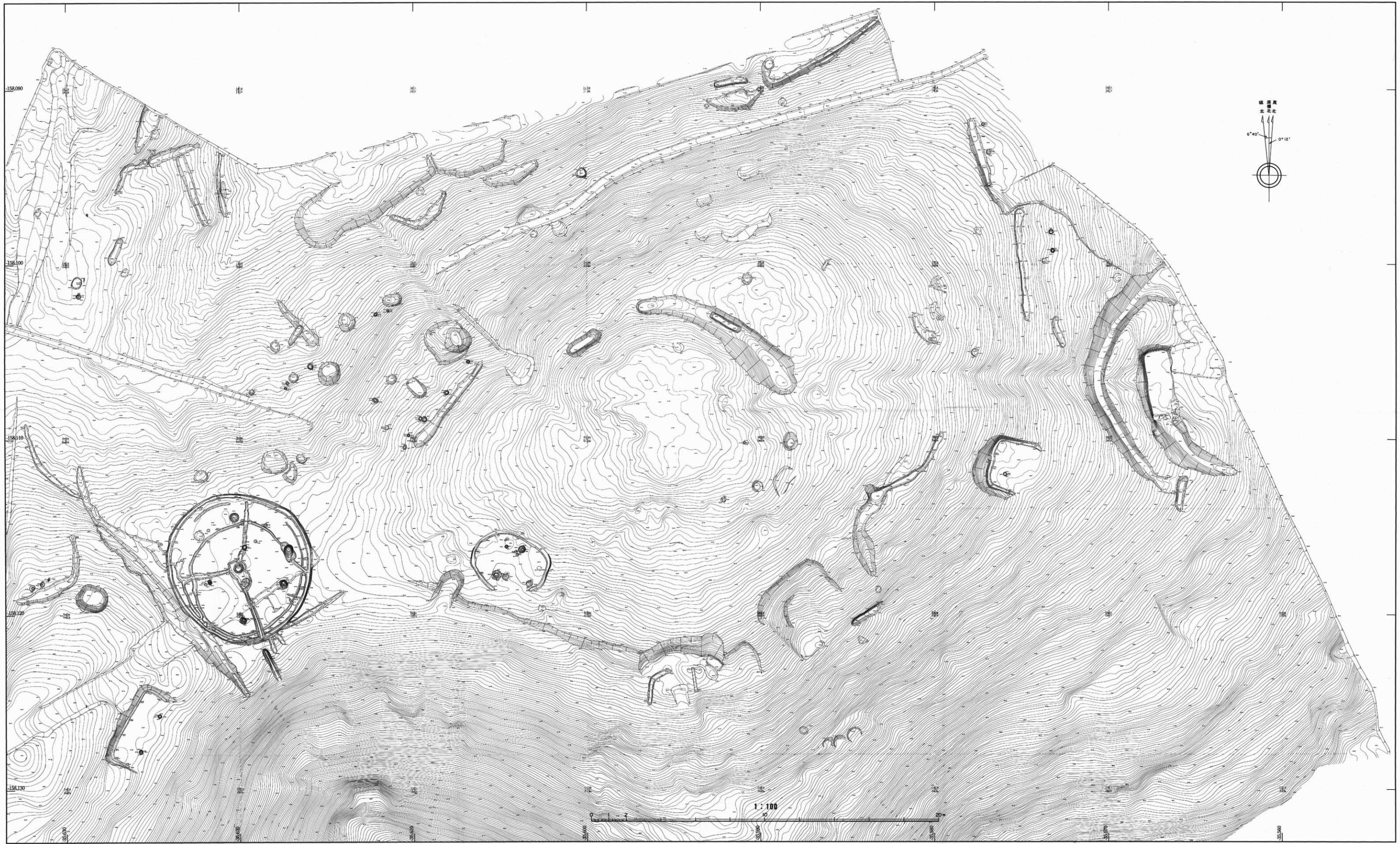
79

溝(遺構 15)出土遺物 18、19 溝(遺構 36)出土遺物 20、21  
谷(西谷)出土遺物 77、79



住居跡 1 (遺構 90) 出土遺物 40 a~c  
包含層出土遺物 88~90、92~95、97~100

# 付図1 尾平遺跡(平面図)(富田林市東板持町所在)



## 付図2 尾平遺跡(遺構図)(富田林市東板持町所在)

